2019年2月号(第394号) 昭和61年7月8日 第三種郵便物認可 平成31年1月19日発行 毎月1回19日発行

新建築

394

2019
SHINKENCHIKU
JUTAKUTOKUSHU

2

特集/リノベーションの醍醐味

新しい価値を想像する20のアイデア

作品/二十題

内藤廣
家成俊勝+赤代武志
武田清明
村山徹+加藤亜矢子
安部良
工藤浩平
塚本由晴+貝島桃代+玉井洋一
魚谷繁礼+魚谷みわ子
山道拓人+千葉元生
+西川日満里+川田実可子
隈研吾
中村好文
横内敏人
髙木貴間
後藤周平
彌田徹+辻琢磨
+橋本健史+川井操
小林佐絵子+塩崎太伸
橋本圭央+白石圭+康未来
小谷研一
松岡聡+田村裕希

KMEW
GOOD DESIGN AWARD 2018
それは、飾らない美しさ
typeM_LAP [内外壁用]
typeM_FLAT [内壁用]
SOLIDO
typeM_LAP
typeM_FLAT
ケイミュー株式会社
www.kmew.co.jp

Architecture aand Urbanism
Forthcoming February, 2019
No. 581
建築と都市　2019年2月号予告

エー・アンド・ユー
2019年2月号／1月27日発売
定価：3,500円（税込予価）
発行：（株）エー・アンド・ユー

〒100-6017　東京都千代田区霞が関三丁目2番5号　霞が関ビルディング17階
TEL：03-6205-4384
FAX：03-6205-4387
振替：00130-5-98119

Feature: The Thinking Hand – Takenaka Corporation and Takenaka Carpentry Tools Museum

特集：手わざと建築──竹中工務店と竹中大工道具館

This February issue focuses on the beauty of architecture conceived by Japanese traditional craftsmanship and features the works from Takenaka Corporation and Takenaka Carpentry Tools Museum.
The Takenaka Carpentry Tools Museum exhibits carpenters of each significant era with its respective challenges, showing the development of tools, methods and the management of timber. Each one of the stages is the result of every craftsman' s wisdom and their pursuit of having better architecture during their time, passing down this history of "craftsmanship" .
Takenaka Carpenter Tool Museum, which moved to a new building in 2014, uses a variety of craftsmanship still present in this age to design the exhibition as well as it spaces, thereby integrating both the spaces and its exhibits into one entity.
Through the history of craftsmanship in Japan from Takenaka Carpenter Tool Museum in the first section of the issue, the second introduces various modern-day adaption of the craftsmanship using works from Takenaka Corporation. (*a+u*)

2月号は、日本の伝統的な手わざが生み出す建築の魅力に着目し、竹中工務店と竹中大工道具館を特集します。
竹中大工道具館には、それぞれの時代で大工が課題に立ち向かい、道具・工法を開発し、木材を扱ってきた歴史が展示されています。その1つ1つは、当時の職人たちが知恵を絞りよりよい建築を追求した結果であり、「手わざ」の歴史を語っています。2014年に新築・移転された竹中大工道具館は、展示はもとより空間そのものも、現代に残る様々な手わざが用いられ、空間と展示物の一体化が図られています。
前編では竹中大工道具館を通して歴史的な手わざを、また続く後編では竹中工務店のものづくりを通して、現代に活きる手わざの数々を紹介します。（編）

A part of the standerd set of carpentry tools.
Photos courtesy of the Takenaka Carpentry Tools Museum.

座談月評

新建築住宅特集2019年1月号

特集／ 2019年 冒険する住宅
家をめぐる建築家の挑戦

批評

評者

内藤廣
建築家
東京大学名誉教授

馬場正尊
建築家
東北芸術工科大学教授

髙橋一平
建築家
横浜国立大学助教

『新建築住宅特集』では、毎月、さまざまな作品や論考、記事を掲載し、広い射程をもって住宅から明日を拓く建築の可能性を伝え記録しています。しかし重要なことは、議論の場をつくることにあります。限られた誌幅の中で示されたものから何を考えていくべきか、それぞれの読み解きや発見を共有し、建築を取り巻く多くの事象や環境と共に議論を重ねること。この座談月評は、その場を広げていくことを目的に掲載します。
2019年1～12月号は、内藤廣さん、馬場正尊さん、髙橋一平さんを評者として、1年を通して前号への批評を座談形式で議論いただきます。それぞれの個別の評と共に、それが相乗して新たな示唆に展開する連載記事として毎月掲載いたします。どうぞご期待ください。
（編集部）

馬場　改めて本誌を通しで読んで、時代性や現在の住まい方、建主と建築家の関係、物流や経済性などについて、何よりも如実に語るのが住宅なのだろうと思いました。たとえば商業建築や公共建築では、集団としての意志がどう建築として立ち現れるかに時代性や社会状況を見ることができますが、住宅では、それが建主という個人を通して純化したかたちで表出され、建築家はそれに向き合うことになります。その独特の関係性や緊張感が滲み出る感じが面白いです。1月号は「冒険する住宅」という特集タイトルがついていたので、誰が、何に、どこに向かって冒険しているのか、逆に過去の住宅はどういう冒険をしてきたのか、掴もうとしながら読みました。めくり始めて早々に巻頭の「**住宅は終わらない**」の石山修武さんに睨まれ立ち尽くしました。僕は石山研究室の出身で、最初に連れて行ってもらったのが「幻庵」です。建築家が小さな住宅から発しようとする社会的インパクトの強さを感じたのを覚えています。インタビューを読み、時代は石山さんが「幻庵」や「世田谷村」などの実践において投げかけたような、材料や素材、その背後にある物流、そして建主と建築家が住宅という物体にどう関係し合うのかという問いの中にまだいるのかもしれないと思いました。その影響もあって私は建築に端を発し、不動産や建材の物流を手がけたりしているのだと今更ながら再認識させられ、まだ師の掌の上にいることに気づいて、複雑な気持ちになってしまいました。

髙橋　最近、instagramやpinterestといったウェブ上の画像共有が普及し、ものの見方の変化を感じます。切り取ったイメージを集めては好き嫌いで選別していくうちに、元の全体像に対する批評や期待が薄れ、部分がもつ効果を重んじる風潮が、つくる現場にも影響を与えていると思います。機能主義、性能主義に続く、イメージ主義とでもいうのでしょうか。建主もより具体的に設計へ介入することになりますし。その意味で、1月号でまず気に掛かったのは表紙です。原田真宏さん麻魚さんの「**半島の家**」の写真ですが、この建築の一部分でしかないキャンチレバーがもつ効果の、さらに表層の部分を切り出し、量感のある塊が宙に浮いて見えます。トリック写真というか、設計者と編集者の共作による「インスタ映え」に見えました。つくり手側も、今後はこうした見方を改めた方がよいのではと、ふと頭をよぎりました。つまり、効果を扱いすぎることで、イメージ主義が却って煽られ、僕らもいずれ苦しめられるんじゃないか。議論や発見や解釈が広がらなくなって、創造性から遠ざかる気がします。たとえば、模型や素材サンプルを用いた検討も、こういうことをするとこう見える、といった効果の確認だけでなく、より概念的なアプローチで臨み、建主に対しても、もっと概念的な話を投げかけた方がお互いによいことが起こりそうです。こうした問題を乗り越えないと、僕らのような若い世代は、今もこれから先も、住宅を批評的につくることが難しいと感じました。

内藤　表紙については、編集部の思想を反映するということもあるけど、皆が何かを感じる余地をつくる商業的な視点からも見る必要がある。だから、何だろうと思わせるものを選ぶという編集の判断は理解できる。でも肝心の誌面の中身において、建築そのものが様式化している印象を強く受けたんだよね。この作品は槇文彦さんの系統、この作品は坂本一成さんの系統といったように類型化していくとすべてはまってしまう。一見自由奔放に見えて、実は過去の価値に絡めとられている、これは危機だよね。一方で、妹島和世さんのインタビューやそれに添えられた作品群を見ていくと、妹島さんはそうした様式や類型化から逸脱しようとする意志がすごく強い人で、それが彼女の特別な資質なのだと改めて思った。誌面で印象的だったのは、2018年の総評で西沢大良さんが建築家の文章の稚拙さについて指摘していたこと。過去1年の文章を読んだわけじゃないけど、もし西沢さんのいう通りだとするなら、それは1年を通して見ていかなければならない問題ですね。雑誌というのはある種の形式だけど、知らない間に建築のあり方や建築家の文章までもがこの形式の中で様式化しているのかもしれない。ある種のマンネリズムにも一定の存在意義があるので、『新建築』はそれでいいかもしれないけれど、『新建築住宅特集』は様式化から意図的に逸脱するように暴れた方が面白い。その方が健全。

馬場　僕は、建築界の王道から外れた路線を歩いてきた者として、『新建築』が様式化されていることにこそ安心感をもっています。様式として確立していないとカウンターとしての距離が測りにくいから。そういう意味では確かに『新建築住宅特集』の方が冒険しやすい

インタビュー「住宅は終わらない」

インタビュー「たくましく生きる家」

「半島の家」

メディアかもしれません。文章も同じで、建築家たる職能の人はこういう文章を書かなければいけないという暗黙の様式が支配しているあまり、ダイレクトなメッセージがかき消されているものが多い。もっと率直な言葉で勝負すればいいのに。主語を曖昧にした文章が多く、それが物事を分かりにくくさせています。

内藤　住宅という概念自体が、プレハブメーカーという巨大マーケットで商品化されたステレオタイプとしていまだに生き残っていて、それが戦後70年を通して解体されてきた。1970年代には毛綱毅曠さんの「反住器」、安藤忠雄さんの「住吉の長屋」、東孝光さんの「搭状住居」といった、暮らしや人間を限界まで追い詰めるような挑戦があった。髙橋さんが西沢立衛さんのところで担当した「森山邸」（『新建築』0602）も住宅をどこまで解体できるかという限界に挑戦したものだよね。それらのカウンターパートとして常に大衆社会と量産住宅があった。今もその戦いの延長線上にいるわけだけど、そろそろこのゲームも終わりにきているんじゃないかな。その意味で石山さんのそれでも「終わらない」という発言は、とても重い意味がある。この先はゲームそのものが変わる可能性がある。暮らしや人間を問い直すような時代を画する作品が出てきた時、きちんとそれを誌面で拾えるかどうかが問われるだろうね。1年間月評をやる中でそうした作品に行き当たった時は、それを徹底的に論じるべきだと思う。具体的な作品を見ていかなきゃね。「**森の生活**」は、最後に載っているようなスケッチを中心に、もっと誌面の表現として徹底的に詰めるべきだった。ソローなんだからね。その立ち位置が鮮明になるような紙面構成と写真が欲しかった。

馬場　確かに「森の生活」といいつつ、家としての形式を色濃く残しすぎているのかもしれません。建主がつくるプロセスに介入している痕跡が、もっとそれが生々しく出ていてもよかったのではないでしょうか。

内藤　僕自身に返ってくるようなところもあるのだけれど、アトリエ・ワンの「**グレープ・ゲイブルズ**」は、彼らがずっとやってきたつくり方。何も文句はないんだけど、それはそれで様式化と紙一重。苦しいところだろうけど、この次の挑戦を見たい。

馬場　アトリエ・ワンは、ある環境の中でどう建つかということを一貫して考えているし、そのスタンス自体が建築として図像化されています。今回は、市街地との距離や周囲のランドスケープ全体を家として捉え、葡萄畑を拡張された屋根として扱っているということを最初の空撮が伝えています。このドローンによる視点もまた、現代的な建築の切り取り方ですよね。

髙橋　これまで建築空間が消費対象となる傾向がありましたが、それが環境へ及び始めています。眺めのよい海辺だけでなく、葡萄畑や農村、あるいは京都というふうに建主が環境に価値を見出し嗜好する時、普通の快適な家ではなく、建築として何ができるのか。誌面に登場する建主像も相まって、現代的問題だと思いました。木村吉成さん松本尚子さんの「**house M**」は冒頭に述べたような危惧の逆で、人間がどのように豊かに生きるかを示すことが「冒険」として構築されて見えました。無骨な構造体やブレースの扱いからは、建築家による視覚的な美意識は些細なもので、もっと大きな価値観があるという印象を受け取れました。ただ、切妻屋根による対称形が前提のように強く、内部空間がまるで既存の構造を現しにした改修のようにも見えることは気になりました。

馬場　2016年にアレハンドロ・アラベナがプリツカー賞を受賞しましたね。いわゆる近代建築の追求してきた美しさとは違うものが評価されるようになった象徴のようで、これからの僕たちは何を美しいと思うのだろうかと考えさせられました。「house M」のように、住みながら手を加えていくことをアフォードするような建築こそが美しいと思う時代がくるのかもしれません。

内藤　この住宅の方が、ものすごい豪邸よりもずっと幸せなんだろうなと感じますよね。富豪が所有するような豪邸の豊かさに対して、自分にも手に入ると思わせるような豊かさの対比が共感を呼ぶのではないかな。でも皮肉なことに、大衆社会ではクリエーターとしての個人が成り立ちにくくなる。だとすれば、このビジョンの行き着く先は、作品をつくる建築家という個人は消えていくのかもしれないね。それが新たなプレハブだとしたら、これは最後にドンデン返しになる逆説だな。

馬場　特にリノベーションにおいてはそうした傾向が増えますね。すでにある状況や厳然とある物体に対し、構築的というより受動的、リアクションにつくっていくことが多いため、おのずと表現性よりも反射によるふるまいやアイデアで構成されることが多くなる。もっと若い建築家になると、表現性を放棄する、その態度自体を作家性とするのかもしれません。

髙橋　僕自身も若いですが、表現性を放棄することには強い抵抗があります。建築がリアクションやアイデアだけでは、会話と一緒に消えてしまう。それは現代的であることとは別で、建築としての痕跡の残し方や抽象的な捉え方のバランスなどを気をつければ表現は維持できるし、そうしたいと思っています。

内藤　「house M」の構造体に普遍性があるのかは気になるところ。ジョイント部はピン構造にして、ブレースで補うという解き方。でも木造では必然的に無理がある。やっぱり簡素さのデザインなのかな。戦後、木構造と親和性を持たせるために100mm角のプレキャストコンクリートで軸組をつくりモジュール化して誰でもつくれるような構造体を提案した建築家がいた。そういうつくり方から展開していく可能性があるのであれば面白いと思った。

馬場　それに関係しそうなのは秋吉浩気さんの「**まれびとの家**」ですよね。3Dで木を切り出す新しいテクノロジーの時代ならではの建築です。これを一般流通にまで展開していけるとするならば、建築家が挑戦するシステムへの冒険になるのかもしれません。

内藤　でも巨大な跳び箱みたいだね。彼はテキストの中でメタボリズムを批判しているけど、菊竹清訓さんが「出雲大社庁の舎」（『新建築』6308）について、日本中どこでも最高の品質でつくれるようにプレファブリケーションを選択したのだといっていたことと似ている。これも木の組み上げ方に合理性や経済性があるかどうかが気になる。ないのであればただのデザイン。五十嵐淳さんの「**褶曲の回廊**」は、平面図を見た時に、住まいとしては逃げ場がないと感じた。俯瞰写真を見ると、周辺は北海道独特のプレハブや新建材で覆われた住宅がずっと続く風景。その中で、何かひっくり返さないと、という危機感はよく分かる。でも、もう少しやわらかなアプローチがないのかな。

髙橋　必要な空間それぞれにあえて個性的なかたちを与え、組み合わせた結果として、ベッヒャー夫妻が撮り続けた工場建築のような外観の現れ方をしているのが面白いです。一方、機能やイメージから生じた部分だけで組み立てられているとも読め、方法が住宅としてはややストイック過ぎると思いました。

「森の生活」

「グレープ・ゲイブルズ」

「house M」

プロジェクト「まれびとの家」

「褶曲の回廊」

特別記事

穴が開くほど見る

建築写真から読み解く暮らしとその先

第4回

乾久美子 × 島田陽
（建築家、横浜国立大学大学院Y-GSA教授）（建築家、京都造形芸術大学客員教授）

「穴が開くほど見る——建築写真から読み解く暮らしとその先」と題して、名作住宅の建築写真を隅々まで掘り下げて読み取ります（第1回は本誌1802、第2回は本誌1803、第3回は本誌1808）。1枚の写真から時代背景、社会状況、暮らし、建築家の思いなど、読み取る側の想像も交えながら細部まで紐解くことで、時代を超えた大切なものを見つめ直し、未来に向けた建築のあり方を探ります。第4回目は、乾久美子氏と島田陽氏のおふたりに公開対談でお話しいただきました。（編）

島田　学生時代から今でも変わらず、雑誌はとにかく穴が開くほど見てきました。特に事務所を始めた頃は青木淳さんや妹島和世さんの住宅が、立体的にどうなっているかがまったく分からなくて、興味がある住宅は手当たり次第に雑誌の図面と写真から模型をつくって、いろいろな角度から濃密に見ました。今回改めて昔の『新建築』を見ようと、神戸大学の資料室に行ったのですが時間を忘れて夢中になりました。こういうものはウェブにはない感動です。大学にあるいちばん素晴らしいものは蔵書で、大学から離れてしまうとそこに没頭しになかなか出かけられません。だから古い資料を端から見て、ものを考えるという時間は改めて幸せだと思いました。学生たちはウェブの中になんでも情報があると思いがちですが、ウェブの中には現在の枝葉のようなものはたくさんあっても古くてよいものを探すのはとても難しい。新しい試みにチャレンジするには改めて歴史をつくってきたものを端から見て、興味のあるものは穴が開くほど見ることで、幹のようなものを見つけるべきだと思います。

乾　建築写真の面白さというのは、その中に自分を投入して、その中を歩き回ることです。私は大学に進学する際に関西から出てきて建築科に入ったものの、どのように友達と建築を語り合っていいのか分からないようなところがありました。東京に出てきて、とにかく面白いものを知りたい、建築とは何かを知りたいという気持ちもあるのだけど、何をどう話していいのかよく分からない。そこで、孤独といえば孤独なのですが、大学の図書館に通って古い建築写真を見続けて、建築とは何なのかを知ろうとしていました。大学1、2年生の頃です。その後は島田さんと似ていて、OMAや妹島さんなどの、明らかに新しい構成論理に衝撃を受けました。そうした新しい建築は図面表現に謎が多くて、ぱっと見ただけではどうなっているのかがよく分からない。そこで私も図面と写真を読み込んで、どういう構成なのかを必死で解読することをしていました。そうやって、謎を解いてやっとその建築の中を想像上で歩き回れた時、本当に嬉しい。リアルな建築をボーッと見に行くよりも面白いかもしれません。普通は複数枚の写真や図面からその建築を一周できるように理解していきますが、今日は1枚。どこまで歩き回れるかやってみましょう。

広い敷地に優雅に建つ平屋／「正面のない家／K氏邸」　坂倉準三建築研究所 大阪支所（西澤文隆、太田隆信）

乾　私は、今日の会場の近くで生まれましたが、1歳の時に親が宝塚に家を建て、そこで高校生の終わりまで育ちました。この「正面のない家／K氏邸」は、実家の近くにありました。阪急電鉄の宝塚駅南口からほど近い山の上にあって、毎日のように通っていた公園の脇に建っていたのです。その姿を見るたびに子供心に「この建物は何かがある」と思っていました。この家のあるエリアは区画が大きいので、平屋で十分な延床面積がとれています。実家の方は、その後に開発された分譲地なので区画が小さいんです。なので、広い敷地に平屋が優雅に建っているという佇まいは憧れで、どんな人のどんな暮らしが展開しているのだろうと想像するだけでドキドキするような存在でした。

この住宅の特徴は庭です。この写真からは、庭を中心に周辺環境と暮らしぶりが見えてきますが、設計者の思想も想像することができます。設計者のひとりである西澤文隆さんは庭園や日本建築の実測研究を続けてこられたことで有名です。この家は写真からも分かるように中央に小高い山をつくって造形的な庭にしていますが、西澤さんが庭園の研究を始める前の作品かもしれないと思いました。なぜなら、この家では絵画的な線を駆使しながら、人工性を際立たせたようなモダンランドスケープをつくっていて、その後の西澤さんの自邸に見られるような、自然風の庭園とは一線を画しています。ただ、若い時代の作品とはいえど、西澤さんは倫理性を追求するような建築家だったはずなので、西澤さんがどういう気持ちで絵画的なモダンランドスケープをトライしようとしたのかが興味深いんです。私がこの写真を穴が開くほど見て気づいたのは、この庭の山がちょっとびっくりするくらいの高さで盛られていることです。そこで、建物を建てる時に出てくる土を全部使ってつくったランドスケープなのではないかと考えています。工事で出る土は、普通は敷地外に捨てることが多いわけですが、出てきた土を場外搬出せずに敷地内で全部使い切るというタスクを自らに課すことで、庭としての倫理性をつくったのではないかと想像しています。それがもし当たっているのだとしたら、私なりに思う西澤さんという建築家の倫理観と合っているような気がして、腑に落ちるのです。

他にもこの1枚からいろいろ読み取れます。庭のペーブが陶器タイルで仕上

「正面のない家／K氏邸」坂倉準三建築研究所 大阪支所（西澤文隆、太田隆信）（1961年、兵庫県宝塚市） 撮影：多比良敏雄

げられていてツルツルしています。どことなく洋風な素材であることを筆頭に、室内にはカーテンがかかっているし雨戸のガラリも洋風です。しかし、外の世界と中の世界を結びつけようという意識はとても日本的なもので、この写真に強く表れています。空間構成は和風にしておきながら、要素は洋風なものにしていくことを意図的にやっているようで面白いです。雨戸は建物からはみ出していて特殊なディテールです。西澤さんも実測したはずの三井寺の勧学院や光浄院といった書院造りに、妻戸といって壁がはみ出すディテールがあるのですが、そういうものを参照にしながらこのディテールを思いついたのかなと想像できます。あと、中央の袖壁にゴルフクラブがさりげなく立てかけられています。宝塚界隈には有名なゴルフ場がいくつかあって、そこに通っていたであろう裕福な家族像も見えます。どこかで読んだことがあるのですが、建主夫婦は大阪に働きに出て、宝塚に住んでいたとありました。大阪や神戸に働きに出て山あいの郊外住宅地に暮らすというのは当時の関西ではひとつの暮らしの理想形で、この建主が当時の憧れのライフスタイルを具現化されていたのだとこの庭に置かれたゴルフクラブから見て取れます。

島田　昔の写真は白黒なので色が出てこないのですが、この写真の説明にウルトラマリンの壁とか書いてあって、思ったよりかなりカラフルなんですよね。写真の左の部屋には縁側のような小さいデッキがありますが、どんな意図なんでしょうか。

乾　今回選んだ写真には写っていないのですが、この家には庭と建築を繋ぐ中間的な役割の中庭があり「パティオ」と呼ばれています。カラフルで綺麗なタイルがロバート・ブール・マルクスばりのパターンで貼られていて、さらにカラフルなモビールが吊り下げられていたり、人工性を強調するようにつくられています。写真に写っている縁側もある意味形式のひとつのようにも見えて、意識的に中と外の庭を対比していたり、日本的な構成と洋風素材を対比させたりしていますね。また、この写真をしげしげと見ていると、建物の背景に写っている乾いた山の雰囲気が気になりますが、六甲山は当時森林資源として使い倒され一時期ハゲ山と呼ばれていて、その後少しずつ植林をして植生が回復しつつある様子が見受けられます。この庭の敷地や周辺に立っているアカマツも公園の周りに多く見られたもので、これも植林の一部だったのかと思います。西澤さんもできるだけ敷地内にあるアカマツを残したのでしょう。また、この写真からは、砂防ダムが多いこの界隈の乾いた土の風景が感じられ、この場所が持つ空気感が出ているように思います。

人のふるまい・マナーがセットになった住宅／「傾斜地に建つ家」　林雅子

島田　僕が林雅子さんの「傾斜地に建つ家」を選んだのは、今まで自分があまり穴が開くほど見てこなかった謎がある住宅を探そうと思ったからです。これは林さんが独立してすぐの1958年の作品ですが、さまざまな大胆さに衝撃を受けました。まず題名の通り傾斜地に建っており、その高低差を使った中央の吹き抜けが空間を大胆に分節しています。写真の手前が客間で、吹き抜けを介して向こうが主寝室です。主寝室の吹き抜け側には何か飾り

「傾斜地に建つ家」林雅子
（1958年、東京都世田谷区） 撮影：平山忠治

『新建築』1958年9月号より転載

されていたのかなと思います。手摺も、おそらく住宅の中で暴れることはないから、落ちるような動きを室内ではしないとすればよしとしたはずです。それに対して、現代の建築はほとんど動物を檻に入れるかのように人間を扱います。建築の意味が相当違ってきているように感じられます。

島田 そうですね。それに和室の身体感覚は重心が低いから、この家では室内に手摺をつけようとしたら視線の妨げになったはずで、その繊細さもここに出ています。欄間と手摺の反復されたリズムは最奥で地袋と押入れになり、その隣は同じ高さで文机になっているようです。照明も各室の重心に合わせて高さを変えてランダムに付けているのが分かります。また、写真手前の客間から見て、キッチンのシンクが見えないようになっていて、スパッと見せたいところだけが切り取られていて見え方も繊細です。もうひとつ、この時代の住宅はどこで食事をとるかとかなり模索していたように思います。今だとダイニングテーブルが置かれますが、和室に座卓で食べたこの時代には、カウンターに椅子をおいて食べるスタイルも出てきたりして、ダイニングテーブルというものがはっきりしていない。この住宅では写真の吹き抜けの下にキッチンが見えますが、そこにカウンターと椅子が設えてあります。キッチンは少しレベルが下がっているのでキッチンに立つ人と椅子に座る人の目線が合う。キッチンには計りとミキサー、トースターが見えますが、当時の憧れのキッチン用品ですよね。換気扇が見当たりませんが、横の窓下に抜いているようで、キッチンと庭の関係も楽しそうです。それにキッチンの奥には簾のようなものが見えて、後ろに回ると洗濯機やガスボイラーなど新しい暮らしの設備の場所があります。今だと洗濯機は浴室とセットで置かれることが多いのですが、ここでは黎明期の洗濯機の横に流しがあって、ユーティリティが独立しています。その横にバスルームがあるのですがこれがまた妙に広い。この時代の新しい暮らしへのチャレンジみたいなのが見えてすごく面白いです。

棚のようなものがあって、人形なのか小さな置物が可愛く飾ってあります。断面図には猫が描かれていたので、これは猫の通り道だったのかもしれません。2階の手前と奥の部屋にはそれぞれ異なる階段でアクセスするので手前の客間は立体的な離れみたいな位置付け。なんともいえない距離感です。客間の欄間と襖の関係が吹き抜け側では反転して手摺と障子になり、その向こうの寝室は驚くことに襖を開いて手摺が一切ないんです。林さんの解説文を読んでいると「大人の室だから」とあっけらかん。そして右側の障子の開口部には、ガラリ戸や雨戸がレイヤーになってその外はデッキの空間ですが、結構高さがあるにもかかわらず600mmくらいの手摺しかありません。この年代の住宅を見ていくと、とにかく手摺がとても低いです。

乾 この年代の住宅の大らかさは素晴らしいですよね。今回改めて西澤文隆さんの書かれたものを読んだのですが、それを彷彿とさせます。建築は人のふるまいとマナーがセットで空間がつくられていたという内容です。見えているんだけど見ず、聞こえているんだけど聞かずというマナーが、当時は当たり前のように成立していたんだと思います。西澤さんのテキストと同じような時期に建てられた林さんのこの家も、そうしたマナーとセットで検討

社会的な機能をプログラムに持つ最小限住宅／「立体最小限住宅No.38 石津邸」 池辺陽

乾 この家は最近通っている設計JVの事務所の近くにあったのを偶然見つけたということもあり、選びました。この写真では一見大きい家のように

見えますが、テラスに座っているコリー犬や中にいる建主の石津さん夫婦との比較でかなりコンパクトであることが分かります。本物を見つけた時も、こんなに小さかったのかとびっくりしました。さらに見ていくと背後に瓦屋根の民家やビル見えていて、都心の最小限住宅として建っていた様子が分かるのと、背後の隣家の屋根がこんなレベル差で見えていることからも、北側に傾斜した斜面地であることが分かります。写真正面がリビングルームで、1段落ちたところにキッチンがありその上に主寝室が載っていて、手前左の低いボリュームが子供室という構成です。先ほどの「傾斜地に建つ家」と断面構成が似ているのですが、おそらく当時、リビングルームとキッチンの距離感を段差で確保するというのが新鮮な解決方法だったのかと思います。この家は都心の住宅でありながらも、レベル差だけで大きな広がりを獲得しているのが素晴らしいなと思います。

有名な話なのですが、この家の建主は「VAN」という1960年代流行したファッションブランドの社長で、建築家と建主との出会いをつくる企画を雑誌『モダンリビング』で行い、その最初がこの「No.38 石津邸」で、『モダンリビング』では「ケーススタディハウス No.1」と名付けられていました。天井の高いリビングルームが特徴ですが、商業的な撮影スタジオなどがない当時、このリビングルームでモデルにVANの服を着せて撮影をしていたそうです。北側斜面を利用して北側採光を安定させ、撮影スタジオとして使いやすいものとしてつくられたのではないかと思います。社長自ら自宅を撮影スタジオにしたということで、空間の使い方に対して新鮮な感覚をもっていたことに驚きます。この家は1957年にして、住まいに社会的な機能を持ち込むということを実践している。しかも核家族のものだった最小限住宅に、そのような使い方を発見しているようなところもあると思います。新しい暮らしの先駆けだったのではないでしょうか。この家はその後、息子さんがメインの住まい手に変わった際、宮脇檀さんが増築して写真左のテラスに2階がつくられてます。このテラスが最初から一種の人工土地としてつくられていたのか分かりませんが、坂出人工土地が1962年に考案されるよりも数年早くこういう作品がつくられていることに驚きます。No.38はすべて現場打コンクリートです。乾式建設の研究者でもある池辺さんの中で、どちらかというと特殊な部類に入る建築といえると思いますが、常に先見的にいろいろなものに挑戦されていたことが、建築を人工土地としてつくるアイデアに表れていると思います。

さらに写真をよく見ていくと、リビングのテーブルの上には当時大量生産が始まったアルマイトのやかんなどのキッチン用品が置かれています。こうしたアルマイト製品がインテリアの重要なアイテムとし堂々と置かれているというのが時代を感じさせますね。コリー犬という種は最近ははやっていないようですが、当時は洋風でファッショナブルな存在だったのでしょう。このコリー

「立体最小限住宅 No.38 石津邸」池辺陽（1957年、東京都新宿区） 撮影：平山忠治

『JA』57号より転載

犬のかっこよさと対比的なのが、2階の生活感溢れる洗濯紐です。しかも洗濯紐が、荷造り紐をいくつか繋ぎ合わせてつくっていたのか、結び目があって可愛らしいです。物資がまだまだ少ない時代を感じさせる結び目だなと、要するにものが大切に扱われていたということがよく分かります。そして石津さんご夫婦が談笑しながらリラックスして写っていますが、ファッション業界の一線で活躍しておられるからか撮られることに抵抗がなく見えるし、都心の最小限住宅で具現化した自分たちのライフスタイルがメディアに出ることに誇らしさを感じているように思います。そうした心意気が、かっこよくこの1枚の写真に収まっていて素晴らしいと思うんです。

島田　おしゃれをされたふたりが隣り合って座って、その傍らにはコリー犬という、かなりハイセンスなライフスタイルですよね。コンクリートだから池辺さんがデザインした有機的な造形の華奢なテーブルも印象的に見えるし、階段の薄い踏み板と支柱の造形が映えますね。以前雑誌で清家清さんと石津さんが対談している記事を読んだことがあって、「俺の家はコンクリートでつくったから潰すに潰せない」みたいなことを言っていました。結果的にそれがその後改装に改装を重ねて未だに生き残っているというのは、示唆に富んで面白い話です。

色どられたモダニズム最小限住宅／「SH-1」　広瀬鎌二

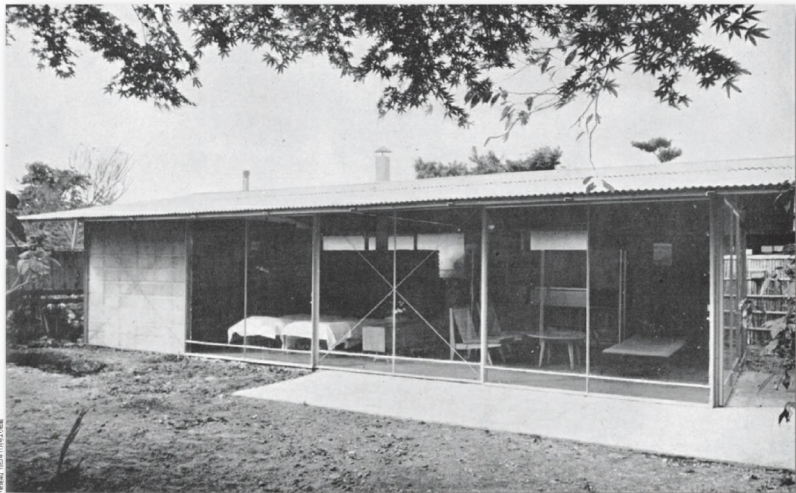
島田　この企画で広瀬鎌二さんのような、現代でもたくさん研究をされて読み込まれている方の代表作を選ぶのは勇気がいりましたが、改めて発見しようという意気込みで選びました。この家の柱は40mm角で、筋交いの鉄筋が6mm、アングルが65mmで、当時でも鉄骨屋さんがつくれなくて、サッシ屋さんがつくってくれたというくらいスレンダーなものです。家具も全部設計されていてベッドにもブレースが入っており、ベッドのブレースと住宅のブレースが同じ位の寸法です。65年前の住宅ですが、現在僕らが考えるような家具のスケールと建築のスケールを混ぜ合わせるようなことが起こっている。そういう突き詰めた美しさに惹かれる人は多いと思うのですが、僕が一番驚きだったのは色でした。掲載された『新建築』の解説文には鉄骨は内外ともにわずかに紫がかった橙色と書いてあります。当然ながらシルバーとか白とか、無彩色を想像していました。ブロックは寝室を含めて内外すべて淡緑色って書いてあるのです。広瀬建築はモノトーンで非常にストイックなミニマムな世界と想像していたのですが、どうもこの家はとてもカラフルですね。屋根のフィンクトラスもオレンジ色のようですからね。白黒の写真だといわゆるモダニズムの最小限住宅ですが、この色の情報を持ってこの写真をじっくりと眺めるとミニマムでありながら、新しい時代への新鮮な息吹、ポップさすら感じられます。

もうひとつ気になったのは、写真で見えてくる丸座卓で食事をとることです。低い椅子とデイベッドもあって、丸座卓がちょっと大きめだから来客があってもここでもてなしができるということを広瀬さんは言っていますが、毎日ここでご飯と味噌汁を食べるというのは不思議です。「傾斜地に建つ家」もそうですが、この時代食事をどこでどうとるかは過渡期だったのでしょう。ちゃぶ台に座布団から椅子が出てきてもまだ重心の低い机と椅子で、応接と一緒という昔の茶の間ですよね。それでも窓辺にミシン、屏風の仕切り、ベッドとキッチンを仕切るのはペチカでそれを蓄熱するレンガ。最小限でとても暮らしやすいスケールと間取りだと思います。

サッシのガラス割も面白いです。規格寸法のせいか下に少し不思議な寸法で割られています。庇に隠れる上の方で欄間状に割ることも考えられますが、割れ替え等も考えておられたのかな。そのガラス面を挟んだ犬走りの土間と室内のフローリング床の段差のなさは驚くべきもので、おそらく暴風時には雨が入ったのではないかなと思いますが、新しい時代の新鮮なチャレンジが感じられます。同時に写真左端には竹垣が見えます。鎌倉という土地と調和させていて、その挑戦と調和のバランスが面白いです。

乾　先程の話と同じかもしれませんが、この時代の近代建築って本当に色

「SH-1」広瀬鎌二　（1953年、神奈川県鎌倉市）　撮影：平山忠治

『新建築』1953年11月号より転載

が使われていますよね。清家清さんの「斎藤助教授の家」のブルーなどはとても印象的ですが、絵画的な美意識やモダニズムなどの影響が大きいと思います。また、プロダクトデザインと建築デザインが一体的に写真に収められているのが印象的なのですが、当時はそれらを連続的に語ることができた時代だと思います。建築だったら最小限をつきつめることだったり、プロダクトだったら家事の省力化みたいなことがあって、同じような目線でプロダクトと建築がつくられている。それらが一体となって空間をデザインしたいという欲求があったのだと思います。それに対して現代はものの種類と数に溢れている時代なので、なかなかプロダクトと建築のデザインを一体的にプロデュースしていくことが難しいように思います。

戦後間もない住宅の志を現代の目で見る

島田　住宅は撮影される機会が少ないので、発表時の写真しかないことも多く、それが白黒の場合は、前回に内藤さんが言われている通り、深みや湿度などの情感は伝わるのですが、色は想像するしかない。それが今回格別に楽しかった。住宅ではあまり色を使わないのですが、試してみようかなという気になりました。ただ今回の企画を通して、やはり自分がまだまだ古いものを知らないことがよく分かりました。学生、駆け出しの社会人、そして今の目で見返すとそれぞれの立場で発見できることは異なり、これだけ豊穣な住宅の試みの歴史がある国で『新建築』のアーカイブは宝の山です。つぶさに見ると掘り下げて今に活かせるものがたくさんあって、現に今も自分の設計にどう活かそうか考えています。今回の4つの住宅には新しい時代のライフスタイルを創造する新鮮な挑戦、と同時に引き継いできた文化的な遺伝子、ふるまいや周辺との調和の意思を感じました。僕もそのような意思で設計に向かわなければと背筋が伸びる思いです。

乾　今回通して、戦後間もない時期の住宅は、大変な意気込みがあるというか、新しいライフスタイルを建築を通してつくっていくんだぞという希望に燃えていたような気がします。だから時代を経ても瑞々しく見える素晴らしい作品が多いなと改めて思いました。また、今回たまたまなのですがふたつとも坂倉準三事務所に関係がある建築家による家を東京と大阪とで選んだのですが、池辺さんが建築の本質を苦しみながら追求していたのに対して、西澤さんは旦那芸とも言われるような、関西らしい、裕福な暮らしに裏打ちされたライフスタイルを建築にされていて、モダニズムを基調にしながらも全然違うものへと向かっていることが印象的でした。私は「石津邸」のように都市の中でコンパクトに住む家の方が個人的には好みですが、「正面のない家」のような豊かな暮らしを踏まえてつくられたモダンライフスタイルというものをもう一度見返してみてもいいのではないかと思いました。日本の住宅は、その後も最小限の住宅において果敢な取り組みがなされていて、素晴らしい住宅がたくさん生まれていますが、日本の住宅地を見回すと裕福な家が逆に貧相というか、文化的な位置づけがはっきりしないまま、単にお金だけをかけるようなものになっていて、結構悲惨な存在に見えます。そうしたものが生まれてしまう社会は、それはそれでまずいような気がしたりしますね。　　（2018年12月3日、LIXILショールーム大阪にて　文責：本誌編集部）

LIXILショールーム大阪で行われた公開対談風景。

建築陶器のはじまり館

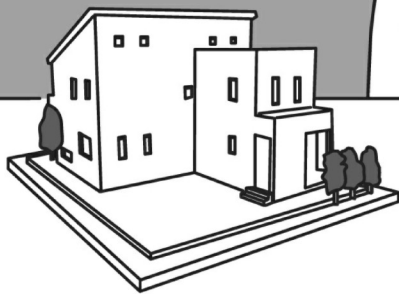
やきものの街であり、INAXブランドのふる里でもある愛知県常滑市に設けられた、株式会社LIXILの企業博物館「INAXライブミュージアム」。その一角に、近代日本の建築や街を支えた「建築陶器」と呼ばれるタイルとテラコッタを展示する「建築陶器のはじまり館」がある。

「建築陶器のはじまり館」は屋外と屋内の展示エリアで構成され、屋外展示エリア（テラコッタパーク）では、「横浜松坂屋本館」（1934年竣工、2010年解体、設計：鈴木禎次建築事務所）のテラコッタや、「朝日生命館（旧常盤生命館）」（1930年竣工、1980年解体、設計：国枝博）の巨大なランタン、鬼や動物などの顔が壁面に10体並ぶ「大阪ビル1号館」（1927年竣工、1986年解体、設計：渡辺節建築事務所［村野藤吾］）の愛嬌あるテラコッタなど、13物件のテラコッタが、本来の姿である壁面に取り付けた状態で展示されている。屋内エリアでは、フランク・ロイド・ライトの代表作のひとつとして知られる「帝国ホテル旧本館（ライト館）」（1923年竣工、1967年解体）の柱型の実物展示を中心に、明治時代につくられた初期のテラコッタから、関東大震災を経て1930年代の全盛期に至る、日本を代表するテラコッタ建築とその時代背景が紹介されている。このような、近代建築で実際に使用されたテラコッタを長年にわたり継続して収集・保存・公開してきたことなどが評価され、「INAXライブミュージアム」は2013年「日本建築学会賞（業績）」を受賞している。

また、「建築陶器のはじまり館」の建屋のファサードには、同ミュージアム内の「ものづくり工房」で製作されたテラコッタが使用されている。建築陶器の歴史的価値だけでなく、現代の建築におけるやきもの装飾材の可能性も体感できるため、屋内外をぐるりと散策しながら見学されてはいかがだろうか。　（編）

左：「建築陶器のはじまり館」外観。右：屋外展示エリア（テラコッタパーク）。

所在地：愛知県常滑市奥栄町1-130
tel：0569-34-8282
営業時間：10:00～17:00（入館は16:30まで）
休廊日：水曜日（祝日の場合は開館）、年末年始
入館料：一般600円、高・大学生400円、小・中学生200円（税込、ライブミュージアム内共通）　※その他、各種割引あり
web：http://www.livingculture.lixil/ilm/terracotta/

建築が
大好きだ。

© 新建築住宅特集2019年2月号／第394号
2019年1月19日発行　毎月1回19日発行
定価2,057円　本体1,905円
振替：00150-6-30658

［編集発行人］吉田信之
［編集長］西牧厚子

［表紙・誌面フォーマットデザイン監修］　K2
［発行所］株式会社新建築社
東京都千代田区霞が関三丁目2番5号
霞が関ビルディング17階　〒100-6017
tel. (03)6205-4380（代表／総務・出版）
(03)6205-4381（編集部直通）
(03)6205-4382（広告部）
(03)6205-4392（写真部）
fax.(03)6205-4386（代表／総務・出版）
(03)6205-4387（編集部・広告部・写真部）
青山ハウス
東京都港区南青山二丁目19番14号　〒107-0062
tel. (03)6455-5596
fax.(03)6455-5583
e-mail　jt@japan-architect.co.jp
URL　http://www.japan-architect.co.jp
［印刷所］大日本印刷株式会社
［取次店］トーハン　日販　大阪屋栗田　中央社　鍬谷　西村

表紙の写真　6つの小さな離れの家
武田清明建築設計事務所

CONTENTS

リノベーションの醍醐味――新しい価値を創造する20のアイデア

作品20題

016　住居 No.1　共生住居　内藤廣建築設計事務所
022　特集論考1：桜と木蓮　内藤廣
027　批評：死を含み込んだ生の形式　能作文徳
028　No.07　ドットアーキテクツ
033　特集論考2：生きている場所　家成俊勝
036　6つの小さな離れの家　武田清明建築設計事務所
046　天井の楕円　村山徹＋加藤亜矢子／ムトカ建築事務所
054　コヤトキトツキ　安部良／ARCHITECTS ATELIER RYO ABE
062　東松山の家　工藤浩平建築設計事務所
070　ハウス・アトリウム　アトリエ・ワン
076　特集論考3：住宅作品の住み繋ぎとつくり繋ぎ　塚本由晴
078　頭町の長屋群　魚谷繁礼建築研究所
086　天窓の町家　ツバメアーキテクツ
092　王子学生寮　隈研吾建築都市設計事務所
098　京の温所　釜座二条　中村好文／レミングハウス
104　川　Sen　横内敏人建築設計事務所
112　富良野の異形屋根　髙木貴間建築設計事務所
118　静岡の家　後藤周平建築設計事務所
124　網代の列柱　403architecture [dajiba]
128　須越の架構　403architecture [dajiba] ＋滋賀県立大学川井操研究室
132　上大岡台・百年土間　小林佐絵子＋塩崎太伸／アトリエコ
138　西新井のいえ　橋本圭央＋白石圭＋康未来
144　虎ノ門の住宅（改装）　小谷研一建築設計事務所
150　栗林邸　松岡聡田村裕希

CONTENTS

MONTHLY REVIEW

002　座談月評　**内藤廣×馬場正尊×髙橋一平**

特別記事

004　穴が開くほど見る
建築写真から読み解く暮らしとその先
第4回　**乾久美子×島田陽**

NEWS

156　住まいの環境デザイン・アワード2019発表／2018年度JIA25年賞発表／第28回AACA賞、芦原義信賞発表／実務経験なしで一級建築士試験が受験可能に

EXHIBITION

157　ブルーノ・ムナーリ──役に立たない機械をつくった男／木下直之全集──近くても遠い場所へ──／石元泰博写真展　建築家・磯崎新、内藤廣の仕事　レポート：**渡辺菊眞**

BOOKS

158　小篠隆生　小松尚 著『「地区の家」と「屋根のある広場」── イタリア発・公共建築のつくりかた』／
ティモシー・モートン 著　篠原雅武 訳『自然なきエコロジー 来たるべき環境哲学に向けて』／
中谷ノボル+アートアンドクラフト 著『不動産リノベーションの企画術』／
塩澤珠江　平田オリザ　布野修司 著『吉田謙吉と12坪の家──劇的空間の秘密』

CONSTRUCTION

160

PROFILE・編集後記

161

TOPICS

166

特集

リノベーションの醍醐味

新しい価値を創造する20のアイデア

今月号は、住宅のリノベーションを特集します。
今回掲載する20の住宅で思考された建築家のさまざまなアイデアには、真に豊かな暮らしとは何か、時間を尊ぶ日本の住まいのあり方が根底にあります。そして、若手建築家の主戦場というイメージの強かった住宅のリノベーションは今、経験の差を超えて、多くの建築家の主戦場となっていることも本号から見えてきます。既存の建築に何を見出すか、そこにどんな手を加えるか、または加えないか、その実践と思想はますます多様に広がっています。
そして、複数掲載したマンション1室リノベーションと、町家など伝統民家の再生を目指す建築家の取り組みは、増大する空き家や過剰といえるストックに向き合い、消失が加速する伝統建築の風景を守る意味で、21世紀の都市に必要な一手といえます。現在の状況をポジティブにとらえ、既成概念にとらわれないこれからの暮らしの提案をご覧ください。 小さな住宅のアイデアが、大きなうねりとなって表れるリノベーションという建築の醍醐味を見ていただきたいと思います。 （編）

作品20題

暮らしの変化に呼応し続ける — **住居No.1　共生住居** 内藤廣建築設計事務所
特集論考1：桜と木蓮　内藤廣
批評：死を含み込んだ生の形式　能作文徳

築106年の長屋と暮らしを受け継ぐ — **No.07** ドットアーキテクツ
特集論考2：生きている場所　家成俊勝

既築×減築×改築×増築による暮らしの重層 — **6つの小さな離れの家** 武田清明建築設計事務所

居場所×構造×環境に寄与するもうひとつの天井 — **天井の楕円** 村山徹＋加藤亜矢子／ムトカ建築事務所

境界を曖昧にし環境に溶け込む — **コヤトキトツキ** 安部良／ARCHITECTS ATELIER RYO ABE

複数のストラクチャーで紡ぐ関係性 — **東松山の家** 工藤浩平建築設計事務所

冬日向アトリウムから笑い声 — **ハウス・アトリウム** アトリエ・ワン
特集論考3：住宅作品の住み繋ぎとつくり繋ぎ　塚本由晴

路地を庭に転換し、6軒長屋をひとつの住宅に改修する — **頭町の長屋群** 魚谷繁礼建築研究所

冬温し伝統に編む入れ子の間 — **天窓の町家** ツバメアーキテクツ

昭和の木造住宅を学生寮に転換する — **王子学生寮** 隈研吾建築都市設計事務所

柔らかな明るさで満たされた京町家 — **京の温所　釜座二条** 中村好文／レミングハウス

川沿いの景色と風を取り込む — **川　Sen** 横内敏人建築設計事務所

妻面に張り出すポリカーボネートの土間空間 — **富良野の異形屋根** 髙木貴間建築設計事務所

既存とのずれから生み出される余白 — **静岡の家** 後藤周平建築設計事務所

伝統を受け入れ慣習を解きほぐす — **網代の列柱** 403architecture [dajiba]

歴史を重ねる架構 — **須越の架構** 403architecture [dajiba] ＋滋賀県立大学川井操研究室

庭と繋がる大きな土間 — **上大岡台・百年土間** 小林佐絵子＋塩崎太伸／アトリエコ

夫婦の距離感を転写したバルコニー — **西新井のいえ** 橋本圭央＋白石圭＋康未来

非日常を出現させる三角形の挿入 — **虎ノ門の住宅（改装）** 小谷研一建築設計事務所

家具化した柱で場をつくる — **栗林邸** 松岡聡田村裕希

住居No.1
共生住居

House No.1
神奈川県鎌倉市

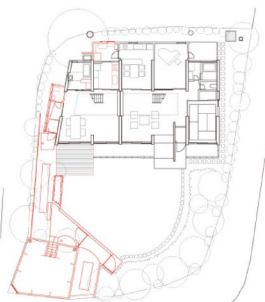
内藤廣建築設計事務所
NAITO ARCHITECT & ASSOCIATES

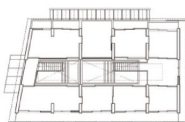
南西側全景。自邸「共生住居」の第3期。2世帯8人の住居として1984年に竣工（『新建築』8408）してから1995年の改築（本誌9511）を経て、2回目の改築。1回目は主に北西側の世帯と駐車場の増築を行った。2回目となる今回は、2世帯住居を1世帯の住居とするために行われた。

リビングA。2世帯を仕切っていたリビングAとリビングBの間にあったラワン材の組壁の下部を取り除き、ナラ無垢材の引き違い戸にし、ひとつの住居とした。

リビングAから南東側を見る。

リビングAから北東側を見る。リビングダイニングとダイニングキッチンの木建具は、ナラ無垢材のガラス框戸に変更。

Renovation
暮らしの変化に呼応し続ける

第2期　2階平面図

第2期（1995年改築）　1階平面図　縮尺1：400

第1期　2階平面図

第1期（1984年竣工）　1階平面図　縮尺1：400

第3期　2階平面図

第3期　1階平面図　縮尺1：150

リビングダイニング。
勝手口を2重扉にした。

ダイニングキッチンからリビングAを見る。

特集論考1

桜と木蓮

内藤廣（建築家）

改築後の2階の書斎の目の前に木蓮の伸びやかな枝張りが間近に見える。2mほどの距離だろうか。春になると白い華麗な花が咲き、やがて碧々と幅広の葉が茂り、秋には葉が落ちるが、私はその後の冬の姿が好きだ。春の開花に備えるために、羽毛のような毛に包まれた2cmほどの小さな蕾が無数に残る。天気がよければ、寒々とした景色の中でこの芽が真珠のように陽光に輝く。巡りくる季節、来るべき春、生々流転、さまざまなことを想起させてくれる。思えばこの木を植えたのは1995年の第1回目の改築の時だった。今や2階の軒を越えるほどの立派な木だが、植えた当時は3mほどの高さだった。あれから23年、さまざまなことがあった。

少し距離を置いて見事な枝振りの桜の木がある。たくましい木だ。この家を建てた時に植えた木だからこちらは35年になる。これも当初は高さは4mほどだったと記憶している。新築した当初、住居の遷り変わりを動かぬ一点から眺める焦点がほしいということで、墓をつくりたい、と無謀なことをいった。当然、それは法令上不可能なことなのだが、その場所に桜が植わっている。桜の足下には、人の代わりにこの家で共に暮らした動物たちが眠っている。春が見頃なのはいうまでもないが、夏の緑陰がありがたい。

書斎から見える景色の中で、桜と木蓮はほどよく釣り合っている。古来から語られてきたように桜が死の象徴だとしたら、私の目には木蓮は蘇生や再生の象徴のように見える。

住宅は変化する生活を支える器だと思っている。以前、住宅は駅のプラットフォームのようなもので、そこにさまざまな列車が留り出て行く、と書いたことがある。そこに発着するのが、人の暮らしであり人の生き死にではないか、というイメージをもっている。桜と木蓮からしたら、このプラットフォームの発着はたいそう騒々しく見えることだろう。

毎月届く雑誌では住宅が次々と発表される。それらの多くは、これから訪れる時間の推移に身構えているように見える。まるで新婚の記念写真のように初々しくて微笑ましい。一方で、それは空間のバリエーションの提案であって、住宅ではそこで過ごされる「時間」こそが主要なテーマではないか、とも思う。

この住居は35年の歳月をなんとかやり過ごして現在に至っている。だから少しは「時間」という問いかけに答える資格はあるだろう。初々しく微笑ましい瞬間から35年、設計した自宅の変化をこの機会に簡潔に書き留めておこうと思う。しかし、これとて一変化のプロセスでしかない。

新築

この住居ができたのが1984年。独立して事務所をつくったのが1981年だから、まだ作品のない駆け出しの頃だった。1955年にこの敷地に引っ越してきて30年近く住んだ木造平屋を建て直してこの住居はできた。

当時のこの住居は、祖母、父、母、弟、私たち夫婦、子供ふたりの8人4世代の住居だった。別の場所に住まうか一緒に住むか、核家族か大家族か、悩んだ末に決めた結論だった。渡欧先から帰国して師事した菊竹清訓の「スカイハウス」（『新建築』5901）は、戦後の核家族を高らかに謳った記念碑的な作品だ。ならば違う道を探してみよう、という意欲もあった。妻も賛成してくれて現代に於ける大家族の住居を試みることになった。

とはいえ、父母も含めてさしたる蓄えがあるわけでもない。住宅金融公庫で借りられる範囲を大きく越えることはできない。当初、コストから木造でしか不可能だと考え、暇暇で30案近く考えた。父母からの諸々の要望を加味しながら、なかなか決定的な案には至らなかった。ならばRC造でどこまでコストダウンできるか、に挑戦することにした。

RCの躯体費を坪単価14万円くらいの極限まで絞り、RC打設後は床を仕上げ、あとは建具を入れるくらいで完成形にたどり着ければ、坪単価35万円前後でできることが分かった。これなら木造単価に近づく。この頃は金の計算ばかりをやっていた。そうやってなんとかこの建物を完成させることができた。あとは住みながら変化に身を任せる、そんなつくり方だった。この時、桜を植えた。

これといって特徴のある形をしているわけでもない住居だから、プランタイプとしては廊下のない異様な構成ではあるものの、世の中からは理解されなかった。雑誌には掲載されたものの建築家のデビュー作としては地味な扱いだった。

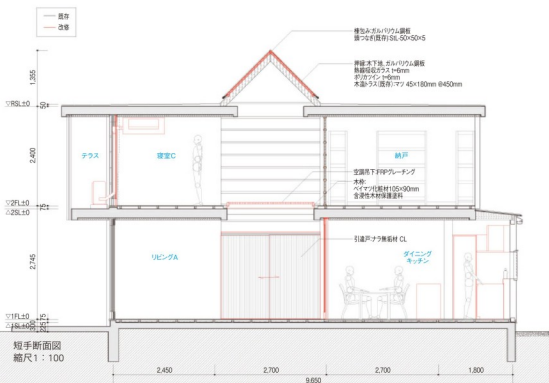
途中部分的に手を入れたが、大きな改築は2度行っている。この住居の構成員の変化が主な動機で、そのおおまかな推移は以下の通りである。

〈1984年：新築〉
8人の住居：祖母、父、母、弟、夫婦、長女、次女
〈1995年：1回目の改築〉
6人の住居：父、母、夫婦、長女、次女
5人の住居：父、母、夫婦、長女
4人の住居：母、夫婦、長女
3人の住居：夫婦、長女
〈2017年：2回目の改築〉
3人の住居：夫婦、次女

1回目の改築

1995年の改築は、祖母が亡くなり弟が商社勤めになって家を出たので、6人で住まうための改築だった。私は30代の半ば、過酷な仕事と出張のため過労気味で、鎌倉から東京の仕事場に通うのが負担になったため、平日は東京で仕事中心に過ごすようになっていた。つまり、この改築の10年前からこの家の住人としては半人前、0.5人の定員になっていた。

子供も次第に大きくなっていったが、一方で父も母も60代後半だったがまだ活動的だった。特に航空エンジニアだった父が定年退職後に人力へ

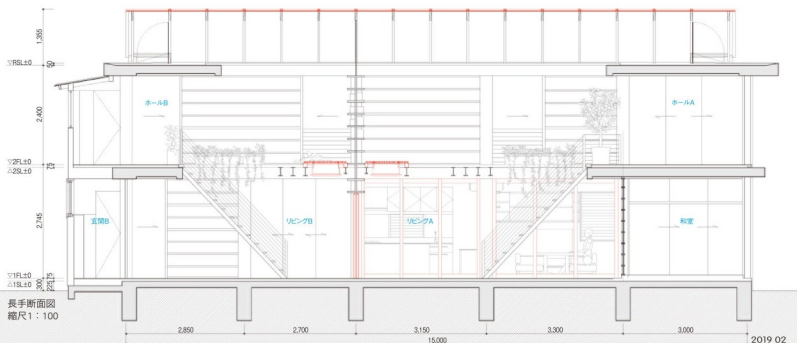
短手断面図
縮尺1：100

リコプターの研究を自宅で始めたので、専有面積は増えるばかりだった。この時初めて父からこの住宅を褒められた。吹抜けも使い道がある、と。吹抜けを分解されたヘリコプターの翼が埋め尽くした時もあった。したがって、われわれの生活を隣に増殖するわけにもいかず、多少なりともテリトリーを改善する目的で改築をした。
エントランスを増築し、浴室と一体だったトイレを独立させ、屋上にテラスを設けた。かねてより問題だった物干場を、駐車場を建築化してその上に設けた。吹抜け上部とキッチンの上のトップライトは冬場のコールドドラフトがきつかったので、内側にポリカーボネイトの複層材を設置した。この時、木蓮を植えた。

2回目の改築

今度の改築は、大きな変化の後だった。次女が家を出て、父が亡くなり、その後を追うように母が亡くなり、ほぼ同じ時期に妻が大病を患った。父と母が暮らしていた隣の大きな領域は無人となった。長女が出るのと入れ替わりに次女が戻ってきたが、ガランとした隣の空間をそのままにしておくわけにはいかない。暮らしを新しく立て直すために、妻の病が少し改善したのを機に、大きな改築をすることにした。
予想外だったのは、母が使っていたピアノ室の床が腐っていて、床をかなりやり替えたことだった。これに手間がかかった。浴室を含めて設備機器も長い年月そのままだったので一新した。1番大きな変化は、30年間2世帯を分けていた中央の本棚の下部を取り除き、そこを大きな建具に付け替えて1階を一体的に繋げて使えるようにしたことだった。
寝室を除いて冷房のない暮らしをしていた。夏は暖気をトップライトの横から抜いて、パッシブな空気の流れでなんとか凌いできた。しかし、さすがに寄る年波には勝てない。リビングにも冷暖房を設置した。また、トップライトも建てた時のままだったので、熱線吸収ガラスに替えた。これによって夏場の環境はかなり改善された。このトップライトだが、以前は至極シンプルな納まりのものだったが、35年もの間メンテナンスフリーで結露も雨漏りもなかった。断熱性能はないに等しいが、納まりは単純な方がよい。
若い時に旅をして強烈な印象をもっていたアフガニスタンの文物を手近に置いている。原点を忘れない気持ちからだ。家具はほとんどのものが旧宅のままだが、新しい居間のカーペットだけは、同じアフガンカーペットを手に入れて敷いた。壁には数年前に偶然骨董屋で手に入れたこの上なく美しいガンダーラの頭彫を守り神のように掛けてある。
新しい居間の中心には大きなローテーブルがほしかったが適当なものがなかったので、事務所の会議室で使っていたフリッツハンセンの天板をそのまま台の上に置いて使っている。この白いテーブルが、やや落ち着き過ぎた空間に明るい印象をもたらしてくれている。

改築後の空間は、やけに広い。この空間の広さが暮らしの間尺に合うには数年が必要だろう。そして、間尺に合う頃には、またこの住居にも予想外の新たな変化が生じているに違いない。暮らしの変化は留まる所を知らない。常に変化し続ける。それでよいのだ。それでも35年前に打設したRCの壁と床は、この変化を受け止めてくれるものと思う。その推移を桜と木蓮は静かに見つめ続けているはずだ。

2点提供：内藤廣建築設計事務所

上：1993年に撮影された吹抜け。内藤氏の父が制作した人力ヘリコプターの翼で埋め尽くされている。
下：現在のホールAとピアノ室を跨いで置かれる翼。

長手断面図
縮尺1：100

ホールAから吹抜けを見る。トップライトを熱線吸収ガラスに変更し、夏の暑さを抑えた。リビングに冷暖房を導入するため、吹抜けに天井吊形の空調をFRPグレーチングに固定して設置。

リビングBからリビングAを見る。

西側全景。

住居No.1　共生住居

所在地／神奈川県鎌倉市
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦＋子供1人

設計
内藤廣建築設計事務所　担当／内藤廣
市川弥穂（元所員）

施工
泰進建設　担当／池部泰広
建築　WAISTYLE　担当／水上洋介
電気　東晃電機

構造・構法
主体構造・構法　鉄筋コンクリート造
基礎　鉄筋コンクリート連続基礎

規模
階数　地上2階
軒高　5,595mm　最高の高さ　6,800mm
敷地面積　462m^2
建築面積　147m^2
（建蔽率31.43%　許容40%）
延床面積　248m^2
（容積率53.68%　許容80%）
1階　139.7m^2　2階　108.3m^2

工程
設計期間　2017年1月～5月
工事期間　2017年6月～10月

敷地条件
地域地区　第一種住居専用地域
道路幅員　東3.3m　西2.6m　南3.9m
駐車台数　3台

外部仕上げ
屋根／シート防水（既存）
外壁／コンクリート打ち放し（既存）
開口部／木製建具（既存）　アルミサッシ（既存）
トップライト／木造トラス（既存）　熱線吸収ガラス　ガルバリウム鋼板

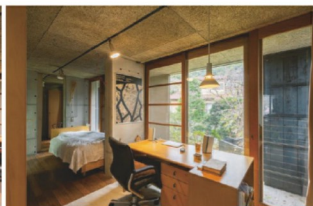
内部仕上げ
リビングA
床／ラワン無垢フローリング t=13mm（既存）
壁／コンクリート打ち放し（既存）
天井／ドリゾール板打ち込み（既存）
間仕切り引き違い戸／ナラ無垢小幅板張り St溝型鋼黒皮
下足入れ／木製造作 ナラ柾練り付け
和室
床／畳（既存）
壁／コンクリート打ち放し（既存）　左官仕上げ（既存）
天井／ラワン合板目透かし張り（既存）
仏壇収納／シナ合板 塗装
リビングダイニング
床／ケンパス無垢フローリング t=13mm
壁／コンクリート打ち放し（既存）　化粧木パネルおびのこめ松目透かし張り
天井／ドリゾール板打ち込み（既存）
間仕切り引き違い戸／ナラ無垢 木製ガラス框戸
飾り棚／既存ラワン材加工
ダイニングキッチン
床／ケンパス無垢フローリング t=13mm
壁／コンクリート打ち放し（既存）　PB 下地 AEP塗装
天井／ドリゾール板打ち込み（既存）
システムキッチン／ TOTO
間仕切り引き違い戸／ナラ無垢 木製ガラス框戸
作業台／木製造作 ナラ柾練り付け 人工大理石
飾り棚／既存ラワン無垢材加工
照明／ペンダント照明（パナソニック）
キッチン
床／ケンパス無垢フローリング t=13mm
壁／コンクリート打ち放し（既存）
天井／ドリゾール板打ち込み（既存）
システムキッチン／ TOTO
家事室
床／ケンパス無垢フローリング t=13mm
壁／コンクリート打ち放し（既存）　シナ合板目透かし貼り
天井／ドリゾール板打ち込み（既存）
収納棚／シナ合板 塗装
洗面室
床／ケンパス無垢フローリング t=13mm
壁／コンクリート打ち放し（既存）
天井／ドリゾール板打ち込み（既存）
照明／ブラケット照明（DAIKO）
アルミ製片引戸／ポリカーボネート　アルミ
洗面カウンター／人工大理石
洗面用水栓金物／ CERA
浴室A・B
床／ 25mm角磁気質タイル貼り（LIXIL）
壁／コンクリート打ち放し（既存）　25mm角磁気質タイル貼り（LIXIL）
天井／ドリゾール板打ち込み（既存）
照明／ブラケット照明（DAIKO）
バスタブ／鋳物ホーロー浴槽（大和重工）
シャワー水栓金物／ TOTO

設備システム
空調　冷暖房方式／ルームエアコン
ペレットストーブ
給排水　給水方式／上水道直結
排水方式／下水道放流
給湯　給湯方式／ガス給湯器

撮影／新建築社写真部

ホールBから吹抜けを見る。

2階書斎と寝室C。

批評

死を含み込んだ生の形式

能作文徳（建築家）

自邸を建てるとは、家を自分なりに再定義しようとする試みである。自分や家族が生きる個別性を起点としながらも、人間共通の何かを探ることである。

1984年に竣工した内藤廣氏の自邸は「共生住居」という名称で発表された。竣工当時、4世代がこの家に暮らしていた。「共生」には、核家族ではなく拡大家族に対応する住まいという意味合いもあるが、そうした計画学的なことを示したわけではない。「共生」というのは「共に」「生きる」ことである。人間が共に生きる場所が家であるという根本に遡って思考したことがこの自邸の名称に表れている。

1984年の竣工直後の文章には、「庭に墓をつくる」と書かれている。それは「各人がバラバラな時と空間をもつとすれば、それらを収斂させる何かが必要だった。住宅を輪廻の場所として、動き変化してゆくところとして捉えた時、動かざる一点をそれに対峙する形で設定しようと考えた」からだという。実際に墓がつくられたわけではないが、「死」を象徴するものこそが、共に生きることを支える確かな一点になると考えられていた。

内藤さんからお話を伺っていると、「一族」という言葉が不意に出てきた。「内藤一族」は戦後の混乱期にこの鎌倉の地に移ってきたという。「一族」とは、生きている家族のことだけではなく、この世にはいない祖先を含めている言葉だ。つまり「共生」という言葉は、生を授かり、命を受け継いできた祖先を含めた長い時間の尺度を射程に入れたものであった。

内藤さんの思考の独自性は、この「死」を象徴する何かがあることで、生きることが「真に可変的で自由なのではないか」というところに表れている。つまり近代以前の家にように、場所や生業に拘束された生活を目指しているわけではなく、あくまで生きることが自由に変化していくことを前提に家を考えている。「死」と「生」が対立するのではなく、「死」が「生」を可能にするものとして考えられている。

では、どのように建築として具体化されたのだろうか。まず、この家の躯体は鉄筋コンクリートでできている。内藤さんの話によれば、最初は木造で構想されたが、鉄筋コンクリート造に変わったそうである。1回目の改築された1995年の文章にはローコストでいかに鉄筋コンクリート造を実現するかについて語られているが、鉄筋コンクリート造にしなければならなかった理由は書かれていない。しかし「死」と「生」の両面を考えて家をつくるという考えから、躯体にコンクリートを用いるのは直感的に納得できる。生きていた樹木を切り出して家をつくるか、石や砂といった大地に属するものを型に流して家をつくるかでは、まったく意味が異なる。コンクリートは燃えず、硬く、重い。コンクリートは不変のイメージであり、大地に属している。コンクリートは「生」よりも「死」に近い。死んだ者は大地に還っていく。コンクリートは大地に繋がり、死を暗に含んでいる。

たとえば、内藤さんの師匠筋にあたる吉阪隆正、菊竹清訓の自邸は共に鉄筋コンクリート造である。吉阪自邸（『新建築』5511）はいわば人工的な大地の積層である。その大地の上に家を増築し、フレームの間に自分たちで仕切りをつくればいいという考え方である。他方、「スカイハウス」（『新建築』5901）は同じピロティ形式であるが、大地から切り離された空を希求する形式である。核家族のための浮遊するワンルームである。HPシェルやワッフルスラブからは、荒々しい大地としてのコンクリートでなく、新しいテクノロジーとしてのコンクリートが意図されていることが読み取れる。またムーブネットは空間が増殖可能になるアイデアである。

それらに対し、「共生住居」は壁柱と床版による単純な板状の構成である。ローコストを実現するため、コンクリートは250mmという薄さである。床や壁（柱）は区別なく板状になっている点で、経済的合理と同質性（差異を生み出すよりも同じ要素で構成しようとする傾向）が重ねられている。コンクリートの壁柱は等間隔で反復され、床は壁より勝っていて1階と2階の壁は明確に分節されている。これは床によってまず場が設定され、その後に壁が配置されるという順序を示している。この壁柱は1階の居間で奥行きが浅くなっており、2スパンでひとつの空間のまとまりが形成されている。つまりこの壁柱は空間を分け隔てる役割というより、空間に反復するリズムを与えるものとして考えられている。その反復する壁柱の間にはたまたま風呂やキッチン、寝室が入っている。この壁柱のリズムが空間を枠付けている。

2階には居室が集められているが、まるでコンクリートの壁をすり抜けられるように所々に壁に孔が開けられており、5室の続き間となっている。竣工当時、中央の簡便な木造壁によってふたつの世帯が東西に分割されているが、2世帯を区切りつつも、2階で繋がる仕掛けが設定されていた。家族の共生、つまり「死」と「生」のサイクルの中で、各人が使える領域が伸縮するような仕組みが組み込まれていた。不動なコンクリートの壁柱が可変的な生活に応答するようにあらかじめ変形されているのである。

この家は家族構成の変化に対応したフレキシビリティだけが特徴ではない。この家の特徴は死という観念に関わり、それは家を取り巻く雰囲気に現れている。空気のトーンといってもいいかもしれない。この家の雰囲気に大きく関わってくるのは中央吹抜けのトップライトである。この吹抜け部分には階段が取り付けられている。上から注ぐ光は動いている人を照らし出す。2階の床はこの吹抜けに向かってほんの少しだけ張り出している。人が歩ける幅はなく、猫が入れるような幅だ。これは床の中断とも受け取れる。この中断された床の存在によって、光が家を開け広げたような形式に見えてくる。つまり太陽の光は生きる力を感じさせる一方、コンクリートの躯体は大地に属した死を感じさせる。そのふたつの力関係が亀裂のような形式に具体化されている。

今回の改修では、2世帯を隔てていた木造壁が解体されてひと繋がりになった。これは設計当初から意図されていた。つまり死は最初から受け入れられていた。この家は、生を楽観的に礼賛しているわけでもなく、死というものを強調し、恐れや怯えのようなものとして取り出しているのではない。死はしょうがないもの、当然なものとして受け入れられている。そしてそこでの空間は増殖・成長するのではなく、伸び縮みして破れていくものとして捉えられている。「共生住居」の特徴とは、光（トップライト）による大地（コンクリートの床）の破れ、不動（壁）と可動（壁の孔）の均衡による死を含み込んだ生の形式である。

No.07

大阪府大阪市

ドットアーキテクツ
dot architects

北側夕景。北側に公園が望める場所に建つ、築106年の5軒長屋のうちの1軒を改修した、設計者である家成俊勝氏の自邸。長屋の間取りを、1階と2階をそれぞれワンルーム空間に変え、間口いっぱいに開口をとることで、外への視線の抜けや採光を確保している。

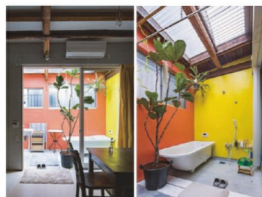
玄関から居間、奥に浴室を見る。改修前は建具で仕切られた3間続きだったが、柱梁を残しながら1間に改修し、光が1階全体に回るようにしている。

2階寝室から玄関を見下ろす。採光の確保と合わせて、1階室内から公園に生える銀杏の木に向かって視線が抜けるようにしている。簀の子は45×45@150mmにアクリル板t=5mmの嵌め落とし。

路地を西側から見る。引き違いの玄関は間口の2/3を占め、公園や植栽、路地を室内に取り込む。植え込みに水をあげたり、生活を公共空間へ延長している。

Renovation

築106年の長屋と暮らしを受け継ぐ

2階平面図

左：居間から浴室を見る。　右：浴室。トップライトにすることで光を取り込みつつ、浴室の冷たい雰囲気を色で緩和している。

リノベーション工事にかかった費用

解体工事費	約700,000円
基礎工事費	約630,000円
外壁・屋根工事費	約190,000円
木・建具・家具費	約2,800,000円
左官・塗装	約600,000円
設備工事	約 1,500,000円
総工費	約7000,000円

※一部自主施工

1階平面図　縮尺1：100

居間から東側を見る。東側の壁一面には吹抜けを通して耐震補強を兼ねた本棚が設えられている。寝室の一部の床を簀の子状にすることで、2階の開口から1階に光が差し込む。

階段見上げ。吹抜けと寝室の間には、公園からの目線を考慮して障子が嵌められている。

特集論考2

生きている場所

家成俊勝（建築家）

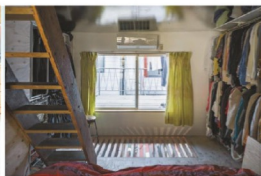
私は兵庫県尼崎市にある、片側2車線の幹線道路と線路が交差する角地に建つコンクリートでできた小さな集合住宅に15年住んでいた。走る車やバイクの音が、線路をくぐるアンダーパスの壁や天井に跳ね返り、周囲の些細な音をかき消していた。周りの住民はコロコロ入れ替わるし、たまに階段で会っても挨拶するだけで、名前も何をしているかも未だに知らないというよくある話。そんな家が手狭になってきたということもあり、5年くらい土地や集合住宅、賃貸の物件を探してきた。しかし、集合住宅はどれも似た間取りと配列で、たとえ改修しても本質は変わらないし、何より地面から遠ざかる暮らしにリアリティがもてなかった。土地を買うというのも途中から抵抗感が出てきた。土地を買って設計するにしても、中古住宅を改修するにしても、ひとつの土地とひとつの住宅の話になってしまうだろう。考えてみると、今まで自分の土地や家といったものをもったことがない。生まれてからずっと借家に住んできたからか、地球の表面が切り売りされていることに多少違和感がある。ある島では土地全体が島人の共有財産であると聞いたことがある。私自身が今は都心に住みたいので仕方ないが、地面をちょっとお借りします程度の気持ちがちょうどよいのではと考えている。間借りしているような、あちらとこちらがはっきりしないような、そんな場所を都市の中で見つけようとしていたのかもしれない。そんな中、古い路地と長屋に出会った。

大阪市内の中心部から歩いて15分程度、築106年の5軒長屋のうちの1軒。接道はしておらず、路地を2回曲がった先にある。道路から路地を見ると、突き当たりに錆びたトタンの長屋の壁が見える。足元は薄いモルタルが剥がれてレンガが見えている。長屋の前の路地は綺麗に掃除されていて、路地沿いに小さな菜園スペースがある。長屋の南側には住宅がぴったりと張り付いて建っているが、北側は公園で開けている。小さな公園の割には銀杏や桜、楠など大きな木が植えらえていて季節感もある。中に入ってみると、畳は腐っていて、野良猫が住んでいる匂いがしたが、構造は大丈夫だった。1階はじとっとしていて暗い。長屋は筒みたいなものだから開口部が制限されるし、周囲の環境から冬の南側の採光は望めないが、家人との話し合いの末、ようやくこの古い長屋に住むことに決めた。改修に際しては、放置されていた小さな菜園スペースを整えること、長屋の間取りは踏襲せずに1階も2階もほぼ1室にして暗さを少しでも解消するためにできるだけ視線や光の抜けをつくること、生活する上で必要なトイレ、キッチン、階段、本棚、靴置き場を片側に寄せて並べず、少しずらすこと、インテリアにおいて物と色をどう配置するか、という4つを考えて設計した。

このあたりは江戸時代に淀川の支流大川から引き込まれた堀の行き止まりで、壮絶なゴミの山ができていたそうだ。その後、明治に入ってから広大な大阪監獄ができる。当時はまだ市域の外側に位置していた場所である。日清戦争の前後から、大阪は紡績業を中心に商工業が発展し、市域が拡張され、人口が流入し、周辺の農村が都市化していく。この長屋が建ったのはそういった急激な市街化によって、場所のもつ意味や都市の空間的配置が大きく変化した時期にあたる。それから現在に至るまで大阪の中心部は常に開発によってつくり変えられてきた。見上げればタワーマンションが建っていて空は狭い。長屋は小さな島のように取り残されている。1995年の阪神・淡路大震災の際に多くの長屋が焼失した。その大半が接道していなかったため、長屋を再建できなかった。地面の上で横に連なった暮らしによって育まれた社会性は、仮設住宅から郊外の公営住宅へと移り住む間に分断され、生き方の変化は被災者の精神面や生活面で大きなストレスになったといわれている。縦に積層された集合住宅は、限られた土地に多くの人が住むことができる発明だとは思うが、地面から離れることで失うものも多い。アーティストの森村泰昌さんの贋作『「下町新党」党首演説』（下町芸術祭 森村泰昌「下町物語プロジェクト2017～2019」序説）から一部を抜粋する。「ともかく私の家の真ん前に立つ電信柱にですね、おしっこをひっかける犬がいるわけですよ。（中略）朝起きて外に出ると、黒く染みた尿の飛沫が、電柱付近に飛び散っている。これをホースで水をかけて洗い流すのが、私の日課となっております。いつも、目線を足もとに落としておかないと、玄関先が臭くなる。日々、ていねいなお手入れを怠らぬ精神、これが下町に住むニンゲンの心意気であります。」路地の菜園にせっせと水をやったり、掃除していると長屋の住人といろいろと相談ができるし、日々のちょっとした助け合いに繋がっていく。路地は30cm先の小さな世界が続いて町になっているのだと教えてくれる。周りには長く住んでいるおじいちゃんやおばあちゃんたちがいて、少し遠くに住んでいる人たちに連なっているのだと分かる。車道と家が直接ドッキングしたような場はそういった連なりを分断し、路上のさまざまな活動を誘発することができない。たまに通る車のために大きな空白地帯が家の前に広がっているに等しい。その空白地帯に対して家を物理的に開いても、開いた先に何もないのではどうしようもない。救命活動において車の乗り入れが大切なのはもちろんだが、その公益性と敷地の中により多くの私有の内部空間を獲得したいという欲望がタッグを組んだ時、私たちの精神面を支える日々の暮らしの些細なものごとを共有する経験を取り逃がしてしまってはいないだろうか。歩きながら交差点でいちいち車を確認するために立ち止まるのではなく、路地のような共有のテリトリーを町の中にうまく配置し、日々の営みが全面的に展開した路を楽しみながら歩き、その路を自らメンテナンスしていくことができればと思う。

揺れ動く都市の力学の中にある細い1本の路地には、いつも小さな出来事が起こる。野良猫や知らないおじいちゃんが網戸越しにこちらを見ていたり、落ち葉で覆われていたり、お隣さんが路地でパターゴルフをしていたり、公園でかくれんぼして家の前の植木に隠れている子どものお尻が見えていたりする。この路地と長屋は、今まで都市の劇的な変化の中にずっとあった。今後10年の間に環境が大きく変わってしまうかもしれない。その前線で、地面の上の、路地の、長屋の暮らしは今後どう変わっていくのか、生きているものたちが織り成す予測不能なものごとを共有し、このどこにでもあった路地のような場所をどう再び生み出せるのか考えていきたい。

寝室。天井に貼った銀色のプラスチックフィルムに光を反射させることで閉塞感を和らげている。

配置図　縮尺1：2,000

左：階段と寝室を見る。
右：寝室から南側を見る。開口の先は物干し場。

▽最高高さ　GL+6,367
▽軒高　GL+4,847
▽2FL　GL+2,754
▽1FL　GL+180
▽GL±0
1,520
2,093
2,574
180

床:
パンチカーペット
構造用合板 t=24mm

天井:
プラスチックフィルム貼り
ベニヤ t=2.5mm
グラスウール 16K

ロフト
前室
寝室

壁:
PB t=12.5mm EP

新設アルミサッシ

壁:
PB t=12.5mm EP塗装
遮音シート
構造用合板 t=12mm
スタイロフォーム t=20mm

物干し場

壁:
モルタル金ごて押さえ
撥水剤塗布(白色)
ラスカット
防水紙
グラスウール

壁:
モルタル金ごて押さえ
撥水剤塗布(白)

トイレ
天井足場板

壁:
PB t=12.5mm EP

新設アルミサッシ

玄関
居間
台所・食堂
トイレ

床:
撥水剤塗布
モルタル金ごて押さえ
コンクリート t=120mm
防湿シート

床:
シナベニヤ t=12mm オスモ
スタイロフォーム 45mm
コンクリート t=120mm
防湿シート

階段:
ささら st PL t=9mm OP
段板 足場板 t=24mm

床:
撥水剤塗布(白色)
モルタル金ごて押さえ
コンクリート t=120mm
防湿シート

壁:
モルタル金ごて押さえ
撥水剤塗布(白色)
ラスカット
防水紙
グラスウール

断面詳細図　縮尺1：75

北側全景。

No.07
所在地／大阪府大阪市
主要用途／専用住宅
家族構成／２人

設計
ドットアーキテクツ　担当／家成俊勝
土井亘　寺田英史
構造　片岡構造　担当／片岡慎策
外構・造園　GREENSPACE　担当／辰己耕造
カーテン／ fabricscape　担当／山本紀代彦
照明／ NEW LIGHT POTTERY
担当／永冨裕幸
金物／ Atelier Tuareg　担当／岡崎裕司
家具／アトリエカフエ　担当／安川雄基
施工
和建築　担当／川口和美
構造・構法
主体構造・構法　木造在来工法
基礎　なし
規模
階数　地上2階
軒高　4,847mm　最高の高さ　6,367mm
敷地面積　257.46m^2
建築面積　40.5m^2
延床面積　61.2m^2
（容積率112％　許容300％）
1階　40.5m^2　2階　20.7m^2　ロフト 7.7 m^2
工程
設計期間　2018年2月～ 6月
工事期間　2018年7月～ 10月
敷地条件
地域地区　商業地域　準防火地域
外部仕上げ
屋根／母屋：既存　下屋：ポリカーボネート波板
外壁／モルタル掻き落とし
開口部／アルミ既成サッシ（YKK AP）
外構／既存
内部仕上げ
玄関　収納　居間
床／玄関・収納：モルタル金ごて押さえ t=40mm 撥水剤塗布　居間：シナベニヤ t=12mm オスモ
壁／ PB t=12.5mm EP　一部足場板張り
天井／構造用合板 t=24mm 素地現し　新設梁
家具（居間）／制作
厨房機器／ TOOLBOX
ガスコンロ ／リンナイ
換気扇（シェード）／渡辺製作所
シンク水栓金物／ TOOLBOX
浴室
床／モルタル金ごて押さえ t=40mm 撥水剤（白）
壁／モルタル金ごて押さえ 撥水剤 AEP
天井／ポリカーボネート波板（クリアマット）
建築金物／カーテンレール（TOSO）
バスタブ／ LIXIL
シャワー水栓金物／ TOTO
トイレ　洗面所
床／モルタル金ごて押え t＝40 撥水剤(白)
壁／モルタル金ごて押え 撥水剤 AEP
天井／トイレ：足場板目透かし張り　洗面所：ポリカーボネート波板（クリアマット）
便器／ LIXIL
洗面カウンター／ TOTO
洗面用水栓金物／サンワカンパニー
寝室
床／構造用合板 t=24mm ウレタン塗装（半ツヤ）　一部アクリル板 t=5mm
壁／ PB t=12.5mm EP
天井／ベニヤ t=2.5mm プラスチックフィルム貼り
照明／建主支給
ロフト
床／構造用合板 t=24mm ウレタン塗装（半ツヤ）
壁／ PB t=12.5mm EP
天井／ベニヤ t=2.5mm プラスチックフィルム貼り
設備システム
空調　冷暖房方式／ルームエアコン
換気方式／第三種換気
給排水　給水方式／公共上水道直結
排水方式／公共下水道直結
給湯　給湯方式／ガス給湯器

撮影／新建築社写真部

居間から玄関を見る。

玄関。

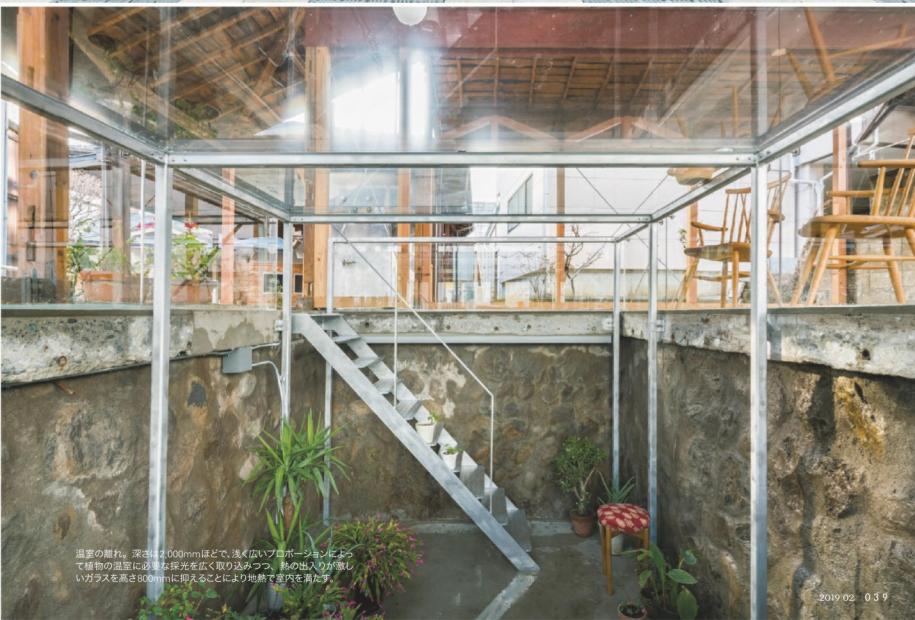
6つの小さな離れの家

House with 6 annexes
長野県

武田清明建築設計事務所
Kiyoaki Takeda Architects

東側の前面道路から温室の離れを見る。高齢の夫婦のための住まい。必要十分な大きさを日常生活のための母屋として残し、週末に外へ生活を広げるために、敷地内に6つの離れを既築、減築、増築、改築を組み合わせてつくる計画。前面道路に面した温室の離れは、食材が凍らないように保管するむろだった場所にガラスの上屋を増築することで、時間や季節によって光の射す観葉植物用の温室にした。

温室の離れ。もともと店舗だった温室の離れがあるピロティは、外部を覆うテント膜を減築し、風が通り抜ける半屋外空間とした。木造の構造体は朽ちたところのみ改築し、ブレース材で補強。5,050×2,650mmのガラス上屋は、テーブルとしても使用できる高さ800mmとし、周辺住民を受け入れる空間を外部に生み出している。

東側全景。前面道路から玄関までのアプローチが長いという問題があったため、看板やテント膜で塞がれていた閉鎖的な外観を減築し、建物の内部を通過できるような開放的なエントランスとした。

温室の離れ。深さは2,000mmほどで、浅く広いプロポーションによって植物の温室に必要な採光を広く取り込みつつ、熱の出入りが激しいガラスを高さ800mmに抑えることにより地熱で室内を満たす。

母屋より外のダイニングを見る。母屋を減築した場所に外のダイニングを配置し、井戸の離れ、食堂棚の離れ、葡萄酒庫の離れが3方を囲う。それぞれに住宅の機能をもたせてバラバラに配置することで、母屋から外へ生活空間を広げている。食器棚の離れは、母屋の風呂のタイル貼りの壁を既築として活用し、半屋外であっても耐えられる建物としている。かつての惣菜店舗の食器の倉庫兼ギャラリーでもあるが、週末に外で過ごす時や家族が集まってバーベキューをする時には、食器が活用される計画。

Renovation

既築×減築×改築×増築による暮らしの重層

井戸の離れ。深さ約10mの井戸に、高さ3,085mmのガラスの上屋を設置することで周囲の植栽に遮られず採光を確保し、井戸奥深くの白カビを除去して水環境を保つ。

母屋の玄関から外のリビングを見る。植栽はすべて敷地内にあったものを活用し、減築した部分に移植することで、空き地を庭へと改変させた。

上：母屋2階吹抜けよりリビング・ダイニングを見下ろす。2階の寝室を屋根と柱、梁、建具、根太は残して減築し、立体的な通風と採光を計画した。建具の開閉によって夏と冬で室温の出入りを調整できるようにしている。また、床根太まで残すことで、将来生活形式が変わっても、床を張って室を増設しやすいようにしている。
下：リビング・ダイニングより外のリビングを見る。倉庫だった室の断熱性能を改善させてリビング・ダイニングを配置することで、高齢者の日常生活エリアがコンパクトにまとまる計画とした。

平面詳細図　縮尺1：120

未来の家を発掘する

高齢の夫婦ふたり暮らしにとって大きすぎる家を「小さな建築群」に再編し、コンパクトな日常生活と伸びやかな週末生活をつくる改修計画。

敷地内には戦前から継がれてきた母屋のほか、防空壕や井戸、むろなどの地下空間が長年使われずに眠っていた。内部は年中一定温度を保つ地中熱で満たされ、洞窟のような体感である。かつては、この地下と地上を行き来し温熱環境を使い分けながら、この寒冷地を生き抜いてきたのだろう。まさに人間と環境の格闘の痕跡のような場所だ。建てることだけでなく掘ることでも築かれたこのランドスケープを「新しい敷地」ととらえ、野生あふれる先代の生活の上に、未来の生活を重層させた「歴史の地層」のような住宅ができないだろうか。

まずは敷地の開拓から始めた。土地いっぱいに建っていた母屋は日常生活に必要な居住空間を残して減築し、明るく伸びやかな空地を取り戻した。次に、健全な既築はもちろん、傷んだ地下と地上の構造体も場当たり的に改築し、利用し尽くせるものはすべて残した。その結果生まれた地下と地上の立体的な「遺跡のランドスケープ」を敷地と見立て、その上に週末生活の機能をバラバラに増築した。この既築×減築×改築×増築という工種の掛け合わせによって、部材単位で新旧が混在化し、さまざまな時代が重層する「6つの小さな離れ」が出現した。

離れの構造は、人力で運べる50mm角の鉄骨材ユニットを基本に、家具のように現場で組み立てる構成とし、敷地内に存続させた遺跡を避けながら搬入・建設が行えるようにした。また、ガラスパビリオンのような透明な外装は、採光が不可欠な地下を健康的に維持できる環境装置として機能している。

新たな用途を備えた建築群が庭に散りばめられた。家と別荘が同居したような新しい環境は、内外を横断する伸びやかな生活をもたらした。この新しい生活は、かつて人の命を救ったかもしれない、生きるために築かれた場の上に存在していると、暮らしながら思えるような、歴史を大地とした「未来の家」を目指した。（武田清明）

葡萄酒庫の離れを見る。防空壕に高さ3,300mmのガラスの上屋を設置して採光と通風を確保。温度を一定に保つ防空壕の地中熱を活かして葡萄酒庫としている。

6つの小さな離れの家
所在地／長野県
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦

設計
武田清明建築設計事務所　担当／武田清明
構造　ASA　担当／鈴木啓　竹中美穂
設備・電気　武田清明建築設計事務所
外構・造園　ACID NATURE乙庭
担当／太田敦雄
建物調査　オフィス21　担当／柿崎隆志
環境デザイン　遠藤えりか

施工
宮沢工務店　担当／田口英彦
設備　窪田設備　担当／黒崎謙二
電気　電管エンジニアリング　担当／毛受仁
外構・造園　ACID NATURE乙庭
担当／太田敦雄
しみづ農園　担当／細井健太郎
家具　サインクラフト　担当／南川英雄

構造・構法
主体構造・構法　鉄骨造
基礎　鉄筋コンクリート

規模
階数　地上1階
敷地面積　548.00m²
建築面積　208.60m²
（建蔽率38%　許容80%）
延床面積　250.96m²
（容積率46%　許容200%）
1階　174.24m²　2階　76.72m²

工程
設計期間　2017年4月～2018年4月
工事期間　2018年6月～2019年4月

敷地条件
地域地区　近隣商業地域　法第22条地域
道路幅員　東4.6m

外部仕上げ
離れ
屋根・外壁／強化ガラス
床／マクセラムデッキ
外構／砂利敷き

内部仕上げ
母屋：リビング・ダイニング　キッチン
床／合板フローリング
壁・天井／ PB t=12.5mm　AEP
巾木／カラーガルバリウム鋼板
家具／制作

設備システム
空調　暖房方式／石油熱源温水床暖房
給排水　給水方式／ヘッダー方式
排水方式／ VU配管方式
給湯　給湯方式／ヘッダー方式

撮影／新建築社写真部

リノベーション工事にかかった費用

解体工事　約2,500,000円
キッチン回り（レンジフード　コンロ　制作家具）　約1,400,000円
浴室回り（ユニットバス　その他付帯工事）　約600,000円
全体設備変更（洗面　トイレ）　約500,000円
窓回り（ダイニング）　約400,000円
総工費（解体費別途）　約24,000,000円

葡萄酒庫の離れ。

配置図　縮尺1：2,000

冷蔵庫の離れから外のダイニングを見る。

増築
改築
減築
既築

最高高さ ▽GL+3,085
外壁:強化ガラス
水洗器具:蛇口
シンク:ステンレス
カウンター:ウッドデッキ
井戸の離れ
基礎:コンクリート 150×300mm
床:ウッドデッキ
梁:スチール角パイプ50×50mm 現場亜鉛メッキ 塗装_ZRC
柱:50×50×6 現場亜鉛メッキ 塗装_ZRC
汲み上げポンプ
井戸
井戸水

最高高さ ▽GL+3,228
軒高 ▽GL+2,530
梁:105×105mm
母屋:105×105mm
棟木:105×105mm
束:105×105mm
屋根:ガルバリウム鋼板
垂木:60×60mm
軒桁:105×105mm
棚:ウッドデッキ
外壁:強化ガラス
柱:105×105mm
食器棚の離れ
柱(撤去):105×105mm
床:コンクリート土間
母屋:105×105mm
外壁(撤去):ガルバリウム鋼板
野地板:マツ

最高高さ ▽GL+7,105
軒高 ▽GL+6,265
外壁:ささら下見張り
梁:50×50×6mm 現場亜鉛メッキ塗装_ZRC
2F ▽GL+3,300
縁側:ウッドデッキ クリア防腐塗料
最高高さ ▽GL+2,400
柱:105×105mm
1F ▽GL+520
葡萄酒庫の離れ
柱:50×50×6 現場亜鉛メッキ塗装_ZRC
床:コンクリート土間
階段:石 モルタル補修
床:コンクリート土間
梁:鉄骨150×150mm (構造補強)
寝室
木製建具:障子
廊下2
居間2
畳

断面詳細図　縮尺1：100

東側夕景。

俯瞰。

天井の楕円

Ceiling and Ellipse
東京都小平市

村山徹＋加藤亜矢子／ムトカ建築事務所
MURAYAMA＋KATO ARCHITECTURE
／ mtka

2階リビングルーム。南で公園と隣接し、その先には公園で突き当たる道路が続く。南に比重の偏った気積の大きな空間に、1.8mの高さに楕円状に穴の空いたもう1枚の天井を挿入。軽量鉄骨で組んだ梁を構造用合板で挟み、101mm厚としている。

極大の楕円で流れを変える

築20年の戸建て住宅のリノベーションである。オーナーが変わり、夫婦と子供ふたりの家族が新たに住むことになった。この住宅の最大の特徴は、勾配屋根が架かった45m^{2}の大きなワンルームの２階リビングで、幅3.5×高さ3.7mの南向きの大開口部をもっていることである。この大きなワンルームに、ひとつの極大なオブジェクトを入れることで、人の流れ、力の流れ、風の流れ、光の流れを更新し、新しい家族に合った建築をつくろうと考えた。

そこで南窓の横架材の高さ1.8mのレベルに、スーパー楕円形状の穴の空いた天井を挿入した。空間の重心が南側に偏っていることで拠り所のなかったリビングの重心を中央に引き寄せ、楕円の回りに多様な居場所をつくった。また、天井面が火打ちのように突っ張り、階段のささらがブレースの役割を果たすことで、南窓の筋交いを取り外すことができた。それによって隣の公園との距離が縮まり、内部が街に広がっていく。そして天井裏に上り上部の窓を開閉することで換気が可能となり、さらに天井が庇のように働き、夏場の熱負荷が軽減された。

この天井は、木造の床のように厚くもなく、鉄板構造のように薄くもない。既存の木造の建築からは自律した実体のあるオブジェクトである。そして、楕円の吹抜けは実体がなく空虚である。

２階リビングの床に立つと、高さ1.8mにある天井の小口面は１本の線として認識され、地平線のような大きな存在にも見えてくる。そんな線と

天井裏から2階リビングを見渡す。既存の架構は梁が303mmピッチで、柱と間柱は455mmピッチで連続する。それぞれの開口に掛かるカーテンは、南の大開口部に掛かっていた既存のものをクリーニングし染め直し、各開口部サイズに合わせてつくり直した。

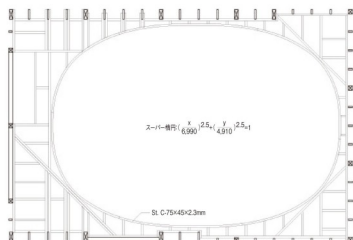
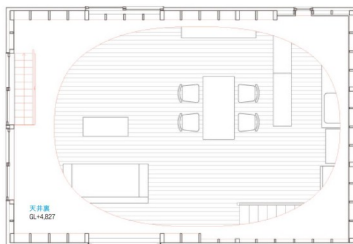
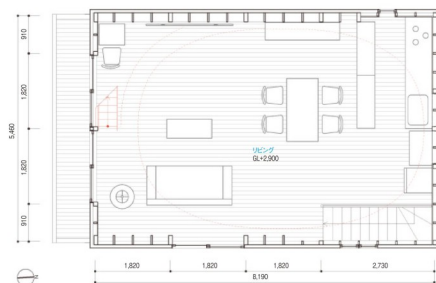
してしか認識されない天井は、階段を上り、その天井裏に入り込むことで、はじめて楕円としての幾何学形状が顕になる。人の居場所をつくるためにつくられたはずの天井は、その居場所を僅かに残すのみで、空間いっぱいに吹抜けている。まるで、池べりに佇み、その深い底を覗き込むような感覚である。

人にとって、力にとって、風にとって、光にとって、それぞれの最適解は別のところにあるかもしれない。しかし、建築を取り巻くコンテクストは常に変化していくものだとすると、今の最適解を探してかたちにすることは、未来に対する不適合に繋がる。むしろ、ちょっとずつよい方向に向かい、それらを統合するような強い形態を見つけることができれば、自律的に持続していく建築になり得ると考えた。（加藤亜矢子＋村山徹）

2階リビング。キッチン上部の楕円の天井は収納棚として機能する。アイランドカウンターは建主による自主制作。背板のシナ合板は既存パーティションの面材を再利用することで、既存のものに馴染ませている。*

Renovation

居場所×構造×環境に寄与するもうひとつの天井

断面詳細図　縮尺1：75

構造天井伏図

天井裏平面図

2階平面図　縮尺1：100

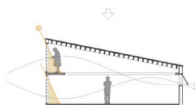
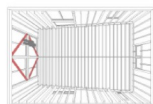
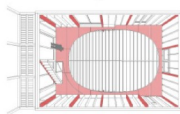
2階天井裏。楕円天井により南面開口部回りに居場所ができ、かつ内庇としても機能する。天井面に設けたカーテンを閉めると、階段下のスペースが部屋のようにもなる。

1階から2階天井を見上げる。

南で隣接する公園から見る。1階は耐力壁、2階は楕円天井の追加により、南の窓面に設けられていた筋交いをすべて取り去っている。窓辺に居場所をつくり、復元したテラス越しに外部と繋がる。

改修前：勾配天井の大きなワンルームでは、大開口部の方向に視線や重心が引き寄せられるため、空間の拠り所がなかった。

改修後：楕円の穴が空いた天井を挿入することで、空間の重心を部屋の中央に引き寄せ、周辺に小さな居場所をつくる。

改修前：開口部が多く、日射による熱負荷が大きかった。上部の開口の開閉が難しく、天井近くに熱溜まりができていた。

改修後：天井が庇のように日射を遮蔽し、2階の熱負荷が軽減される。天井裏に上がり窓を開けることで、満遍なく換気・通風できる。

2階改修前：開口部にかけられた筋違いが公園への眺望を妨げていた。

2階改修後：新たに設けた天井面が突っ張ることで、ロフト上部の柱が水平力を負担できるようになる。また鉄骨階段のささらがブレースの役割を果たすことで、筋違いを外すことができる。

天井の楕円

所在地／東京都小平市
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦＋子供2人

設計

ムトカ建築事務所
　担当／村山徹　加藤亜矢子　寺田慎平
構造　荒木美香（佐藤淳構造設計事務所）
カーテン　オンデルデリンデ
　担当／久米希実　植村遥

施工

エスエス　担当／大内望

構造・構法

主体構造・構法　木造在来工法

規模

階数　地上2階
軒高　6,902mm　最高の高さ　6,975mm
敷地面積　110.50m^2

2階リビング。楕円の天井は立ち位置によって1本の線状に広がる。

2階リビングを東に向かって見る。

建築面積　44.18m²
（建蔽率39.98%　許容40%）
延床面積　88.36m²
（容積率79.96%　許容80%）
1階　44.18m²　2階　44.18m²

工程

設計期間　2018年1月～2018年7月
工事期間　2018年8月～2018年10月

敷地条件

地域地区　第一種低層住居専用地域
第一種高度地区
道路幅員　北4m　駐車台数　1台

内部仕上げ

トイレ

便器／LIXIL SATIS Gタイプ

リビング

床／フローリング t=12mm（既存）
壁／OSB t=9.5mm（既存）
天井／シナ合板 t=3mm EP　キッチンパネル t=3mm

天井裏

床／長尺塩ビシート t=2mm
壁・天井／OSB t=9.5mm（既存）

設備システム

空調　冷暖房方式／ルームエアコン

撮影／新建築社写真部
*提供／ムトカ建築事務所

既存南面外観。*

配置図　縮尺1：1,000

コヤトキトツキ

Shed, Tree and Lunar
神奈川県

安部良／
ARCHITECTS ATELIER RYO ABE
RYO ABE／
ARCHITECTS ATELIER RYO ABE

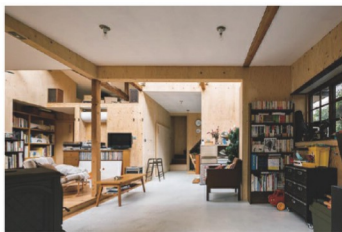
西側全景。増改築を繰り返した築約50年の建物をグラフィックデザイナーとその家族のための住宅兼仕事場へと改修。自然豊かな谷戸の中で隣家同士が境界を気にせずに、庭や空地などを共有し合う、ゆったりとした雰囲気が流れる住宅地に建つ。

曖昧な輪郭としての建築

グラフィックデザイナーとその家族のための住宅兼仕事場である。海岸から緑深い谷戸（やと）へと続く住宅地の、竹やぶに接した三角形の小さな土地に、高さ20m以上のイチョウの木と小さな木造2階建ての住宅が残っていた。隣家同士が境界をあまり気にせずに建ち、庭や空地などを共有しながら住んでいる。築おおよそ50年、建て替えを好む日本では珍しく、住まい手が変わるたびに増改築を繰り返した歴史をもつささやかな住宅。家族3人と猫1匹には小さな床面積だが、この場所に流れる緩やかな空気感こそが彼らにとって最も価値のある生活のクオリティではないかと考えた。

隣家との敷地境界や、中と外、仕事場と住まいの場などさまざまな境界を曖昧にすることで、家という枠組みをもう1歩開いて庭や周辺環境までも含めた居場所として棲まえるような、活き活きとした風景の輪郭として建築をつくることを主題とした。近隣との距離感を注意深く観察しながら建物周囲のテラスと庇をデザインし、お互いの生活風景が重なり合うように、地域に現れ始めている新しい街並みに参加する建築を目指した。家と社会の境界でもある玄関という形式を曖昧にし、建主の仕事場となるスタジオを、半屋外のエントランスを介した離れとして配置した。スタジオの扉と住宅の引き戸を開け放てば、中と外、住居と仕事場が緩やかに繋がった生活環境が生まれる。この住宅にとっておそらく3度目の増改築になる母屋の工事では、床、壁、天井を全て一度剥がし、断熱を加え構造的に必要な補強を施しながら、機能的・意匠的に不必要な要素を削ぎ落として、既存住宅の骨格を抽出し、これまでの増改築の歴史の中に周囲の景観を積極的に取り込んだ住空間とした。

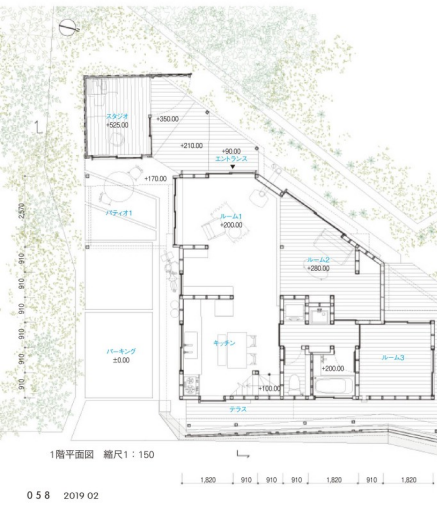
建主は風に揺れる竹の表情を楽しみ、夜には天窓から月を眺めているそうだ。輪郭としての建築は意識の中から消えて、おおらかな環境とリンクした生活が始まっている。（安部良）

ルーム1・2。天窓と土間により外部から連続するような内部空間。西側の隣地は950mmmmm程度のレベル差があり、竹林などさまざまな植物が周囲を囲む。主要な開口部は制作した外付け木製建具に変更され、引き戸を開くと窓枠が見えなくなり風景が切り取られる。

上：ルーム1からキッチンを見る。ルーム1とキッチンは連続する土間となっている。
下：キッチン。奥にエントランスとルーム1が続く。キッチンは料理好きの建主の要望を取り入れたシンプルなもので、流し台天板のみ既存を再利用。

2階から周囲の自然、ルーム1、スタジオを見下ろす。中央の屋根は瓦を取り払い小屋組を補強して天窓に改装された。

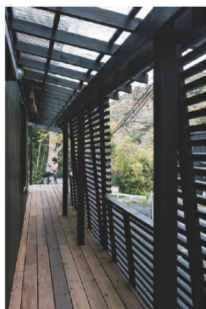
2階平面図

改修前2階平面図

改修前1階平面図　縮尺1：300

1階平面図　縮尺1：150

ルーム2からルーム1を見る。既存の玄関の扉は壁につくり変えられ、室内の一部に取り込まれている。土間は既存の布基礎と新規のべた基礎の配筋をアンカーで連結させ、構造的にも有効な補強となっている。壁面は補強を兼ねた構造用合板の表面をやすり掛けした仕上げ。

テラスを介して繋がるスタジオと母屋。新しいエントランスは半屋外のテラス空間で、敷地内と周辺の木々や、仕事場と住まいといった境界を曖昧にする外部の生活空間となっている。スタジオは既製品の10フィートコンテナに断熱と内壁を施し、既存の開口扉の半分は引き違いアルミ扉と壁に取り替え、さらにアルミ引き違い窓や電気設備を取り付けている。

パティオ2から母屋を見る。地盤が悪い傾斜地で、もともと使われていなかった三角形敷地の端の部分にデッキと庇を取り付けたことで、既存の大イチョウの下が暮らしの場となった。フレームは夏季に日よけタープを設置するためのもの。

キッチン脇の勝手口より北端のパティオ2を見る。既存の倉庫を減築することでできたテラス。

配置図　縮尺1：2,000

コヤトキトツキ

所在地／神奈川県
主要用途／住宅+アトリエ
家族構成／夫婦+子供1人+猫1匹

設計

ARCHITECTS ATELIER RYO ABE
　担当／安部良　松原正佳　上里塊太
　Ana Cristina Pineda
構造／正木構造研究所　正木健太

施工

ワイズ・ホーム　出口孝行
外構・造園　UEKIYA　担当／永石麗

構造・構法

主体構造・構法　木造在来工法
基礎　布基礎 一部ベタ基礎追加

規模

階数　地上2階
軒高 5,780mm　最高の高さ 7015mm
敷地面積　180.00m²
建築面積　71.29m²
（建蔽率39.6%　許容40%）
延床面積　76.64m²
（容積率42.5%　許容80%）
1階　63.40m²　2階　13.24m²

工程

設計期間　2017年8～12月
工事期間　2018年1～5月

敷地条件

地域地区　第一種低層住居専用地域

Renovation

境界を曖昧にし環境に溶け込む

▽最高高さ=GL+6,975
屋根:
既存金属鋼板+ウレタン塗装仕上げ
3.2
1
天井:
PB t=12.5mm 漆喰ローラー塗り
グラスウール
壁:
PB t=12.5mm 漆喰ローラー塗り
軒裏:
野地板張り+キシラデコール仕上げ
CH=3,455
ルーム4
CH=2,420
外壁:
既存金属鋼板の上 ウレタン塗装
10
1
屋根:
ポリカーボネート小波貼り
屋根:
ガラストップライト t=5 +飛散防止フィルム
3
1
床:
構造用合板t=12 ワックス塗り
屋根:
コンテナ金属鋼板の上
ウレタン塗装仕上げ
屋根:
既存金属鋼板+ウレタン塗装仕上げ
6.1
1
▽2FL=GL+3,110
3.6
1
屋根:
ポリカーボネート小波貼り
天井:
構造用合板 t=12mm ワックス塗り
グラスウール
天井:
PB t=12.5mm 漆喰ローラー塗り
グラスウール
天井:
PB t=12.5mm 漆喰ローラー塗り
壁:
構造用合板 t=12mm ワックス塗り
グラスウール
CH=2,835
CH=2,820
壁:
構造用合板 t=12mm ワックス塗り
一部PB t=12.5mm+SUS
スタジオ
エントランス
ルーム1
壁:
構造用合板 t=12mm ワックス塗り
キッチン
テラス
床:
スギ板 t=15mm ワックス塗り
床:
木製デッキ キシラデコール仕上げ
床:
スギ板 t=15mm ワックス塗り
床:
鉄筋コンクリート 金鏝仕上げ
スタイロフォーム
床:
木製デッキ キシラデコール仕上げ
▽1FL=GL+200
▽GL±0
2,570　910　910　910　910　910　910

断面詳細図　縮尺1：80

東側道路から見る全景。外壁と屋根は既存の金属板に塗料仕上げ。グラフィックデザイナーである建主が色出しをした。緑深い周辺環境に馴染みながら、季節や時間によって変わる独特な表情をつくり出している。

道路幅員　東6m　駐車台数　1台

外部仕上げ

屋根／既存金属鋼板の上 ウレタン塗装
外壁／既存金属鋼板の上 ウレタン塗装
　既存モルタル吹き付けタイルの上 シリコン塗装
開口部／木製建具　アルミサッシ（一部既存）
外構／コンクリート刷毛引き

内部仕上げ

キッチン　ルーム1・2　ロフト

床／鉄筋コンクリート 金ごて
壁／構造用合板 ワックス
　一部PB t=12.5mm SUS
天井／ PB t=12.5mm 漆喰ローラー塗り
　一部トップライト
厨房機器／既存
　オープン・ガスコンロ／タニコー S-TGR-7545
　換気扇（シェード）／三菱 EX-25EMP6
家具／デッキ材　薪ストーブ：ドブレ 640CBJ
照明／ E26ソケット（青山電陶）メクラプレート 電球
シンク水栓金物／ LF-12ZF-13（LIXIL）
建築金物／トップライト部ブレース：SUSロッド
　制作建具施錠金物：SHOWA 376-05
　中西産業 DC-X-14

浴室

床／モルタル FRPクリア
壁・天井／構造用合板 t=12mm FRPクリア
照明／船舶用照明
建築金物／近畿アルミニウム RDS700×1866
バスタブ／大和重工 CASTIE CIE1570
シャワー水栓金物／ CERA FM40741
　CERA HG28245S　CERA HG28535
空調機器／三菱 EX-25EMP6

トイレ・洗面所

床／スギ板 t=15mm ワックス
壁／構造用合板 t=12mm
天井／ PB t=12.5mm 漆喰ローラー塗り
家具／棚：ラワンランバーコア
照明／ E26ソケット（青山電陶）メクラプレート 電球
建築金物／グラビティヒンジ
　スライドボルト ベスト NO1621L
便器／ TOTO CS230B
洗面カウンター／ TOTO SK7
洗面用水栓金物／ INAX LF-200Z
空調機器／三菱電機 V-08PP7

ルーム3・4

床／スギ板 t=15mm ワックス
壁・天井／ PB t=12.5mm 漆喰ローラー塗り
照明／ E26ソケット（青山電陶）メクラプレート 電球

設備システム

空調　暖房方式／薪ストーブ　エアコン
　冷房方式／エアコン
　換気方式／第3種換気
給排水　給水方式／直結方式
　排水方式／浄化槽
給湯　給湯方式／ガス給湯器

撮影／新建築社写真部

南東側外観。南側のパティオ1、エントランス、北側のパティオ2、東側のテラスなど、建築を一周してさまざまな半屋外の生活の場がつくられている。

西側夕景。大きな開口部や天窓から光が漏れる。

東松山の家

Higashimatsuyama House
埼玉県東松山市

工藤浩平建築設計事務所
Kohei Kudo and Associates

南側アプローチより見る。大きな敷地に建つ築35年の離れ（中央奥）を改修し、リビング・キッチン棟（左）と、なんでもテラス棟（右）を増築。3棟によって囲われた場所をガーデン2、リビング・キッチン棟のくびれに切り取られた場所をガーデン1、なんでもテラスの北側空地から母屋の庭をガーデン3と位置付け、軒の高さを操作することでそれぞれの関係性や距離感をつくり出している。

いくつかのマテリアルとストラクチャーで返し縫う

敷地は先祖代々300年以上前から住み続けてきた自然豊かな土地を、約110年前に分家として分けられた場所である。家族の変化や木々の成長と共に改修や増築を重ねる中、建主である夫婦は2世代前に建てられた「母屋」と建主の世代に建てた「離れ」のふたつの家の間を、行き来して過ごす生活をしていた。時間が流れ、ふたり暮らしになった建主は娘夫婦や孫たちを呼ぶことができる新しい生活を希望していた。そこで、建主世代に建てた思い入れのある「離れ」を残しながら、この土地が持つ豊かさを取り込み、未来に引き継ぐ改修と増築を行うことにした。

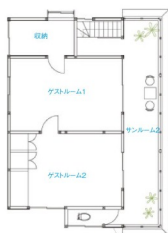
既存の建築と敷地内の庭、隣接する本家の自然、新しくつくる増築部といった要素を、バラバラではなくまるごとひと繋がりの環境にするために、それぞれの状態に合わせてストラクチャーを直したり新しく足したりしながら、既存部と増築部を共通のマテリアルで返し縫うように計画した。構成として、既存部に対して3つの性格の異なるガーデンをつくりながら、大きなふたつの屋根を増築した。ひとつは食事やくつろぎに集う「リビング・キッチン棟」、もうひとつはほとんどが屋外の軒下空間の「なんでもテラス棟」である。2枚の屋根は合理的かつ経済的に大きくつくるために木製サンドイッチパネルのストラクチャーとし、屋根の形状は周辺環境や光や風、使い方に合わせて角度や高さをつけ、立面が固定されないやわらかな関係をつくった。たとえば、なんでもテラスの本家側の軒は1,900mmまで下げること

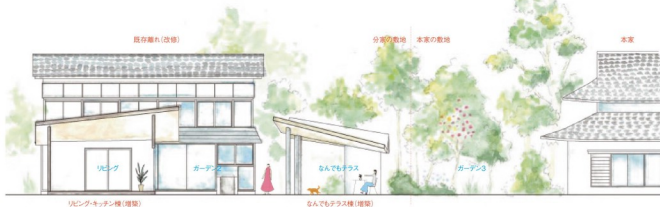
サンルーム1よりガーデン2越しになんでもテラス棟を見る。鉄骨造の既存離れ(左)は、ベランダをアルミサッシで囲って内部化し、同じくアルミ造の渡り廊下を増築することで、リビング・キッチン棟と繋いでいる。

で視線を遮りつつも庭を繋げ、また中心は4,600mmまで軒を上げることで光を取り込み、人の集まる場をつくった。また、本家と分家の敷地の間で「ウラヤマ」と呼ばれ鬱蒼としていた森の木々も、両者と話し合いながら間引き、本家の庭も自分たちの庭の延長のように感じられるような明るい空間とした。
既存離れの前面部には新しくアルミ造のサンルームをつくり、生活の場を外へと押し広げた。その際、古くから残る井戸をアルミサッシで抱き込むかたちで残した。以前の面影を残しながらも増築部に置いていかれないよう、アルミサッシやスチールのストラクチャーを増築部と同じ色合いに塗り直して新しいガラスで囲った。壁や建具にも増築部と同じマテリアルを持ち込んだ。そんなふうに、今までの記憶や愛着をどう引き継げるのかを考えるのと同時に、既存のものに過度に媚びることなく、生活の瑞々しさを取り戻すよう部分に対応しながら直していくと、どこからが既存でどこまでが増築か分からない不思議な状態が生まれた。以前からあったもの、新しく持ち込まれたもの、すべてが並列に置かれ、その背後に豊かな自然が広がっている。これまでの、不便ささえも乗り越えてしまうような建主の生活のたくましさが、おおらかな環境と混ざり合い、程よい緩さが現れた。全部がバラバラなストラクチャーでありながら、お互いにギュッと手を掴みあったようなひとつの家ができたと思っている。（工藤浩平）

なんでもテラス棟より見る。正面にリビング・キッチン棟、右手に既存離れ。鉄筋コンクリート造による
なんでもテラス棟は、直径175mmの柱とコアで、厚さ186mmの木造パネル屋根を支える。基礎工事と
合わせて紙管型枠を使ったコンクリート柱と耐震壁を一緒に打設することでコストを削減した。既存離れ
の屋根は、新築部のガルバリウム鋼板による外壁とアルミサッシの色味に合わせてシルバーで塗装。

リビングよりキッチンを見る。左手にガーデン2、右手にガーデン1を見る。下部構造から束で支える
ことで大きな木製サンドイッチパネルによる屋根を浮かせ、スリットから室内に光が差し込む。

Renovation 複数のストラクチャーで紡ぐ関係性

左：西側上空より見る。既存離れのベランダもサンルームに改修された。中央奥に本家の母屋。右：南西側俯瞰。奥に本家の庭（ガーデン3）が連なる。今回の工事に合わせて本家の庭の木々も間引き、散歩コースを整えた。

既存離れの2階サンルーム2。既存アルミフレームをシルバー塗装しサッシを取り付け内部化。

断面図　縮尺1：200

配置図　縮尺1：2,500

東松山の家

所在地／埼玉県東松山市
主要用途／住宅＋多目的スペース
家族構成／夫婦

設計
工藤浩平建築設計事務所
　担当／工藤浩平　小黒日香理
構造　平岩構造計画　担当／平岩良之
　シェルター　担当／山口徹
照明　飯塚千恵里照明設計事務所
　担当／飯塚千恵里

施工（増築）
住建トレーディング＋東急ホームズ
　住建トレーディング担当／工藤源聖
　東急ホームズ担当／佐藤輝　川村大祐
設備　小林設備工業　担当／小林直人
電気　山崎電設　担当／山嵜茂一　山嵜達也
造園　メディアグリーン　担当／中山勇
大工　畠山智和　吉田稔　戸来清範
　荻野政光　夏堀剛稔
屋根・外壁　東邦レオ
　担当／阿部泰久　森山弘之
那須板金工業　担当／斉藤久雄
施工協力　シェルター
　担当／木村仁大　佐藤公紀　山口徹
家具（テーブル）　ニューファニチャーワークス
　担当／佐藤剛　小林鯉太郎

施工（改修）
住建トレーディング
　担当／清水修　北村利光
設備　小林設備工業　担当／小林直人
電気　栄光電器　担当／金井塚正夫
外構　秦土建　担当／秦一巳
塗装　ケーツー塗装　担当／小林幸一
大工　悟工務店　担当／石川悟
アルミ　仙波義彦

構造・構法
主体構造・構法　鉄骨造＋木造（改修）木造
　鉄筋コンクリート造　アルミ造（増築）
基礎　ベタ基礎

規模
階数　地上2階
軒高 5,692mm　最高高さ 6,822mm
敷地面積　688.26m²
建築面積　112.39m²（増築）
　47.19m²（改修）
延床面積　112.39m²（増築）
　88.59m²（改修）

工程
設計期間　2017年3月～2017年12月
工事期間　2018年2～10月

敷地条件
地域地区　市街化調整区域
道路幅員　南4.0m　駐車台数　2台

外部仕上げ
屋根／ガリバリウム鋼板（増築）、既存瓦屋根

既存離れ
既存瓦屋根
既存アルミフレーム 一部撤去 塗装塗り直し
既存クロス天井
クロス貼替え 既存壁下地
ラワン合板 t=5.5mm +OP PB t=9mm 既存 壁下地
ゲストルーム
サンルーム2
アルミフレーム フロートガラス t=8mm
塩ビタイル t=3mm 既存 床下地
フローリング t=15mm 下地合板 t=12mm パーティクルボード t=20mm 鋼製束
既存外壁の上、塗装塗り直し
既存スレート屋根の上、塗装塗り直し
鉄骨部、塗装塗り直し
エキスパンションジョイント
ラワン合板 t=5.5mm +OP PB t=9.5mm
クロス貼り PB t=9.5mm 木下地
クロス貼り PB t=9.5mm 軽天下地
アルミフレーム PB t=9mm EP塗装
ガーデン3
ベッドルーム
サンルーム1
エントランス
ビニールタイル t=3mm 下地合板 t=12mm パーティクルボード t=20mm 鋼製束
左官仕上げ 既存床
本家の敷地　分家の敷地
改修　増築
2,730　2,730　1,820　3,140

断面詳細図　縮尺1：75

左：リビングより渡り廊下を見る。突き当たりの既存部の壁は、新築部と素材を揃えてラワン合板で仕上げることで新旧が緩やかに連続することを意図した。中：北側より見るなんでもテラス棟。軒の高さは隣合うものとの関係性によって1,900〜4,600mmまで変化をつけている。右：本家の散歩コースより見る。

のまま（改修）
外壁／ガリバリウム鋼板（増築）、ウレタン塗装（改修）
開口部／アルミサッシ、既存アルミサッシ
外構／芝生、砂利

内部仕上げ

リビング　キッチン（増築）
床／フローリング
壁／ PB 水性塗料
天井／ラワン合板＋保護塗料
厨房機器／
システムキッチン（タカラスタンダード）
IHコンロ、レンジフード（パナソニック）
照明／ LED（KOIZUMI、森山産業、パナソニック、モデュレックス）
シンク水栓金物／ TOTO

なんでもテラス（増築）
床／コンクリート金ごて仕上げ
壁／鉄筋コンクリート打放し
天井／ラワン合板 保護塗料

サンルーム1・2（改修）
床／コンクリート金ごて仕上げ（1F）
フローリング（2F）
壁／ラワン合板 OS、アルミサッシ
天井／既存部塗装塗り直し

浴室（改修部）
ユニットバス／ TOTO

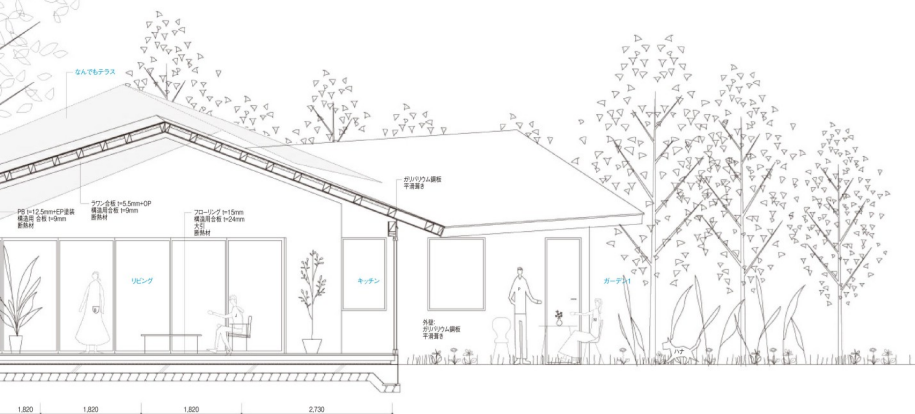
トイレ　洗面所（改修部）
床／塩化ビニルタイル
壁・天井／クロス貼り
便器・洗面カウンター・洗面用水栓金物／ TOTO

設備システム

空調　暖房方式／ルームエアコン、床暖房
冷房方式／ルームエアコン
換気方式／第三種換気
給排水　給水方式／上水道直結
排水方式／浄化槽
給湯　給湯方式／電気温水器

撮影／新建築社写真部

3点提供：工藤浩平建築設計事務所

左：改修前の離れのベランダ。右手に母屋が近接して建っていた。中：日常的に離れと母屋を行き来するために架けられていたブリッジ。右：南より見る離れ。母屋を解体した状態。

ハウス・アトリウム

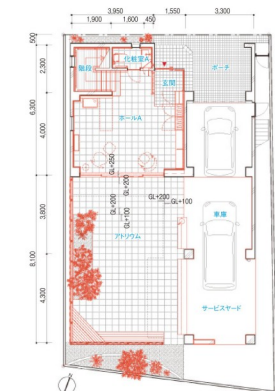
House Atrium
東京都北区

アトリエ・ワン
Atelier Bow-Wow

ホールAからアトリウムを見る。建築家、戸尾任宏設計の住宅（1978年竣工）を住み繋ぎ、夫婦ふたりのための住宅へと改修。1階は友人を招いた食事や、木工の作業など、内外をまたいだ暮らしを想定している。庭をテラコッタタイルで舗装し、横大和貼りの塀で囲い、塀の南端にはベンチと入隅の三角屋根を設けた。ピロティとの境の腰壁をカウンターに変えて、大きな屋根のない部屋に見立てている。

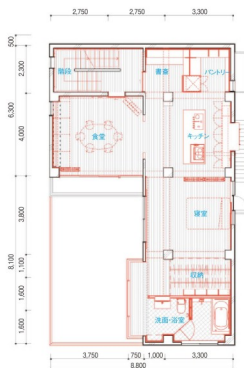
キッチンから食堂を見る。2階は夫妻の生活がここだけでも完結できるように、水回りや寝室なども備え、間仕切りと天井を撤去したワンルームとしている。既存のアーチ開口を活かし、L字平面の短手（開口部が大きく明るい）と、長手（開口部少なく暗い）を対比させている。

キッチンから寝室を見る。列柱と外壁の間を動線とし、その先に鏡を配して、視覚的には倍の奥行きとした。キッチンと主寝室の間仕切りは輻射熱冷暖房パネル。ガラスを2重ガラスに入れ替え、既存障子を重ねるなどして、開口部の断熱性を高めた。天井を照らす木製の照明もアトリエ・ワンのデザイン。

寝室からサンルームを見る。主寝室と布で仕切られた向こうはクローク。サンルームは鏡壁の後ろにある風呂場への迂回路兼、緑豊かなウィンターガーデンになっている。2階の列柱と梁は仕上げを剥いだままのコンクリート、壁は漆喰こて仕上げ、天井はコンクリートに直接漆喰塗装吹き付け。

1階平面図　縮尺1：200

2階平面図

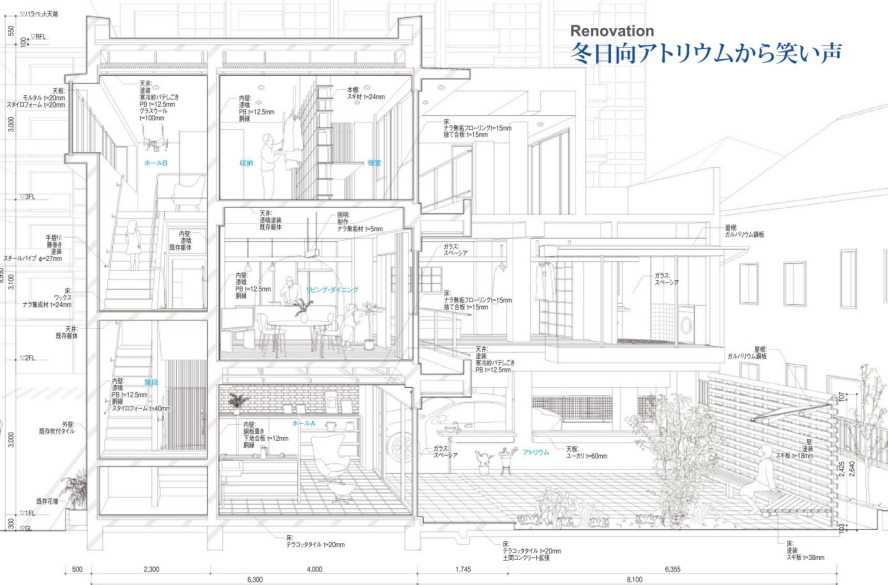
3階平面図

Renovation
冬日向アトリウムから笑い声

ハウス・アトリウム
所在地／東京都北区
主要用途／住宅
家族構成／夫婦

設計
アトリエ・ワン
担当／塚本由晴　貝島桃代　玉井洋一
宮田真
構造　金箱構造設計事務所　担当／金箱温春
樋口佑輔
外構・造園　トクゾウ　担当／徳光充子

施工
河合建築　河合孝
設備　水谷工業所　担当／水谷豪
電気　小林電気設備　担当／小林貴志
外構・造園　トクゾウ　担当／徳光充子

構造・構法
主体構造・構法　鉄筋コンクリート造
基礎　独立基礎

規模
階数　地上3階
軒高 8,950mm　最高の高さ 9,950mm
敷地面積　165.31m²
建築面積　96.61m²
（建蔽率58.44%　許容60%）
延床面積　248.50m²
（容積率150.32%　許容300%）

断面詳細パース　縮尺1：80

1階　81.35m² 2階　93.01m²
3階　74.14m²

工程

設計期間　2017年1～11月
工事期間　2017年12月～2018年9月

敷地条件

第一種住居地域　準防火地域　第三種高度地区
道路幅員　北8.3m　駐車台数　2台

外部仕上げ

屋根／既存アスファルト防水
外壁／既存吹付タイル 一部レンガタイル白塗装
開口部／既存アルミサッシ
外構／テラコッタタイル

内部仕上げ

ホールA

床／テラコッタタイル t=20mm
壁／漆喰
天井／ PB t=12.5mm 塗装
照明／スポットライト（DAIKO）　建主支給

リビング　ダイニング　キッチン　寝室
ホールB　ゲストルーム　収納

床／ナラフローリング t=15mm（ウッズ・マイスター）
壁／漆喰
天井／リビング　ダイニング　キッチン
　寝室：漆喰（プラネットウォール）
　ホールB　ゲストルーム　収納：
　PB t=12.5mm 塗装
照明／ダウンライト（DAIKO）　制作
　建主支給　既存
厨房機器／アムスタイル

浴室　トイレ　洗面所

床／コルクタイル（東亜コルク）t=13mm
壁／タイル（平田タイル）t=7mm FRP防水
天井／ PB t=12.5mm 塗装
照明／ダウンライト（ODELIC）
バスタブ／ TOTO PAS1610R/LJ
空調機器／三菱 V-142BZL
便器／パナソニック アラウーノＳⅡ

設備システム

空調　冷暖房方式／ PS
　換気方式／第三種換気
給排水　給水方式／上水道直結
　排水方式／公共下水道放流
給湯　給湯方式／ガス給湯器

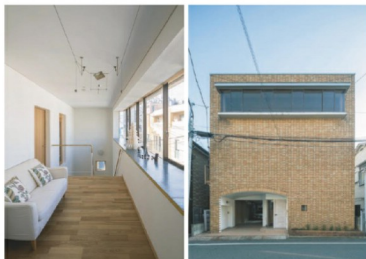
撮影／新建築社写真部

階段室から食堂とキッチンを見る。3階の廊下一部と階段の壁を撤去したことで、3階の連窓から階段室に光が届くようになった。外部に面する壁や屋根面は断熱材＋PBの上に漆喰仕上げ。内部の壁はコンクリート素地の上に漆喰仕上げ。上からの光が壁の表面をなめて肌理を浮き上がらせる。ロマネスクな触覚性。

改修前3階平面図

改修前1階平面図　縮尺1：400

改修前2階平面図

配置図　縮尺1：2,000

左：楽器を演奏したり器や花などを飾る3階のホールB。黒光りする出窓の窓台は真鍮と炭モルタルにウレタン塗装。一部床を撤去し、階段への繋がりをよくした。
右：北側外観。ピロティ、玄関に繋がる1階開口内を漆喰塗装。

住宅作品の住み繋ぎとつくり繋ぎ

塚本由晴（建築家）

1960年代、70年代に建築家により設計された住宅が、持ち主の世代交代の時期を迎えている。しかし世代を超えて住み繋ぐのは容易ではなく、解体される例も少なくない。親族が住み継がない場合は、新オーナーとマッチクングする仕組みも必要である。住み繋ぎを難しくしているのは、高い地代、老朽化による修繕・維持費、前世代との暮らし方の違いなどだが、つらいのはその住宅の価値が社会的に（親族にすら）理解されていないこと。ノスタルジーの助けもあって、町家や古民家の方がまだ理解されている。日本の建築家は住文化の樹立に失敗したのだろうか？　人口減・低成長の「成熟社会」の大事な基盤である住文化が脆いとは心細い。その旗印としても、建築家の住宅作品を住み繋ぐ意義は大きい。

アトリエ・ワンでは、縁あって清家清、篠原一男など、東京工業大学の大先輩の住宅作品の住み繋ぎを手伝っている。

1962年竣工の「島澤先生の家」（『新建築』6306）は、大きな妻面から張り出したIビームの棟木を高さ7.5mの棟持ち柱が支える、清家が数件試みた大屋根の家を代表する作品。窓に日本初のアルミサッシを用い、町屋の台所を思わせる吹抜けのキッチン床に大理石を用いるなど、古い形式と新しい技術が混ざり合う。2007年までここに住んだ義母が2011年に亡くなり、2012年から現オーナーが住み継ぎ、以来、義母時代から付き合いのある工務店に部分的な修繕を依頼してきたが、事前に詳しい相談がなく、残念な仕上がりになることがあったので、原設計の意図を読み解き、新しい工務店との意思伝達を改善する役割が、アトリエ・ワンに託された。それ以来、屋根と外壁、内部土壁、アルミサッシ、網戸、障子、畳など、部分修繕を行なう度に、できるだけオリジナルに忠実に修繕してきた。だが薄ピンクに塗装されていた米ヒノキの外壁を無塗装に戻す予算はなかったので、自然にエイジングしている軒天の色に合わせて塗り直した。

今回「ハウス・アトリウム」と題して発表する戸尾任宏による住宅の場合は、親が建てたものを現オーナー夫妻が住み繋ぐための改修である。戸尾任宏は坂倉準三建築研究所に勤め、1971年に独立し、1978年にこの住宅を完成させている。1960年から3年間パリで設計活動やロマネスク建築を行脚した経験が、開口が絞られたファサードに表れている。鉄筋コンクリート造で傷みも少ないが、新耐震基準（1981年）以前の竣工なので、改修計画に先立ち金箱構造設計事務所に耐震診断を依頼し、以下の補強方針を得た。

・目視及び設計図書を確認し、経年指標0.95を用いて診断を行った。南北方向では全階を通して外壁部分の壁が十分にあり、耐震性能はかなり高いと判断する。

・東西方向では2、3階は耐震指標（Is値）が0.6を上回り耐震性能が高いと判断するが、1階は上階に比べてIs値が小さく0.6を下回ったため袖壁補強を行う必要がある。

・改修後の間仕切壁および床の撤去により重量を軽くし、さらに耐震性能を向上させて全階でIs値0.6を上回るようにする。

夫妻はというと、夫は家具だけでなくバイオリンまで木工で自作し、コーヒーも豆の焙煎から行う。妻はバイオリンを弾き、料理が得意。社交的な夫妻は家に人を招いてもてなすことを楽しんできた。そんなふたりの人柄からすると、この建物の印象は重厚すぎるかもしれない。彼らの暮らし方に含まれる創造性が、よりよく発揮される手掛かりを探して、特徴的な要素を拾い上げ、その可能性を制限する障壁を指摘する。言うなれば「計画診断」である。

・ピロティが道路側と庭側で色々な使い勝手が想像できるが、庭とは腰壁と木格子で隔てられている。

・玄関に続く応接室はテラス窓で庭に繋がるが、手入れされていない庭は土が露出し内外をまたいだ利用を妨げている。

・ピロティより約1m幅広な2階以上には外壁からずれた独立柱が3本あるが、部屋の分割の中に隠されている。

・2階居間と食堂の間のアーチの開口、和室から庭に張り出すサンルーム的縁側など、特徴的要素の位置付けが断片的。

・閉鎖的な道路側立面を特徴付ける3階の水平連続出窓は、廊下に遮られて階段室に光を届けることができない。

島澤先生の家　修繕

所在地／東京都品川区
設計／清家清
修繕／アトリエ・ワン
竣工／1962年12月
撮影／新建築社写真部（2018年12月撮影）

幼稚園の園庭に面した南側外観。園庭との境界柵を新設、濡れ縁を修繕。

カーポート。外壁は塗装し直した。

2階よりダイニングキッチンを見下ろす。

2階のバルコニーからアトリウムを見下ろす。ピロティとの間の格子を外し、腰壁は一部壊してオリーブの古い枕木を再利用したカウンターとしている。

『パタン・ランゲージ』で示されたように、建築言語や形式は、それを取り巻く何ものかとの関係性、記憶、あるいはアンビエンスを伴っている。たとえばピロティと応接室と庭の関係からは、イタリアの街のように街路、室内、中庭をまたいだ暮らしを、アーチ開口からはポーチでの道行く人との挨拶を、サンルームからは植物への水やりや太陽に照らされる緑を、独立柱の反復からは心地よい緊張を、水平連続出窓からは器や人形、花を飾ることを思い浮かべることができる。それらはこの住宅を設計した建築家の頭に去来したかもしれないし、しなかったかもしれない。でも原設計に埋め込まれていた建築言語と形式とそれを取り巻く何ものかとの関係性の中で、料理が好きで、木工が好きで、人を招くのが好きな夫妻が活き活きする姿が想像できるならばそれでいい。逆の言い方をすれば、新しい住人のふるまいによって、埋め込まれていた建築言語と形式を取り巻いていた何ものかが花開くならばそれでいい。
たとえば友人を招いた食事や木工作業は、内外をまたいでダイナミックに展開してほしい。そこで玄関、応接から庭までをテラコッタタイルで舗装し、横大和張りの塀とピロティで囲って、庭をいちばん大きな、屋根のない室に見立てた。後から気付いたことだが、これはポンペイのアトリウム(中庭)をもつ住居形式に似ている。そして夫妻は内外をまたいだ開放的な暮らしを自然に楽しんでいる。

建築言語や形式は、建築の体系の中にあるだけでなく、それを取り巻く何ものかを伴っている。こういうエコロジカルな隣接性と形式としての隣接性の響き合いが、「住む」と「つくる」、「住み繋ぎ」と「つくり繋ぎ」を繋ぐのである。

階段の吊り材は、地元工務店により付加されていた。

キッチンの棚やダイニングテーブルも竣工当初のもの。

居間から応接室を見る。土壁を塗り替え、障子、畳を張り替えた。

頭町の長屋群
Townhouses in Kashira-cho
京都府京都市

魚谷繁礼建築研究所
Shigenori Uoya Architects
and Associates

板間の西側を見る。「頭町の住宅」（本誌1208）に続き、京都の腐朽しかかった長屋を改修するプロジェクト。敷地は京都市左京区の昔ながらの町家が数多く残る密集住宅地の街区の中央に位置する。前面道路から10mの長いトンネル路地を抜けた先にある6軒の長屋をひとつの住宅にし、敷地内の路地だった場所を庭にしながら、南北に4軒並び、内外が交互に並ぶ配置計画としている。

街区中央の混沌とした様相を継承する

「頭町の長屋群」は、京都特有の路地奥でほとんど腐朽しかかった長屋群を改修し、ひとつの住宅とするプロジェクトである。ここでは路地の突き当たりで、さらに2方向に分岐した路地に面して建つ3棟6軒の長屋を改修した。

既存の長屋群を大きく4つに分割し、南から順に、寝室＋水回り、板間（ダイニングキッチン）、土間（リビング）、畳間（ハナレ）＋水回りとし、新たな住まい手は、改修により再編された4軒の長屋に住まう。既存の長屋は狭小かつ閉塞感のあるプランニングであったが、4軒の長屋の間のスペースに3つの坪庭を設え、そこに向けて大きく開口をとることで、それぞれを開放的な空間にしている。

この住まい手は、ひとりでゆっくり過ごすこともあれば、人を招くことも少なくない。4軒の長屋は北から南へ向けてよりプライベート性が高まるように計画し、招く人の多少に応じて、空間を柔軟に使い分けられるようになっている。4軒の長屋には、オモテの街路から路地を介してそれぞれに直接アプローチすることが可能であり、たとえば北端の長屋は、居住者が留守中であっても京都を訪れた知人のゲストルームとして利用できる。4棟の長屋は、それぞれの西側で外部空間である廊下により接続されている。

伝統的軸組工法では柱梁で構成された格子に土が塗り込められることにより壁となる。外装壁も内装壁も仕上げは同じである。開口部に嵌められた建具やガラスの内側か外側かにより、内部空間か外部空間かが決まる。この廊下は内部空間が外部空間へと反転したことにより敷地内に創出された新しい路地である。

町家のファサードが整然と連続するオモテの街路に対し、街区の中央では路地や低層長屋群、木々などが入り乱れているのが近世以降の京都の伝統的な街区構造である。現在、路地奥の再建不可な敷地に建つ長屋群の多くが老朽化により崩れかかっている。長屋群の構造を健全化した改修をすることで、このような伝統的街区構造が次の世代へと継承されていくことを期待したい。（魚谷繁礼）

寝室前より板間を見る。南側には寝室など、プライベート性が高い部屋が配置され、北側に向かってパブリックな室が展開していく。改修前の路地の幅員が部屋間の距離をつくる庭となる。庭の緑は向かい合った双方の室から愉しめると同時に、双方の視線を遮る。板間はふたつの庭により緑に囲まれる。*

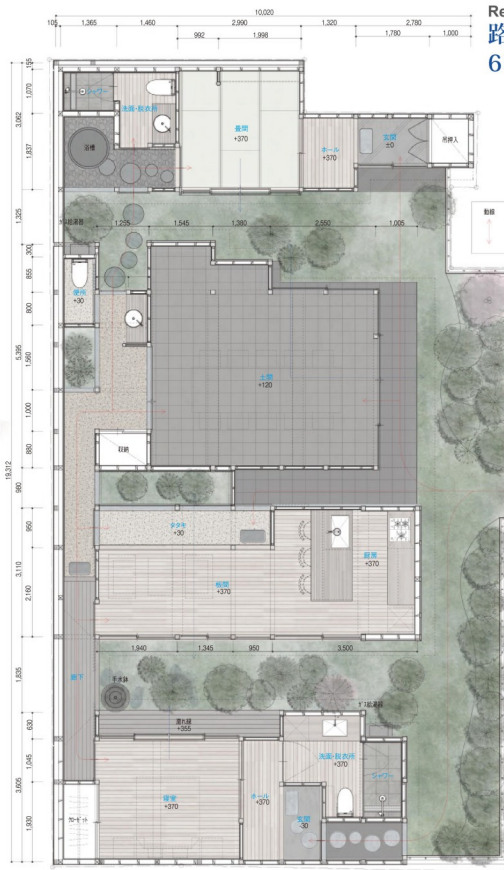
Renovation

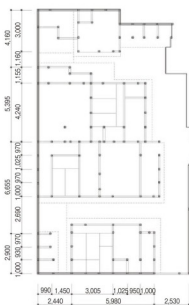
路地を庭に転換し、6軒長屋をひとつの住宅に改修する

シャワー
洗面・脱衣所
浴槽
畳間 +370
ホール +370
玄関 ±0
吊押入
ｶﾞｽ給湯器
便所 +30
土間 +120
収納
タタキ +30
厨房 +370
板間 +370
廊下
手水鉢
ｶﾞｽ給湯器
濡れ縁 +355
洗面・脱衣所 +370
シャワー
寝室 +370
ホール +370
玄関 -30
ｸﾛｰｾﾞｯﾄ
路地

動線　視線

共用トイレ ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ 共用トイレ
路地　街路
路地奥に建つ6軒の長屋群

畳間　中庭　坪庭　土間　坪庭　板間　中庭　寝室
路地　街路
路地を取り込んだひとつの住宅

ダイアグラム

平面図　縮尺1：100

改修前平面図　縮尺1：300

浴槽前から畳間を見る。

畳間。中庭を介して南側の土間が見える。

畳間から浴槽を見る。

寝室から板間を見る。屋内―中庭―屋内―中庭と屋内外の空間が交互に連続する。寝室、板間、土間、畳間は、西側の半屋外の路地のような廊下によって繋がっている。寝室から板間までは濡れ縁、板間から土間まではタタキ、土間から畳間までは飛び石。

土間。前面道路からトンネル路地を進むと北側と東側に全面開口をもつ土間が見える。床は、南東側の軒下空間と同じ敷瓦で設えられ、南側の棟と繋がる。前面道路に面して建つ町家をくぐった先の街区中央の敷地のため、植栽を設えて大開口を設けることが可能となっている。

寝室側から半屋外の廊下と屋内の板間を見る。廊下の先には坪庭が見える。廊下は折れ曲がりながら、土間を介して路地のように畳間まで繋がる。

北側の玄関から土間を見る。土間の軒下は路地からの動線となっている。

配置図　縮尺1：2,000

頭町の長屋群
所在地／京都府京都市
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦

設計
魚谷繁礼建築研究所　担当／魚谷繁礼
　魚谷みわ子　佐藤絵里　呉怡萱

企画
不動産　いえ屋　トップエステート

施工
アーキスタイル　加藤圭介
設備　繁田工業　担当／繁田和夫
電気　新井電設　担当／新井晴也
外構・造園　忠造園　担当／内海忠

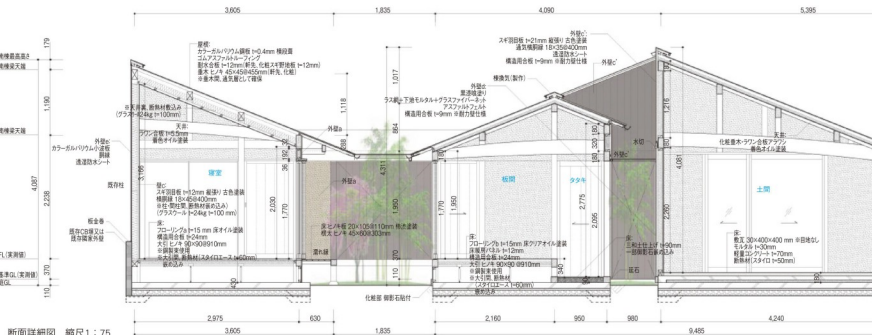
構造・構法
主体構造・構法　木造伝統工法
基礎　布基礎

規模
階数　地上1階
軒高　3,956mm　最高の高さ　4,201mm
敷地面積　222.24m²
建築面積　130.82m²
　（建蔽率58.86%　許容80%）
延床面積　114.49m²
　（容積率51.51%　許容300%）
1階　114.49m²

工程
設計期間　2017年8月～12月
工事期間　2018年1月～8月

敷地条件
地域地区　近隣商業地域　準防火地域
　三種高度地区 15m
道路幅員　東4.8m

外部仕上げ
屋根／カラーガルバリウム鋼板 横段葺き
外壁／黒漆喰塗り　土壁中塗り　スギ板張り
開口部／木製建具
外構／既存敷石　敷瓦　タタキ
　黒モルタル金ごて仕上げ

内部仕上げ
北棟・南棟：玄関　ホール
床／玄関：黒モルタル金ごて仕上げ　ホール：スギ板張り t=15mm
壁／土壁中塗り
天井／スギ羽目板張り
北棟：畳間
床／畳敷き t=55mm
壁／土壁中塗り
天井／スギ柾合板張り　スギ柾矢羽網代
北棟・南棟：洗面・脱衣所
床／スギ板張り t=15mm
壁／タイル貼り revigres
　DUAL SUPERPRETO　土壁中塗り
天井／スギ羽目板張り
洗面カウンター／ヒノキ板 t=30mm 拭漆塗り
洗面器／北棟：信楽焼鉢　南棟：Alape オーバーカウンター用ボウル EB.R585
便器／ TOTO ネオレスト AH2W
北棟・南棟：シャワー
床・壁／タイル貼り revigres
　DUAL SUPERPRETO
天井／ガラス繊維クロス入りセメント板 チヨダウーテ AQUAPANEL セメントボード

断面詳細図　縮尺1：75

西側夕景。土間と来客の宿泊場所としても使われる畳間は、視線の抜けを考慮し、開口をずらして設けている。

シャワー水栓金物／CERA CROMA160
HG27135R

北棟：浴室（外部）
床／ゴロタ石敷
壁／スギ板張り
天井／化粧垂木・化粧野地板現し
浴槽／陶器（制作）

中棟：土間　タタキ　板間　厨房　廊下
床／土間：敷瓦　タタキ・廊下：タタキ　板間・厨房：ウォールナット板張り t=15mm
壁／廊下：スギ板張り　その他：土壁中塗り
天井／化粧垂木・ラワン合板現し

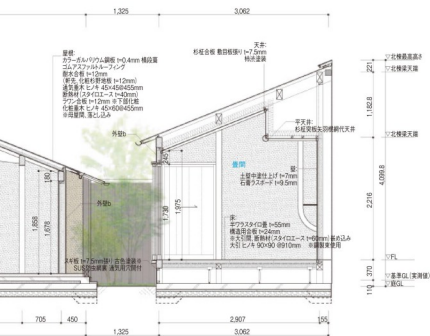
厨房機器
厨房カウンター／タモ集成材 t=30mm 拭漆塗り
ガスコンロ／リンナイ RD322G11S RD312G11S
レンジフード／ARIAFINA FEDL-952S-TBK
シンク／エクレア SQUAREステンレスシンク
洗面カウンター／ヒノキ板 t=30mm 拭き漆塗り
洗面器／信楽焼鉢
便器／TOTO ネオレスト AH2W

南棟：寝室
床／スギ板張り t=15mm
壁／土壁中塗り　スギ板張り
天井／ラワン合板張り

設備システム
空調　暖房方式／エアコン　床暖房
冷房方式／エアコン
換気方式／第三種機械換気
給排水　給水方式／上水道直結
排水方式／下水道直結
給湯　給湯方式／ガス給湯器

撮影／新建築社写真部
*撮影／笹倉洋平
家具協力／アルクインターナショナル

左・右：改修前。左は街路からトンネル路地を抜けた先、右は寝室と土間の間にあった路地。躯体をなるべく残しつつ仕上げは大幅に改修した。

2点提供：魚谷繁礼建築研究所

街路からトンネル路地を見る。

東側外観。

中山道から見る正面外観。重要伝統的建造物群保存地区である奈良井宿の町家の改修。町家として保存しながらも、断熱や採光などの環境面の向上、および生活する場所としての設えを整えた。通りに面した部屋であるミセは祭りなどの時には引き戸を外して通りに開放される。

特集：新しい価値を創造する20のアイデア

天窓の町家

Machiya of Top Lights

長野県塩尻市

ツバメアーキテクツ

TSUBAME ARCHITECTS

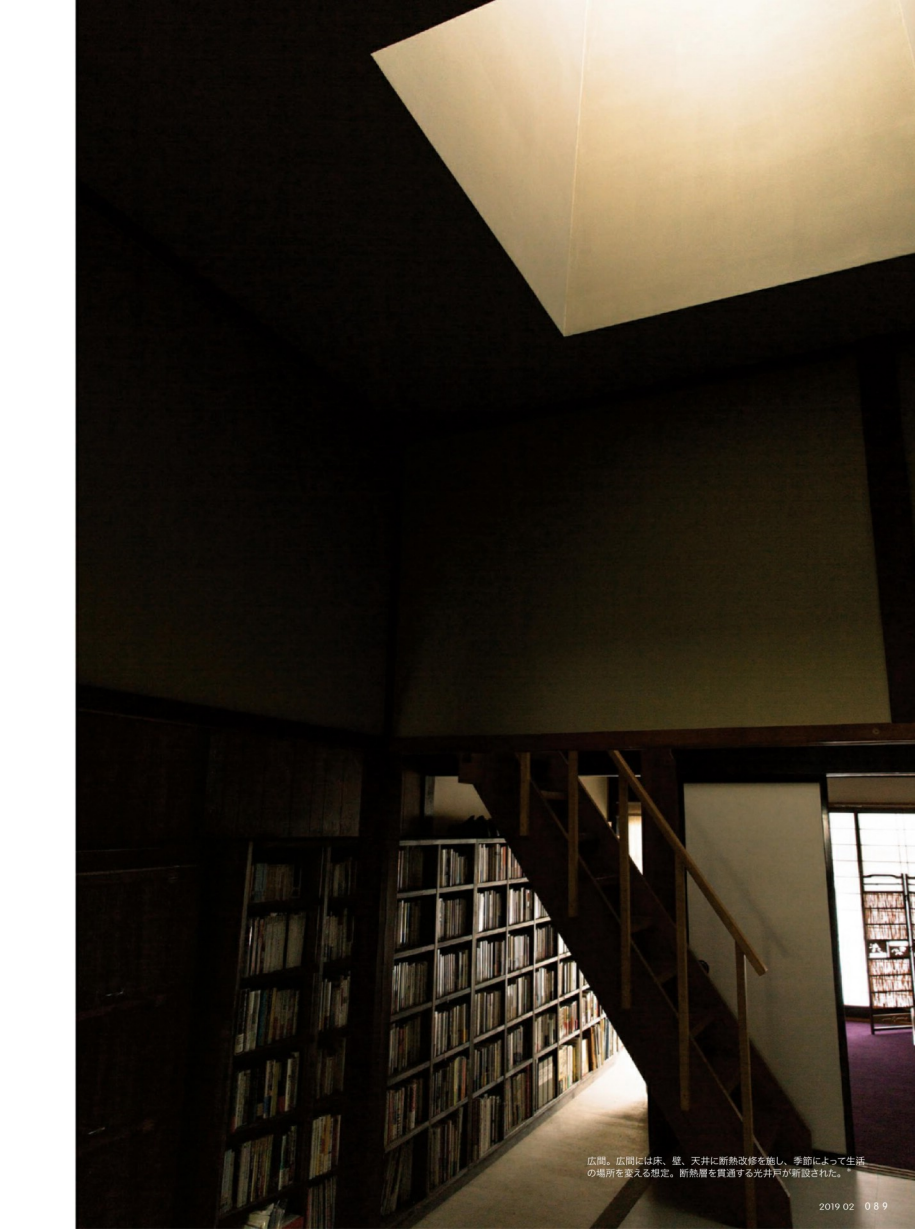
ミセと通り庭。もともとは塞がれていた土間を復活し、玄関から裏庭まで繋がる通り庭とした。数千冊の本を収める16mの本棚を備えている。

サラブレッドからハイブリッド町家へ

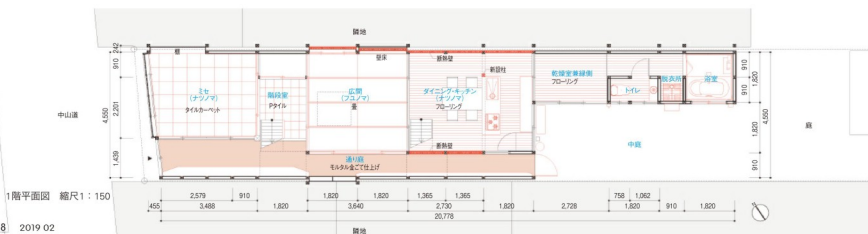
重要伝統的建造物群保存地区（以下、重伝建）である奈良井宿では、蛇行した通りに町家が次々と顔を覗かせ、川や山の風景が重なる。有機的な町並みは見事に保存されているが、全体の1/3が空き家と聞く。この地へ移住するために建主が購入した町家の改修を手掛けることになった。

重伝建の補助金は外観に限定されており、内部改修についての指針は見当たらない。参考に聞いた近所の有名な中村家住宅は、完璧に保存公開されている手本としてのサラブレッドの町家だが、今回は資料館をつくるのではない。真冬の現場を訪れると人が最近まで暮らしていたことが信じられないくらい寒く、近所のカフェや旅館も断熱がない。保存という考え方が、外観や意匠の固定に偏ってきた結果、暖かい季節にしか人が訪れない観光地としての姿が定着してしまった、この集落の問題が見えてきた。

ここでは住居としての町家との付き合い方を示すことが実践的な保存になると考えた。手数を最小限にし、外観や開放性を維持した外側と、断熱性の高い内側をつくり、それぞれナツノマ、フユノマと名付けた。季節に応じて建主が生活範囲を調整する。最も奥となるフユノマは天井懐いっぱいの金色の光井戸をもち、断熱層を光が貫通する。漆のチャブ台や襖が仄かな光の観測装置となり蘇った。また隣家とつかずはなれずのヒヤ（隙間）に壁床を設え、そこに建主が裏庭の花を生ける。通り庭を復活し、数千冊の本棚を設えた。夏祭りで開放されるナツノマは通りを彩るようにカーペットやヨシズの天井にした。

町家に住むリアリティを示すためには、その骨格に現代の暮らしの条件をハイブリッドさせ、伝統と生活のずれを意匠に昇華させていくほかない。そして重伝建における建築家の役割は、たとえひとつの町家の最小限の改修だとしても、集落全体の行く末の舵を切ることだ。

（山道拓人＋千葉元生＋西川日満里）

配置図　縮尺1：3,000

1階平面図　縮尺1：150

広間。広間には床、壁、天井に断熱改修を施し、季節によって生活の場所を変える想定。断熱層を貫通する光井戸が新設された。*

通り庭から階段室を見る。通り庭と階段室の光天井はツインカーボ2枚貼り。

広間。ヒヤ（隣家との隙間）を利用して壁床を新設。広間の壁と天井、光井戸は金色の水性塗装仕上げ。

ミセから中山道を見る。

天窓の町家
所在地／長野県塩尻市奈良井
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦

設計
ツバメアーキテクツ　担当／千葉元生
山道拓人　西川日満里　川田実可子
照明照度シミュレーション
パナソニック 照明デザイン部
担当／和田遼平

施工
野田建設　担当／赤羽弘行
設備　ケー・ピー設備　担当／武居健一
電気　菱新電設（りょうしん）　担当／新村章紀
ガス　門屋商店（もんや）　担当／小澤弘直

構造・構法
主体構造・構法　木造伝統工法
基礎　基石

規模
階数　地上2階
軒高 4,280mm　最高の高さ 6,575mm
敷地面積　188.42m²
建築面積　75.70m²
（建蔽率40.1％）
延床面積　105.03m²
（容積率55.74％）
1階　75.70m²　2階　29.32m²

工程
設計期間　2018年2～4月
工事期間　2018年5～8月

敷地条件
地域地区　重要伝統的建造物群保存地区
町並み保存地区
道路幅員　北西6m

外部仕上げ
屋根／長尺鉄板葺き（部分補修）
外壁／既存壁の上 漆喰塗り
開口部／木製建具

内部仕上げ
ダイニング・キッチン（ナツノマ）　トイレ
床／カバフローリング t=15mm
壁・天井／砂目調クロス
家具／パイン集成材 オスモ塗装
照明／ SK Lamp　パナソニック LGB73502
ビートソニック サイフォン LDF001-C
便器／パナソニック アラウーノ

浴室
ユニットバス

広間（フユノマ）
床／畳敷き
壁・天井・壁床／水性塗装仕上げ
襖／銀河 2353
照明／ Isamu Noguchi AKARI P2781X-209

ミセ（ナツノマ）
床／タイルカーペット
壁／珪藻土クロス
天井／よしず

階段室
床／ Pタイル
天井／ツインカーボクリア・乳白
襖／銀河 2187

断面詳細図　縮尺1：80

中山道から見る奈良井宿の町並み。観光地としても有名だが、空き家も多いのが現状。

照明／ビートソニック サイフォン LDF001-C

通り庭

床／モルタル金ごて仕上げ

天井一部／ツインカーボクリア

ツインカーボ乳白

設備システム

空調　暖房方式／灯油ファンヒーター

（ファンコイルユニット将来対応）

給排水　給水方式／上水道直結

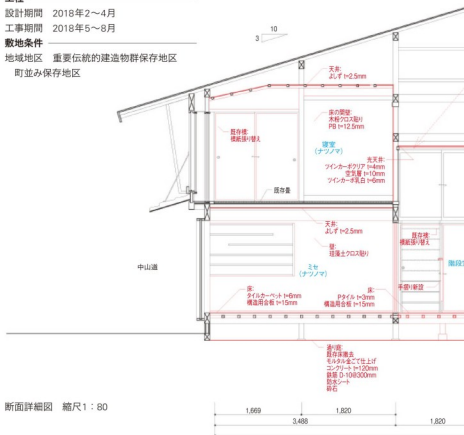
排水方式／下水道放流

給湯　給湯方式／石油給湯機

撮影／中村絵

*撮影／ツバメアーキテクツ

アイソメトリック。

Renovation
冬温し伝統に編む入れ子の間

王子学生寮
Oji Dormitory
東京都

隈研吾建築都市設計事務所
Kengo Kuma & Associates

居間から西側を見る。昭和の木造住宅を留学生のためのシェアハウスに改修する計画。ホールや納戸、茶の間などの部屋が配置されていた1階をひとつの大きな居間にし、広縁には庭を眺めるベンチを設けることで、南側の大きな庭に開放した空間とした。

昭和を溶かし繋ぐ

「昭和」に建てられた木造住宅を、留学生が緩やかな共同(シェア)生活を行うための学生寮へと改修した。

既存の外観と木造の軸組を保存することによってこの家が過ごしてきた時間を継承し、海外からの学生にもその時間の蓄積を感じてもらう。テキストを通じて日本を学び、知るのではなく、身体を通じて日本を知り、感じてもらいたいと考えた。

キッチンとシャワー室、軸組を残しながら大空間とした共用(コミュニケーション)空間を中心としてミニマムな個室群を配置し、緩やかな共同生活を誘導する平面計画とした。木造軸組を残しただけでなく、畳や欄間などのきめ細やかな古い意匠を可能な限り残し、重たい壁はなるべく使わず、障子や襖などの紙によるムーバブルなスクリーンを多用した。照明器具は、ハダカ電球を和紙で覆い、和紙のもつやわらかな質感で全体を包み込んだ。

この場所に流れる時間のやわらかさややさしさをさらに磨き上げ、その特別な時間が日本に慣れない海外の若者の緊張をほぐせたらと考えている。（隈研吾）

広縁。改修の前の魅力は残して壁と床を改修し、ベンチを設えることで、庭を望む場所をつくっている。

広縁。新たに障子を加えることで建物に柔らかい光をもち込み、断熱効果を与えている。

Renovation

昭和の木造住宅を学生寮に転換する

14,544
7,272　1,818　5,454
909　3,636　2,727　1,818　3,636
9,090
1,515　1,212　1,818　3,636　1,818　1,818　2,727　909

床:カーペット
壁:構造用合板

トイレ3　トイレ4
洗面所2
押入
廊下
床:フローリング
壁:構造用合板
脱衣所　脱衣所
シャワー室2　シャワー室3
床:FRP防水
壁:FRP防水
倉庫
床:長尺シート
壁:ビニールクロス
洋室8
床:タタミ
壁:ビニールクロス
洋室7
床:タタミ
壁:ビニールクロス
洋室5
床:タタミ
壁:ビニールクロス
洋室6
床:タタミ
壁:ビニールクロス

2階平面図

21,361.5
454.5　10,453　2,727　4,545　1,818　1,363.5
454.5　1,818　1,818　2,727　2,727　909　454.5　454.5　909　909　1,818
11,211
909　909　3,181.5　2,727　454.5　454.5　3,636　1,818　1,818　909　2,121　1,212

洋室2
床:タタミ
壁:ビニールクロス
記念室
床:カーペット
壁:構造用合板
浴室
脱衣所
脱衣所
シャワー室1
トイレ1
洗面所1
PS
トイレ2
廊下
キッチン
居間
床:カーペット
壁:構造用合板
洋室4
床:タタミ
壁:ビニールクロス
洋室1
床:タタミ
壁:ビニールクロス
洋室3
床:タタミ
壁:ビニールクロス
ウッドデッキ
広縁
玄関
床:土間コン
壁:構造用合板
庭

1階平面図　縮尺1：150

居間から庭を望む。昭和から続く日本庭園を室内に取り入れられるように、広縁から居間までの空間を区切ることなく連続させた。

記念室から居間を見る。居間のテーブルは、改修前に階段室だった場所を軸組だけ残し、柱に板を固定することで設置。東側の洋室3・4は改修前に記念室だった場所を分割して、洋室3の扉は当時のものを使用している。最新の制震ダンパーを取り入れることで、筋交いや耐力壁のない大空間を可能にしている。

2階廊下から洋室5･6を見る。

洋室2。壁の仕上げは障子や照明器具に馴染む和紙調のクロス。

玄関。天井は、既存の格天井を残している。

王子学生寮

所在地／東京都
主要用途／学生寮
家族構成／8人部屋

設計
隈研吾建築都市設計事務所　担当／隈研吾
横尾実　田口誉
構造・設備・電気　住友林業ホームテック
施工
住友林業ホームテック株式会社
構造・構法
主体構造・構法　木造軸組工法
基礎　布基礎

規模
階数　地上2階
軒高 6,969mm
敷地面積　694.44m²
建築面積　195.60m²
（建蔽率28.16%　許容76.24%）
延床面積　278.94m²
（容積率40.16%　許容271.47%）
1階　195.60m²　2階　83.34m²
工程
設計期間　2015年7月～2016年12月
工事期間　2017年2月～10月
敷地条件
地域地区　近隣商業地域　防火地域（一部
一種住居地域　準防火地域）
道路幅員　南4m　駐車台数　1台
外部仕上げ
屋根／瓦葺き
外壁／左官
開口部／アルミサッシ
外構／芝　砂利敷き　デッキ
内部仕上げ
キッチン
床／フローリング
壁／構造用合板　フレキシブルボード
天井／躯体現し　一部フレキシブルボード
厨房機器／
食洗器／パナソニック
換気扇（シェード）／特注
家具／制作
照明／特注和紙照明
建築金物／SUSバイブレーション仕上げ　天板
浴室
床・壁／磁器タイル
天井／珪酸カルシウム板
照明／ダウンライト
建築金物／アルミ特注サッシ
バスタブ／CERA
シャワー水栓金物／TOTO
トイレ1～4　洗面所1・2
床／フローリング
壁・天井／構造用合板
家具／制作
照明／ダウンライト
建築金物／ドアノブ・施錠金物：美和ロック
便器・洗面用水栓金物／TOTO
居間　記念室
床／タイルカーペット
壁／構造用合板
天井／躯体現し
家具／制作
照明／特注和紙照明
建築金物／ドアノブ・施錠金物：美和ロック
洋室1～8
床／フローリング　畳
壁／構造用合板
天井／PB t=12.5mm　クロス
家具／制作
照明／特注和紙照明
建築金物／ドアノブ・施錠金物：美和ロック
設備システム
空調　冷暖房・換気方式／ファンコイルユニット
給排水　給水方式／上水道直結
排水方式／下水道直結
給湯　給湯方式／ガス給湯器

撮影／新建築社写真部

改修前2階平面図

改修前1階平面図　縮尺1：200

配置図　縮尺1：600

南の庭側外観。

玄関正面。既存のアーチ屋根を残し、昭和の趣が香る玄関建具を設えた。

京の温所　釜座二条

Kyo no Ondokoro KAMANZA-NIJO
京都府京都市

中村好文／レミングハウス
Yoshifumi Nakamura
／ LEMMING HOUSE

坪庭。築約150年と推定される京町家を改修し、ゲストハウスとする計画。樹齢100年のマキの古木を望むように左手にライブラリーを、正面に食堂を配置。外壁はスギ板張り。

台所から坪庭を見る。つくり付けのベンチやダイニングチェアはオリジナルデザイン。壁は白聚楽の左官仕上げ。今回の全体のディレクションとファブリックはライブラリーも含め皆川明氏による。

京町家を住み継ぐ新しいプログラム

京都の魅力を数え上げれば枚挙にいとまないが、その魅力のひとつは街の散策中に落ち着いた佇まいの京町家に出会えることであった。「あった」というのは、その町家がここ数年、急激に姿を消し始めたからである。中でも築後100～200年を経た京町家の多くが空き家と化し、老朽化も進んでむざむざ取り壊されていく惨状をなすすべもなく眺めているのは無念極まりないことであった。しかしながら、こうした思いを抱くのは個人ばかりではないらしく、京都に本拠を置く大手衣料品メーカーが京町家を再生する新事業を立ち上げることになった。具体的には古い京町家を借り上げ、現代の暮らしに適応するように改修を施し、宿泊施設として利用するというプロジェクトである。そして私は縁あってその京町家改修のプロジェクトに関わることになった。

今回改修した釜座(かまんざ)の京町家は、町家としては小規模なものであるが、典型的な京町家の骨格と空間構成をもっていた。場当たり的に繰り返された改修によるダメージと、経年による老朽化は目を覆うばかりだったが、改めて建築的な視点から見れば、間取りも、構造も、空間の構成も、京町家ならではの特徴と魅力を埋み火のように備えていた。

改修した町家は当面は宿泊施設として使われるが、いずれはオーナーの住宅になる予定である。この京町家を宿泊施設ではなく、長きに渡って住み継ぐことのできる住宅に成り得るよう、設備面をはじめ断熱や遮音などの性能面にも配慮し、現代の住まいとして成立させることを改修設計の基本方針とした。天窓から降り注ぐ陽光を劇的に演出した元「通り土間」の吹抜け空間、高野槙の卵型浴槽を据えた浴室、上がり下りが愉悦となる軽やかなスチール階段、庭に設えた読書スペースなどなど、建築の豊かさが居心地に対する思い入れと、ディテールに対する心配りから生まれる事例になってくれれば幸いである。

（中村好文）

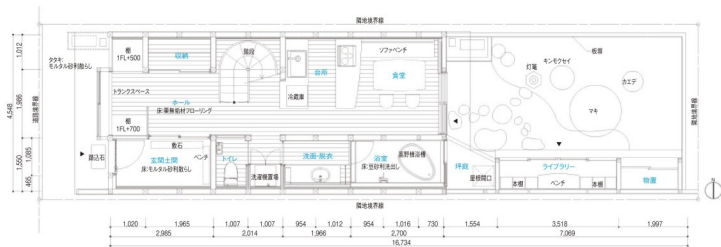
改修前1階平面図　縮尺1：400

改修前2階平面図

柔らかな明るさで満たされた京町家

長手断面のスケッチ

配置図　縮尺1：1,500

2階平面図

1階平面図　縮尺1：120

ライブラリー。短手の奥行きは800mmで天井高は2,000mm。居室からは庭を介してアプローチする。開口部は木製建具に中空にイグサを入れたポリカーボネート板を嵌め込んでいる。

2階洋室の出窓からの見下ろし。

階段の見上げ。既存の箱階段を撤去し、半円を描くスチールの螺旋階段を挿入している。トップライトは新規に設置したもの。

脱衣・洗面上部にアーチ状に設置された格子桟。トップライトからの光が届く。

左：2階洋室。　右：浴室。楕円の浴槽は高野マキによる制作。壁・天井はヒノキ縁甲板張り。

京の温所　釜座二条

所在地／京都府京都市
主要用途／簡易宿泊所（賃貸契約終了後は専用住宅）
宿泊人数／1〜4人

設計
レミングハウス　担当／中村好文　強谷陽
外構・造園　レミングハウス
担当／中村好文　強谷陽
山下雅弘造園工房　担当／山下雅弘
ファブリック　ミナペルホネン
担当／皆川明　田中景子

施工
ツキデ工務店　現場監督／山﨑龍人
木工事　大工／田村武徳　小石原克範
鉄骨工事（螺旋階段）　むかい工業
担当／向井義孝　大島健次
左官工事　松下左官店　担当／松下輝孝
塗装工事　金光塗装　担当／金光浩治
建具工事　トクダ　担当／小山正宣
内部家具工事　工作房
担当／加藤治　加藤斎
鈴幸装備　担当／鈴木一彦
電気・空調換気設備工事　北村電気
担当／野田金也　藤原博光
給排水衛生設備工事　保田設備工業
担当／保田智照
暖房設備工事（床暖房）　伊丹産業設備
担当／若杉進
外構工事（木工事）　大工／田村武徳
小石原克範
造園工事　山下雅弘造園工房　担当／山下雅弘
階段段板・木製手摺り　楓林舎
担当／横山浩司
木製引手・笠木　ineate　担当／大西仁

構造・構法
主体構造・構法　木造伝統工法
基礎　石端建て

規模
地上2階
軒高 5,400mm　最高の高さ 6,530mm
敷地面積　87.07m²
建築面積　47.11m²
（建蔽率54.10%　許容80%）
延床面積　82.13m²
（容積率94.32%　許容300%）
1階　47.11m²　　2階　35.02m²

工程
設計期間　2017年7月〜 2017年11月
工事期間　2017年11月〜 2018年6月

敷地条件
地域地区　近隣商業地域　準防火地域
高度地区　15m　第3種高度地区
既成都市区域　第3種屋外広告物既成区域
近景デザイン保全区域
道路幅員　西6m

外部仕上げ
屋根／瓦葺き
外壁／スギ板張り t=15mm染色、漆喰、カラー鉄板波板
開口部／木製建具　天窓（日本ベルックス）
外構／スギ板張り t=15mm 染色　モルタル砂利散らし

内部仕上げ
玄関土間
床／モルタル砂利散らし
壁／ PB t=12.5mm 白聚楽
天井／ PB t=9.5mm 白聚楽
玄関扉引手／ブラックウォルナット　製作
台所
床／クリ無垢材フローリング t=15mm
壁／耐水PB t=12.5mm　200mm角タイル
天井／ PB t=9.5mm 白聚楽
厨房機器／
IHコンロ／ Panasonic KZ-G33XST
ビルトインオーブンレンジ／ Panasonic

断面詳細図　縮尺1：80

西側外観。1階玄関回りの建具や壁面は既存のものを生かしている。瓦は既存のものを葺き直している。

NE-DB300P
レンジフード／ステンレス　製作
換気扇／ Panasonic FY-27BK7/19
建築金物／
シンク水栓金物／グローエ　3377001
造作家具／キッチン（工作房）

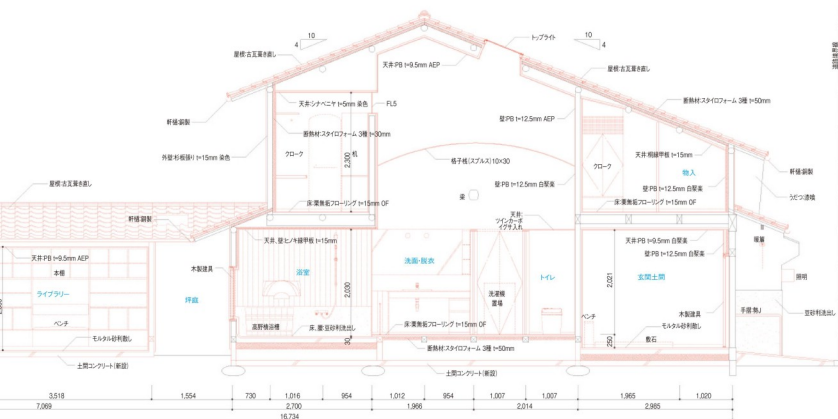
食堂
床／クリ無垢材フローリング t=15mm
壁・天井／玄関と同様
造作家具／ソファ（工作房：鈴幸装備）

浴室
床／豆砂利洗い出し
壁／ヒノキ縁甲板 t=15mm
腰／豆砂利洗い出し
天井／ヒノキ縁甲板 t=15mm
浴槽／高野槇　（檜創建）
シャワー水栓金物／ TOTO TMGG40ECR

ライブラリー
床／モルタル砂利散らし
壁／スギ板張り 染色
天井／ PB t=9.5mm AEP
造作家具／本棚　ベンチ（工作房：鈴幸装備）

洋室
床／クリ無垢材フローリング　t=15mm
壁・天井／玄関と同様
造作家具／ヘッドボード（工作房：鈴幸装備）

設備システム
空調　暖房方式／温水式床暖房
　　　ルームエアコン
　　　冷房方式／ルームエアコン
給排水　給水方式／上水道直結
　　　排水方式／下水道放流
給湯　給湯方式／ガス給湯器

撮影／新建築社写真部

川　Sen

Sen
京都市東山区

横内敏人建築設計事務所
Toshihito Yokouchi Architect & Associates

西側外観。京都市を流れる白川に面する間口2間、奥行き5間の築約70年の町家をゲストハウスに改修。構造と屋根以外のファサードおよび内部に手を入れ、川側から南の坪庭へと風の通りをよくしている。左手には1年前に同設計者が改修した同じオーナーの和食レストラン「丹」があり、両者のファサードは同色の大壁左官仕上げで統一している。

2階テラスからリビングダイニングを見通す。高さ2,300mmに天井を張り、リビングでは西面の開口にかけて傾斜させることで視線を川沿いの柳へと誘う。

2階リビング。開口部はペアガラス引戸と障子を左手壁内に引き込んでいる。右手の襖はテレビ収納。地袋にはチューナーとDVDが入っていて、リモコンが効くように引戸を網代張りとしている。

伝統素材と現代のインテリアの調和

京都市の北東部を南北に流れる白川は、源流の東山が花崗岩の地質であるため、川床が白砂で覆われているのがその名の由来である。この白川と三条通りの交差点から少し下がったところにこのゲストハウスはある。元は戦後すぐに建てられた間口2間奥行き5間の小住宅で、長い間倉庫として使われていたものを、隣に飲食店を開いたオーナーが借家しゲストハウスに改築した。建物の主要構造と屋根はそのままだが、ファサードや内装のほとんどをやり直すことになった。借家でもこのような改築が許されるのは京都独特のローカルルールなのかもしれない。

白川の清流が目の前を流れ、その両側に植えられた柳が夏は涼しげでとても美しいので、それらを見下ろしながらくつろげるように2階をリビング、ダイニング、キッチンとした。

また、敷地の奥は隣家からまる見えだったため、坪庭を囲む塀を2階分の高さの壁につくり変え、1、2階共に完全なプライバシーを確保した。これにより心置きなく窓が開けられるので、すべての建具を引き込んで全開できるようにし、川沿いの涼しい風が建物内を通り貫けるようにしている。

1階は玄関とベッドルーム、いちばん奥の坪庭に面して浴室と洗面脱衣室を配置した。壁に囲われた坪庭にはヒメシャラの大木と地苔を植え、浴室からは苔とその上に落ちる白い花を、浴室の上に設けた2階のテラスからは梢の花と緑を楽しめるようにした。

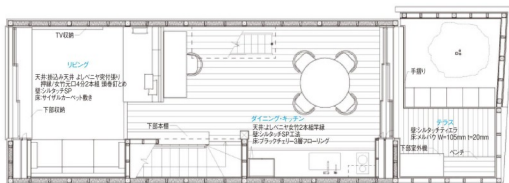
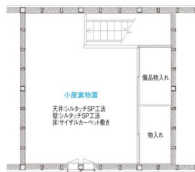
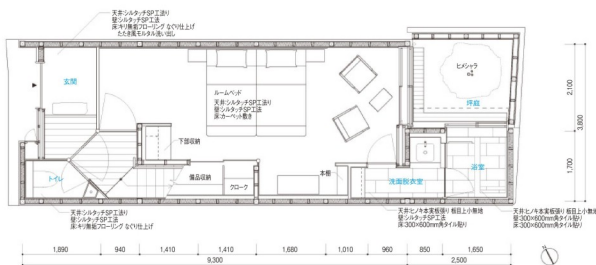
内装は京都の古い伝統を感じさせるように、茶室で使う皮付きの丸太や障子などを用いているが、それらが古くささを感じさせないように現代的にアレンジしている。またこれが古い建物の改築だということを表すために一部古材を用いるアイデアや、アンティークの北欧家具および照明器具の見立ては、趣味がよいオーナーによるものだった。　　　　（横内敏人）

配置図　縮尺1：1,000

Renovation

川沿いの景色と風を取り込む

改修前1階平面図　縮尺1：200

改修前2階平面図

2階平面図

小屋裏平面図

1階平面図　縮尺1：100

上：既存の外観。倉庫として使用されていた。　下：既存1階の土間。

2階リビング。天井はダイニング側のよしベニヤ女竹2本組竿縁張りから錆丸太で見切って、リビング側を掛込み天井としている。床座の感じを出すためダイニングから床を200mm下げ、サイザルカーペット敷きで仕上げている。

2階ダイニングからテラスを見る。坪庭に植たヒメシャラが視線を受け止める。左手の階段は小屋裏物置へと続く。右手の抜きの跡がある柱は古材を再利用している。右手のキッチンは床と同じブラックチェリー材を用いた家具として制作。

川越しに見る西側全景。

川 Sen

所在地／京都市東山区
主要用途／ゲストハウス
宿泊人数／3人

設計
横内敏人建築設計事務所
　担当／横内敏人　明後あすか
造園　菅藤造園　担当／菅藤恵輔

施工
上原工務店　担当／上原久典
大工・棟梁　樋口正三
木材　廣岡木材　担当／山口幸史

坪庭に面して設えた浴室。

設備　小畑設備工業　担当／榎本悟
電気　さのや電気　担当／檀野和宏
左官　龍園工業　担当／龍園雅臣
建具　崎浜建具　担当／崎浜雅裕
家具　Masa　担当／ Masayoshi Ichinose
板金　柿谷板金　担当／柿谷康夫

構造・構法
主体構造・構法　木造
基礎　布基礎を補強の上、べた基礎

規模
階数　地上2階
軒高5,700mm　最高の高さ7,650mm
敷地面積　50.54m^2
建築面積　38.15m^2
延床面積　73.3m^2
1階　38.15m^2　2階　35.15m^2

工程
設計期間　2016年11月～ 20017年2月
工事期間　2017年3月～ 20017年7月

敷地条件
地域地区　第2種住居地域　法第22条区域
　岸辺型美観地区
道路幅員　西5.4m

外部仕上げ
屋根／大屋根：既存瓦屋根補修　下屋：カラーガルバリウム鋼板　竪はぜ葺き
ポーチ小庇：カラーガルバリウム鋼板　平葺き
外壁／シルタッチティエラ（フジワラ化学）
開口部／木製建具：ベイヒバ　複層ガラス
外構／玄関・床：たたき風モルタル洗い出し
　腰壁：大谷石貼り　テラスの床：メルバウ t=20mm

内部仕上げ

玄関
床／キリ無垢フローリング t=15mm（北洋木材工業）　たたき風モルタル洗い出し
壁・天井／シルタッチSP工法（フジワラ化学）
照明／ダウンライト：Laser Blade（トレックス）
　ブラケット：（三浦照明）
建築金物／レバーハンドル（堀金物）

トイレ
床・壁・天井／玄関と同様
家具／制作家具ブラックチェリー
照明／ダウンライト：Laser Blade（トレックス）
建築金物／レバーハンドル（堀金物）
便器／ TOTO

ベッドルーム
床／カーペット敷き（スミノエ）
壁・天井／シルタッチSP工法（フジワラ化学）
家具／制作家具ブラックチェリー
照明／ダウンライト：Laser Blade（トレックス）
　スタンド：（三浦照明）
建築金物／レバーハンドル（堀金物）

洗面脱衣室
床／ 300×600mm角タイル貼り（ダントー　クォーツ ホワイト）
壁／シルタッチSP工法（フジワラ化学）
天井／ヒノキ本実板張り 板目上小無地
家具／制作家具ブラックチェリー
照明／ダウンライト：Laser Blade（トレックス）

浴室
床・壁・浴槽／ 300×600mm角タイル貼り（ダントー クォーツ ホワイト）
天井／ヒノキ 本実板張り 板目上小無地
シャワー水栓金物／（CERA）
空調機器／浴室乾燥暖房器

リビング
床／サイザルカーペット敷き（上田敷物）
壁／シルタッチSP工法（フジワラ化学）
天井／小舞天井：よしベニヤ突付張り（竹六商店）
押縁：女竹元口4分2本組　頭巻釘とめ
家具／造作家具ブラックチェリー
照明／ブラケット（三浦照明）

ダイニング　キッチン
床／ ブラックチェリー 3層フローリング
　t＝15mm（北洋木材工業）
壁／シルタッチSP工法（フジワラ化学）
　一部大理石キャメルベージュ水磨き　300×500（関ヶ原石材）
天井／掛込み天井：よしベニヤ突付張り（竹六商店）垂木：白竹元口 ϕ=50mm　押縁：女竹元口4分2本組　頭巻釘とめ
厨房機器／
　ガスコンロ／ IHクッキングヒーター（AEG）
　換気扇／フラットキッチンフード（ガゲナウ）
　家具／造作家具ブラックチェリー　天板：チークオイル塗装
照明／ダウンライト：Laser Blade（トレックス）　ブラケット（三浦照明）
建築金物／
　シンク水栓金物／シングルレバー混合水栓：（GROHE）
浄水器／（シーガルフォー）

設備システム
空調　冷暖房方式／ルームエアコン
　換気方式／第三種換気
　その他／床暖房　ガス温水床暖房
給排水　給排水方式／上下水道直結
給湯　給湯方式／ガス給湯器

撮影／新建築社写真部

1階ベッドルーム。右手に坪庭が見える。

1階ベッドルーム。目隠し壁の上下をガラスと障子とすることで、川辺の雰囲気を柔らかく取り込む。

▽最高高さ +7,650
10
4
既存瓦屋根
小屋裏物置
物入れ
1,950
軒樋:ガルバリウム雨樋
▽桁天端 +5,700
雨樋:ガルバリウム雨樋
エアコンチャンバー
エアコンチャンバー
外壁:シルタッチティエラ
10
3
笠木:カラーガルバリウム鋼板
天井:よしベニヤ突付け張り
押縁/女竹元口4分2本組 頭巻釘とめ
天井:小舞天井 よしベニヤ突付け張り
押縁/女竹元口4分2本組 頭巻釘とめ
2,840
障子
障子
木製建具ペアガラス
TV リビング
壁:シルタッチSP工法
2,300
ダイニング
1,860
木製建具ペアガラス
外壁:既製サイディング
1,450
手摺り:ヒノキ
外壁:シルタッチティエラ
手摺り:丸鋼
床:ブラックチェリー3層フローリング
▽2FL +2,860
450
床:サイザルカーペット敷き
200
Fix
400
Fix
天井:シルタッチSP工法
庇:カラーガルバリウム鋼板平葺き
260
ヒメシャラ
既存CB塀
2,860
壁:シルタッチSP工法
ベッドルーム
壁:シルタッチSP工法
雪見障子
木製建具:格子引違い戸
2,250
玄関
2,660
1,860
2,020
障子ペアガラス挟み込み
木製建具ペアガラス
床:カーペット敷き
▽1FL ±0
床:たたき風モルタル洗い出し
510
▽GL -510

断面詳細図 縮尺1:75

富良野の異形屋根

Variant House in Furano
北海道富良野市

髙木貴間建築設計事務所
Yoshichika Takagi＋Associates

南西側全景。北海道の農地と住宅が混在する地域に建つ。築約40年の農家を断熱と構造補強をして2世帯住宅に改修している。妻面をそのまま約1間広げるように増築し、ポリカーボネートの外壁とすることで夜になると行灯のように周囲を照らす。

北海道民家のマニエリスム

北海道では1950～60年代に三角屋根の民家の形式が確立していった（写真1）。コンクリートブロック構造でリビングが中心にあり廊下のない平面、屋根は木造で矩勾配の板金仕上げで雪を落としやすくしているのが特徴で、その背景には1953年に制定された「北海道防寒住宅建設等促進法（寒住法）*1」がある。それらは落雪スペースを残し、均質に区画された分譲宅地に美しくリズミカルな街並みを形成するに至った。

異形屋根は三角屋根の後、1960～70年代の民家である（写真2・3）。道民にとっては馴染み深い家型状ではあるが北海道以外では見たことのない形式であるように思えた。そこで北海道民家の歴史をリサーチすることから始めた。

この形式の民家は木造で、屋根は板金で葺かれている。すべての屋根が違うかたちというわけではなく、いくつかのパターンがある。屋根形状が複雑で建ち方もバラバラな異形屋根民家群は、統一感のある三角屋根の街並みとは対照的だ。この様式の変化の背景には、寒住法の融資範囲がブロック造から木造住宅へ広がったこと、長尺鉄板の普及に伴う板金技術の向上で、屋根形状も三角屋根に限定されない複雑な形状をつくることが可能になったことがある。

異形屋根住宅は、三角屋根住宅が抱えた機能的な問題に対する解決策の積み重ねの総体によって生み出されたというよりも、様式化に対するマニエリスティックな反応という、ある意味非合理な引き金によって広まったのだろう。現在においても三角屋根住宅は参照すべき技術やデザインが隠されている魅力溢れるものとして、研究者と実務者が関心を寄せ続ける対象である。一方で異形屋根住宅はポジティブにとらえられていない。しかし、大工さんや工務店による三角屋根住宅に対するマニエリスムが独創的な屋根形態を生み出したと考えると、バナキュラーでアノニマスなデザインとして新しい光が当てられてもよいのではないか。

1：三角屋根が建ち並ぶ。

2・3：さまざまなバリエーションのある異形屋根。

4：本計画の改修前の外観。

提供：髙木貴間建築設計事務所

富良野の異形屋根

本計画では異形屋根を再評価し、さらにこの住宅形態を次世代に繋いでいくことが計画のベースとなった。

既存建物は1974年に建てられ、増築を含む改修の後、1990年代に外壁改修を経て現在のかたちとなった（写真4）。40年以上に渡って住み続けられてきた家を子供夫婦の結婚を機に2世帯にリノベーションする計画である。

1階を親世帯、2階を子世帯とし、必要諸室を満足させ、断熱改修と構造補強も要請されていたため、スケルトンまで解体してから増築した。リノベーションする場合、プランは既存の窓に縛られる。そこで窓を躯体より外に付けることで自由な間取りと構造に縛られない窓配置を可能にした。3世代に渡って住み続け、2度の増改築を繰り返した住宅の歴史を、窓を額縁とした躯体に現した。

増築については、異形屋根形態をトレースして妻側に約1間建て増した。親子世帯を緩やかに繋げ、農業ハウス的な空間性質をもつ共有部として、テラス、風除室、アクセス空間などの機能を兼ね備える。農家に不可欠な土間でもあり、職と住を横断する空間である。さらに半屋外空間とすることで増築コストを抑えた。増築部の構造は105×180@1,820mmで柱が立ち、耐風圧を柱の長手方向で受けることで横架材をなくしている。構造を決定してからプランを後から重ね合わせることで、テラスや開口にズレが生じ、アップグレードされたマニエリスティクな様相が建ち現れた。（髙木貴間）

*1：北海道において防寒住宅の建設および防寒改修を促進することで気象に適した居住条件を確保し、合わせて災害の防止に資することを目的として制定された。

南上空から俯瞰する。左手の青い屋根の倉庫はもともと厩だったが、機械化で馬がいなくなった後はトラックや重機具が置かれている。奥の緑の円形倉庫には収穫時に使う大型の農器具があり、収穫物の一時的な保管庫ともなっている。

南西側外観。新規に設えた外壁の奥に、居室の開口部が透けて見える。

半屋外テラス。農作業する土間であり、テラスや風除室、また上下階の世帯を繋ぐバッファーとしても機能する。冬の晴天時は外気温10度以下になってもこの場所は30度を超えるため、半屋外テラスに向かって居室の窓を少し開けて暖気を入れると無暖房で過ごすことができる。真夏はポリカーボネート面の大きな窓を開けると外気温と同程度にすることができる。

富良野の異形屋根
所在地／北海道富良野市
主要用途／専用住宅
家族構成／親夫婦＋子夫婦

設計
高木貴間建築設計事務所　担当／高木貴間
構造　長谷川大輔構造計画
　担当／長谷川大輔
施工
京田組　担当／冨田正信
設備　後藤田設備工材　担当／杉島直樹
電気　田中電気　担当／田中稔久
構造・構法
主体構造・構法　木造在来工法
基礎　布基礎
規模
階数　地上2階
軒高 5,970mm　最高の高さ 8,060mm
建築面積　96.47m²
延床面積　185.89m²
1階　96.47m²　2階　89.42m²
ロフト階（面積不算入）17.39m²
工程
設計期間　2017年8月～2017年11月
工事期間　2017年12月～2018年4月
敷地条件
地域地区　無指定地域
外部仕上げ
屋根／長尺ガルバリウム鋼板 t=0.35mm 竪はぜ葺き
外壁／長尺ガルバリウム鋼板 t=0.35mm 竪はぜ葺き　ポリカーボネート小波
開口部／樹脂サッシLow-e複層ガラス　プラマード（YKK AP）
内部仕上げ
1階親世帯
半屋外テラス
床／土　札幌軟石飛び石
壁／ポリカーボネート小波　ラワン合板 t=12mm AEP拭き取り
天井／構造用合板素地
作業用玄関
床／コンクリート金ごて仕上げ
壁・天井／構造用合板素地 t=24mm
土間
床／コンクリート金ごて仕上げ
壁・天井／ PB t=9.5mm ビニールクロス貼り
キッチン
床／シナベニヤ t=5.5mm　オスモカラー
壁・天井／ PB t=9.5mm ビニールクロス貼り
厨房機器／システムキッチン（クリナップ rakuera）天板のみ特注
浴室
ユニットバス（Panasonic）
トイレ　洗面所
床／塩ビタイル
壁・天井／ PB t=9.5mm ビニールクロス貼り
便器／簡易水洗トイレ（LIXIL）
洗面カウンター／洗面化粧台（LIXIL）
リビング　ダイニング　寝室　個室
パントリー
床／シナベニヤ t=5.5mm オスモカラー
壁・天井／ PB t=9.5mm ビニールクロス貼り
仏間
床／畳
壁・天井／ PB t=9.5mm ビニールクロス貼り
2階子世帯
半屋外テラス
床／構造用合板 t=24mm オスモ
　ヒバ木デッキ t=30mm オスモ
壁／ポリカーボネート小波　ラワン合板 t=12mm AEP
天井／構造用合板素地
土間
床／構造用合板 t=24mm オスモ
壁／ PB t=9.5mm AEP　ラワン合板 t=9mm
天井／ラワン合板 t=9mm
キッチン
床／シナベニヤ t=5.5mm オスモカラー
壁／ PB t=9.5mm AEP　ラワン合板 t=9mm
天井／ラワン合板 t=9mm
厨房機器／シンク特注（クリナップ）天板、脚は建築工事
浴室
ユニットバス（Panasonic）
トイレ　洗面所
床／塩ビタイル
壁・天井／ PB t=9.5mm ビニールクロス貼り
便器／簡易水洗トイレ（LIXIL）
洗面カウンター／洗面化粧台（LIXIL）
リビング　ダイニング　プレイルーム　収納部屋1・2
床／シナベニヤ t=5.5mm オスモカラー

Renovation

妻面に張り出すポリカーボネートの土間空間

増築部矩計図　縮尺1：50

1階親世帯のリビングから半屋外テラス越しに畑を見渡す。開口部を構造材の外側に設置することで、間取りの自由度を確保している。

2階平面図

ロフト階平面図

ロフト階の寝室Aから寝室Bを見る。既存の小屋組を生かし、床壁天井を張り直している。

配置図　縮尺1：1,000

1階平面図　縮尺1：150

改修前1階平面図　縮尺1：250

壁／PB t=9.5mm AEP　ラワン合板 t=9mm
天井／ラワン合板 t=9mm

寝室A・B

床／シナベニヤ t=5.5mm オスモカラー
壁・天井／ラワン合板 t=9mm

設備システム

空調　暖房方式／灯油ストーブ
　　　換気方式／第三種換気
　　　給水方式／井戸水直結
　　　排水方式／下水道直結
給湯　給湯方式／灯油給湯

撮影／佐々木育弥

リノベーション工事にかかった費用

解体　約1,200,000円
総工費　約25,000,000円
坪単価　約400,000円

2階子世帯のリビング。右手奥の開口部を開けると半屋外テラスから外部に張り出すベランダが続く。いちばん濃い色の木材がもっとも古く、かつてあった小火の煤で色づいている。古い梁の下端にある補強材が34年前の改修時のもの。片筋交い、金物補強は今回の改修時に取り付けている。

静岡の家

House in Shizuoka

静岡県静岡市

後藤周平建築設計事務所

Shuhei Goto Architects

吹き抜け上部のオープンスペースを見る。昭和40年代に建てられた、延床面積114.32m²の事務所兼アパートを住宅へと改修。それにあたり余分となった2階の床を半分撤去し、2層分の吹き抜けをつくり出した。大きな連続窓の壁、開口を小さく絞った壁、大きなハイサイドライトの壁と、性格の異なる3つの壁が吹き抜けを囲む。既存梁やブレースが、現状の間取りとは無関係に行き交う。

リビングよりダイニングキッチンを見る。手前右手に室1。吹き抜けには既存の梁やブレースをそのまま残し白く塗装した。床は杉の足場板によるフローリング。1階は開口を限定し、2階の南北に向かい合うかたちで大きな開口を設けた。

余白のはたらき

昭和40年代に建てられた事務所兼アパートを住宅に転用するプロジェクト。敷地は静岡市の中心からほど近い住宅街である。ほぼ同時期に建設された住宅が建て替えの過渡期になっているエリアで、この物件と同様、周囲の住宅も建て替えや改装が進む、変化が激しい状況にある。そのような周辺環境にあって、外部と住まいの間や、住まいの室と室との間に、近くて遠い独特の距離感をつくりたいと考えた。

リノベーションでは既存建築と新しい計画に起こる大なり小なりのずれを受け入れることで、思いがけない空間の使い方に繋がることがある。このプロジェクトにおいては、事務所兼アパートの既存建築を核家族の住宅として転用するには面積が余る状況にあったため、この新旧の計画のずれを生かし、住宅の半分を2層吹き抜けの空間として、大きな余白が住宅の上部にぽっかりと空いているような構成とした。この余白経由で外部と内部、内部の室同士が関係するように、南北は大きな開口を空けて都市に開いた壁、東側は大きな連続窓を持つ個室に面した壁、西側はそれよりも開口を絞った壁として、それぞれ性格の異なる壁で余白を囲んでいる。

1階のリビング・ダイニングのための窓が2階の高さにあったり、90度ずらした室と吹き抜けの開口が重なりそこから外が見えたり、2階から既存の鉄骨梁やブレース越しに1階が見えたりと、余白のはたらきによって、それ越しに見る周りの風景が少しずつ変わって見える。それによって、外部と住まいの間や、住まいの室と室との間に、近くにも遠くにも感じる距離感が生まれた。現在の状態が将来の「既存」として、リノベーションの対象になるように、今後もこの余白は鉄骨梁の上に角材を並べてバルコニーのように使うなど、適宜アップデートしていくことが計画されている。設計者の手を離れても、さらなるリノベーションが継続されていくことを期待している。

（後藤周平）

リビングから東側個室窓を見る。吹き抜けに面した壁には約900mm幅のアクリル窓が千鳥状に開けられている。既存のトラス屋根を室内に露出し、もうひとつのファサードをつくり出すことが意図された。

1階階段より見る。ラワン合板の壁によって仕切られた玄関。

室1よりダイニングキッチンを見る。道路からの視線を避けた位置に窓を配置している。

室3より見る。左側に2層の吹き抜けが面する。吹き抜けの南北の窓から光が入る一方、向かい合う西側窓は小さく絞り、道路からの視線を制御した。天井高は2,590mm。

2階平面図

改修前2階平面図

改修前1階平面図　縮尺1：300

リノベーション工事にかかった費用

解体工事	約900,000円
キッチン回り（什器・壁）	約1,500,000円
浴室回り（壁・天井・窓回り・什器）	約2,000,000円
全体設備変更	約4,000,000円
窓回り	約2,700,000円
総工費（解体費別途）	約15,000,000円

提供：後藤周平建築設計事務所

南東より見る既存外観。事務所兼アパートとして使われていた。開口位置は間取りの改変に合わせて大幅につくり変えた。

1階平面図　縮尺1：100

天井／クロス
◎厨房機器／
　システムキッチン／サンワカンパニー
　換気扇（シェード）／渡辺製作所
浴室
ユニットバス／TOTO サザナ
トイレ　洗面所
床／長尺塩化ビニルシート
壁・天井／クロス
便器・洗面化粧台／TOTO
室1・2・3
床／クッションフロア
壁・天井／クロス
設備システム
空調　冷暖房方式／ルームエアコン
　　　換気方式／第三種換気
給排水　給水方式／上水道直結
　　　排水方式／下水道放流
給湯　給湯方式／ガス給湯器）
撮影／新建築社写真部

静岡の家

所在地／静岡県静岡市
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦＋子供

設計
後藤周平建築設計事務所
　担当／後藤周平
構造設計協力　高橋俊也構造建築研究所
　担当／高橋俊也
施工
鈴木建設　担当／河原崎益寛　寺田翼
大工　山久建築工業　担当／山下将史
電気　京電工　担当／京俊行
設備　ニッスイ工業　担当／上原富一
構造・構法
主体構造・構法　鉄骨造
規模
階数　地上2階
軒高 6,200mm　最高高さ 7,700mm
敷地面積　103.21m^2
建築面積　57.16m^2
（建蔽率55.38％ 許容70％）
延床面積　85.74m^2
（容積率83.07％ 許容200％）
1階　57.16m^2　2階　28.58m^2
工程
設計期間　2015年8月～2016年2月
工事期間　2016年3月～2016年8月
敷地条件
地域地区　第二種中高層住居専用地域
道路幅員　南8.0m　西10.0m
駐車台数　2台
外部仕上げ
屋根・外壁／ガルバリウム鋼板小波
開口部／アルミサッシ（LIXIL）
外構／コンクリート平板　芝生（フジコンパクト）　砕石
内部仕上げ
リビング　ダイニング　キッチン
床／スギ足場板古材
壁／クロス

配置図　縮尺1：2,000

西側より見る夕景。ハイサイドライトから個室の連続窓が見える。外壁は既存の上にガルバリウム鋼板。天井と床はスタイロフォーム、壁はグラスウールにて断熱補強した。

Renovation

既存とのずれから生み出される余白

▽最高高さ GL+7,600
▽軒高 GL+6,200
▽2FL GL+3,610
▽1FL GL+497
▽GL±0
1,400
2,590
3,113
497
7,600

屋根:
ガルバリウム鋼板小波
既存金属板屋根材(小波)

笠木:
外壁同材曲げ加工

天井:
PB t=9.5mm ビニルクロス
野縁 40×30mm @303mm

天井:
PB t=9.5mm AEP
野縁 40×30mm @303mm
スタイロフォーム t=30mm
木毛セメント板(既存屋根下地)

吹抜け上部の大きな開口
(南北同位置)

室2

室-吹抜け間の開口
アクリル+木押縁

吹抜け

床:
クッションフロア t=2.5mm
構造用合板 t=12mm
根太 45×45mm @303mm

既存床を撤去

外壁:
ガルバリウム鋼板小波 t=0.35mm
既存金属板外壁材(小波)+下地
住宅用グラスウール 16K t=100mm

天井:
PB t=9.5mm ビニルクロス
野縁 40×30mm @303mm

既存鉄骨:
ウレタン塗装

壁:
PB t=12.5mm ビニルクロス

室1

リビング

床:
クッションフロア t=2.5mm
構造用合板 t=15+28mm
根太 45×45mm @300mm
スタイロフォーム t=40mm
大引 105×105mm @900mm(鋼製束)

床:
スギ足場板フローリング(古材) t=35mm
木材保護塗料
構造用合板 t=12mm
根太 45×45mm @300mm
スタイロフォーム t=40mm
大引 105×105mm @900mm(鋼製束)

900
2,650
3,550
3,550
7,100

断面詳細図　縮尺1：75

上：室3より吹き抜け越しに窓の外の風景を見通す。下：南東側外観。手前に駐車場。2階の南北同位置に大きく開けられたふたつの窓を通して視線が抜ける。

南側外観。寺院の境内に建つ、庫裏の改修。南側に柱を追加し、伝統的な技法でつくられる竹垣である沼津垣を取り付け、東側からアクセスしてくる人の視線を遮る。追加した柱はヒノキの通し柱に独立基礎。

伝統との接点

伊豆半島の東側、相模湾を望む寺院の庫裏の改修計画である。都内で暮らしていた建主が生活の拠点を網代に移すにあたり、これからの寺院での活動を開かれたものにすることや、都心での仕事を継続することなど、寺院と地域、そして生活との新たなバランスを築けるようにすることが求められた。

建物は築40年を超える木造建築だったため、まず環境性能と構造を現代の水準まで引き上げた。サッシの交換と断熱材の施工を全面的に行い、柱梁と土台や基礎の追加のほか、構造用合板による水平耐力の補強を、真壁の形式を維持したまま行った。

プランニングは、1階は大きな変更はせず動線を整理するのに留めたのに対し、2階にはホールと呼んでいる大きな広間を中心に設けた。建主家族が日常的にリビングとして使ったり勉強や仕事をするだけではなく、一部を仕切ってゲストルームとしたり、プライベートな間柄の人を招いたり、寺でのイベント時に子供の遊び場になるなど、さまざまな活動の受け皿となる。

真壁を維持し露出させている柱には、電源ボックス、スイッチ、照明、テンションワイヤー、棚柱などを積極的に取り付け、空間を使いこなすための下地として扱っている。また、南側ファサードのケラバ下にも柱を追加して、沼津垣（沼津地域に伝わる伝統技術の竹垣）のパネルや簾を取り付けることで、視線のカットや通用口の明確化、日射の制御など建物と周辺との関係を調整した。この沼津垣は、今では数少なくなってしまったその技術をもつ職人に制作を依頼し、簾は地域の人と職人とのワークショップによってつくるなど、伝統技術を通した地域と建物の接点にもなっている。

伝統的な形式や技術を引き受けながらも、今日的な役割や性能を発揮するよう調整することで、積み重なった慣習を解きほぐすことを目指した。

（彌田徹＋辻琢磨＋橋本健史）

特集：新しい価値を創造する20のアイデア

網代の列柱

The Columns of Ajiro

静岡県熱海市

403architecture [dajiba]

ホールから予備室を見る。柱を撤去した部分には既存仕口を活かして梁を追加し補強。建具にも構造用合板を使用している。

南側から見るホール。小屋組を活かしたハイサイドライトからの光が、部屋の中央に落ちる。

洗面所
トイレ
子供部屋
寝室
予備室
ホール
ウォークインクローゼット
ウォークインクローゼット
寝室

2階平面図

1階平面図　縮尺1：250

配置図　縮尺1：1,500

網代の列柱
所在地／静岡県熱海市
主要用途／庫裏
家族構成／親世帯夫婦＋子世帯夫婦＋子供3人

設計
403architecture [dajiba]
　担当／彌田徹　辻琢磨　橋本健史　西田沙妃
構造　yasuhirokaneda STRUCTURE
　担当／金田泰裕
施工
蒔田工務店
　担当／蒔田嘉一朗　萩原邦盛　萩原盛彦
設備　川口工業所　担当／川口洋一　川口恭弘
電気　大東電気商会
　担当／川口正太　川口宗和
外構・造園　玄庭園　担当／渡辺克彦
構造・構法
主体構造・構法　木造
基礎　布基礎
規模
階数　地上2階
軒高 5,120mm　最高の高さ 8,040mm
敷地面積　1,697.18m²
建築面積　163.13m²
（計画外建物込 562.72m²）
（建蔽率33.16%　許容60%）
延床面積　289.83m²
（計画外建物込 689.42m²）
（容積率40.62%　許容200%）
1階　163.13m²　2階　126.70m²

工程
設計期間　2016年1～12月
工事期間　2016年12月～2017年4月
敷地条件
第2種中高層住居専用地域　法22条地域
　第一種高度地区
道路幅員　西4.0m　駐車台数　3台
外部仕上げ
屋根／瓦葺き（既存）
外壁／単層弾性塗装仕上げ（東日本塗料）
開口部／アルミサッシ（YKK AP）
外構／沼津垣パネル
内部仕上げ
ダイニング・キッチン
床／複層フローリング（IOC）
壁／構造用合板 t=12mm AEP
天井／ビニルクロス（サンゲツ）
家具／ステンレス天板シンク一体成型（Eキッチン）
照明／パナソニック LGB50659LB1
トイレ　脱衣所
床／ビニルタイル（タジマ）
壁・天井／ビニルクロス（サンゲツ）
照明／パナソニック LGB73300LE1
便器／TOTO CES9564
洗面器／TOTO L700C
ホール　寝室　子供部屋　予備室
床／ラワン合板 オスモカラー
壁／構造用合板 t=12mm AEP
天井／ラワン合板 t=5.5mm
照明／青山電陶 E26-01
設備システム
空調　冷暖房方式／ルームエアコン
　換気方式／第三種換気
　その他／電気式床暖房
給排水　給水方式／公共上水道
　排水方式／公共下水道
給湯　給湯方式／ガス給湯器

撮影／新建築社写真部

リノベーション工事にかかった費用

解体工事	約2,080,000円
電気空調換気設備工事	約3,380,000円
給排水衛生設備工事	約2,340,000円
大工工事	約14,860,000円
建具工事	約3,200,000円
外構工事	約3,430,000円
総工費	約30,300,000円

ホール南側の窓辺。南側2階の窓の外には簾が取り付けられている。耐震補強の構造用合板の継ぎ目隠しとして付鴨居を参照。

南東の寝室。

子供部屋。

Renovation
伝統を受け入れ 慣習を解きほぐす

断面詳細図　縮尺1：100

須越の架構

The Frame of Sugoshi

滋賀県彦根市

403architecture [dajiba] +
滋賀県立大学川井操研究室
403architecture [dajiba] +
Kawai Lab at
The University of Shiga Prefecture

北側の湖から見る。琵琶湖畔にある、3期におよぶ増改築が繰り返された住宅を、今回第4期として別荘兼ゲストハウスに改修した。2期に増築された部分を減築し、基礎を活かしたテラスとしている。板金の補修は既存と同種のものを選び、最小限としている。

秩序と蓄積

琵琶湖畔に位置する、古い集落の中の木造住宅の改修。幾度かの増改築が施された年季の入った住宅を若い夫婦が購入し、別荘兼ゲストハウスとして利用する。

増改築は資料などから3期におよぶことが分かった。90年ほど前に第1期として小さな平屋が建てられ、第2期に湖側に増築、約30年前の第3期では2階が増築されていたが、それまでの架構に構造的な負荷をかけないように、外側に設置された柱が直接基礎に達していた。そのような継ぎ接ぎで場当たり的な改修の結果、柱梁が部分的に重なって、異なる年代の架構が複層化していた。今回の改修である第4期も、1期の架構には覆い被さるかたちで負荷をかけず、同時に3期に対してはバットレスのように側面から補強する役割をもたせた。

湖畔の建物は強い風を受けるため、湖に対して妻面を向けて吹上の影響を小さくするのが原則である。1期と2期の屋根はこの原則に反して平側を向けていたためか、接合部で雨漏りと腐食を起こしていた。よって2期は減築し、1期の屋根を架け替え、妻側を湖に向けた。

内部は、炊事場と通り土間という2種類の土間空間をつくり、民家を参照しながらも、さまざまなゲストが使う想定や、湖と積極的に連動したアクティビティを支えることができるよう計画した。

仕上げは、年代ごとに質感の異なる架構が重なっている様子が浮かび上がるように決定した。

外構と塗装は滋賀県立大学川井操研究室との協働プロジェクトで、1期の瓦を転用した人研ぎの平板のテラスを中心として、川井研究室が設計と施工を担当した。

建物固有の場当たり的に見えた架構から構造的な秩序を見出し、その延長として手を加えながらも、同時に全体としては周辺の慣習的な建ち方に習った。そのような整理を通してもなお残る時間的な蓄積ゆえのずれが、おおらかな使い方を受け止め、湖との繊細な距離感をつくることを目指した。　　　（彌田徹＋辻琢磨＋橋本健史）

架構の変遷を表したアクソノメトリック。

リビングダイニングから湖を望む。階段のある場所は1期、3期、4期の接点に当たり、年代の異なる架構が複雑に重なる。開口はそれらのずれに従い、一様でない視線の抜けが生まれている。

Renovation

歴史を重ねる架構

断面詳細図　縮尺1：80

須越の架構

所在地／滋賀県彦根市
主要用途／別荘　ゲストハウス
家族構成／夫婦＋子供2人

設計

403architecture [dajiba]
　担当／彌田徹　辻琢磨　橋本健史
　出路優亮　西田沙妃
滋賀県立大学川井操研究室
　担当／川井操　安井大揮　瓜生田優紀
　桂若菜　阪中健人　上西昴文
構造　yasuhirokaneda STRUCTURE
　担当／金田泰裕
外構　滋賀県立大学川井操研究室

施工

木々のや　担当／奥村英史　今井康智
解体　ナガイ　担当／永井慎二
基礎　永井哲工務店　担当／永井保仁
大工　木々のや　担当／奥村英史　今井康智
木材　藤田木材　丸松木材
左官　山下直三建築デザイン事務所
　担当／山下直三
板金　所澤板金工業　担当／所澤浩二
金属建具・ガラス　ウィンスリー
　担当／高木祐輔　河合弘平
木製建具　三喜木工　金子師樹
塗装（1階）　滋賀県立大学川井操研究室
塗装（2階）　鮫島塗装　担当／鮫島弘義
住設　平田タイル　担当／小川弘記
ガス　中島商事　担当／伊藤裕司
電気　湖栄設備工業　担当／林豊　梅田賢宏
水道　K-SELECT　担当／木俣進也
外構　滋賀県立大学川井操研究室

構造・構法

主体構造・構法　木造
基礎　布基礎（一部べた基礎）

規模
階数　地上2階
軒高 6,610mm　最高の高さ 7,336mm
敷地面積　177.58m^2
建築面積　 63.50m^2
（建蔽率35.76％　許容70％）
延床面積　120.16m^2
（容積率67.66％　許容200％）
1階　61.59m^2　2階　58.57m^2

工程
設計期間　2015年12月～2017年7月
工事期間　2017年8月～2018年8月

敷地条件
市街化調整区域
道路幅員　南東5.0m　駐車台数　2台

外部仕上げ
屋根／ガルバリウム鋼板竪はぜ葺き
外壁／セキノ興産 ガルバリウム鋼板長尺角波
淀川製鋼 ヨドプリント　リシン吹付け
開口部／LIXIL サーモスL FIX窓
LIXIL デュオPG 縦滑り出し窓

内部仕上げ

炊事場
床／モルタル左官仕上げ
壁／AEP塗装 一部キッチンパネル
天井／AEP塗装
業務用キッチン作業台・シンク／Tanico

リビング・ダイニング　通り土間
床／リビング・ダイニング：
オスモカラー カントリーカラーペブルグレー
通り土間：モルタル金ごて仕上げ
壁／ワラ入りモルタル左官仕上げ
天井／AEP塗装
洗面カウンター／Fonte Trading Bagni B1-B505

個室1・2　廊下
床／オスモカラー カントリーカラーペブルグレー
壁・天井／AEP塗装
その他／既存のまま

テラス
床／瓦シャモット研ぎ出し仕上げ

設備システム
空調　暖房方式／薪ストーブ
冷房方式／ルームエアコン
換気方式／第三種換気
給排水　給水方式／公共上水道直結
排水方式／公共下水道放流
給湯　給湯方式／ガス給湯（プロパンガス）

撮影／長谷川健太

リビングダイニングから通り土間を見る。階段は架構から吊り下げている部分と、収納を兼ねた箱階段との組み合わせ。

リノベーション工事にかかった費用

解体工事	約1,000,000円
大工工事	約3,000,000円
外装・補修工事	約1,660,000円
全体設備変更工事	約3,000,000円
窓回り工事（リビング・ダイニング4期）	約1,100,000円
2階工事	約650,000円
総工費	約1,333,000円

配置図　縮尺1：1,500

1階平面図　縮尺1：200

2階平面図

上：リビング・ダイニングから炊事場を見る。炊事場の壁は既存架構を現しながらも構造用合板で補強。　左：川井研究室担当のテラス。瓦をシャモットとした人研ぎの平板。
右：南側外観。1期外壁の外側に設置された新規（第4期）の架構。

上大岡台・百年土間

100 Year Lasting Earthen Floor

神奈川県横浜市

小林佐絵子＋塩崎太伸 ／ アトリエコ
Saeco KOBAYASHI＋Taishin SHIOZAKI
／ ATELIERCO

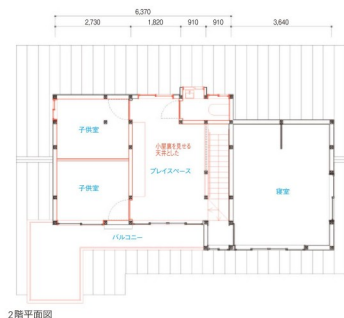
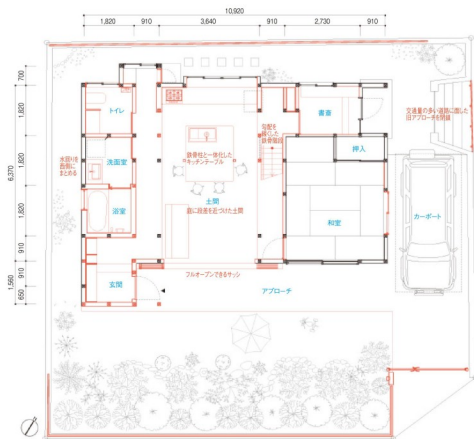
築約50年の木造戸建て住宅の改修。改修前、リビングとダイニングキッチンだった場所を約3,600x6,300mmの大きな土間とすることで、祖母が大切に育ててきた庭と連続した、親戚や友人と集まれる場とした。

南の庭から土間に風が通り抜け、玉虫色のカーテンが柔らかくなびく。2階床合板と梁の隙間には補強材が入っている。1階床レベルは土間から215mm上がっている。

1階平面図　縮尺1：150

2階平面図

改修前1階平面図　縮尺1：300

改修前2階平面図

玉虫色の土間

1964年、東京オリンピックの年に建主の祖母が建てた住宅のリノベーションである。地主だった祖母の土地は京浜電鉄敷設時に区画され、近くの土地に分散した。それらを建主の親世代が受け継いだため、祖母が亡くなった今でも親戚の拠点として機能していた。空き家となっていたこの家で打ち合わせを重ねてきたが、親戚が次々と顔を出し、そのまま宴会が開かれるような賑やかさだった。垣根を越えて庭から窓越しをコンコンと叩く光景はどこか懐かしくもあり、流れる時間も境界もルーズな関係であった。

祖母の家を次世代が引き継ぎ、新旧の対比に意味を求めるよりも、今までもこれからもここにあるという感覚の建築化を目指した。

祖母が大事にしていた庭と共に住まうことが、建主の要望であった。そこで、建物が庭の一部になるようにした。庭に大きく開いた土間をつくり、庭と床レベルを近づけ、境には玉虫色のカーテンを設えた。玉虫色とは、見方や構造で色が変わる織り色で、いくつかの解釈ができる曖昧な表現という意味もある。この土間も、見ようによっては庭続きの外部にも見えるし、板間から1段下がった室内土間にも見える。土間はこの家の中心であり、訪問者を受け入れる玄関であり、集いの場となる。

既存建物は建設当時の状態から増改築が繰り返されており、構造的にも決して安定した状態とは言えなかった。特に基礎は鉄筋探査の反応も鈍く、基礎補強と地中蓄熱式床暖房を兼ねた土間コンクリートとし、柱との緊結補強を行った。長年にわたる雨水の侵入で腐っていた木部箇所を撤去し、不要な開口部は耐力壁として補強した。痛みの激しいいくつかの柱は入れ替え、そのうち土間中央の2本は鉄骨柱にして家具の構造と一体化し、土間に浮く大きなテーブルで客人をもてなすつくりとした。室内の仕上げには既存住宅で多用されていたラワン材を主に使っている。

深い軒の奥に位置する室内の陰影と、太陽に照らされた祖母の庭が、土間で明暗差をもち、世代を超えた時間を紡ぎ、この土間が次の半世紀の生き証人となってくれたらと思う。

（小林佐絵子）

土間の中央に浮かぶ大きなテーブル（1,700×2,000mm）はキッチンのシンクとダイニングテーブルを兼ねており、2本の鉄骨柱で支えられている。

配置図　縮尺1：3,000

上大岡台・百年土間

所在地／神奈川県横浜市
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦＋子供2人

設計

アトリエコ　担当／小林佐絵子　塩崎太伸　鈴木なつき
構造／木下洋介構造計画　担当／木下洋介

施工

システムアート湘南　担当／井桁広介　大澤透
設備　築館設備　担当／築館雄太
電気　桜井電機商会　担当／桜井秀之
建具　白石物産　担当／三木宗勇
　　　佐藤建具店　担当／佐藤弘
塗装　高一　担当／高久雄一郎
家具　HALF MOON FURNITURE WORKSHOP　担当／小栗崇　小栗久美子
カーテン　hang.　担当／根本明奈

構造・構法

主体構造・構法　木造
基礎　布基礎

規模

階数　地上2階
軒高 6,200mm　最高の高さ 7,100mm
敷地面積　222.53m²
建築面積　73.35m²
（建蔽率32.96%　許容50%）
延床面積　118.07m²
（容積率53.05%　許容100%）
1階　71.70m²　2階　46.37m²

工程

設計期間　2017年2〜10月
工事期間　2017年11月〜2018年3月

敷地条件

地域地区　第一種低層住居専用地域　準防火地域
道路幅員　南4m　東6m　駐車台数　1台

外部仕上げ

屋根／既存瓦葺き
外壁／アクリルリシン吹き付け
開口部／アルミサッシ　一部木製サッシ
外構／土間コンクリート

内部仕上げ

玄関
床／モルタル金ごて　ラワン合板 t=9mm OSUC
壁・天井／ラワン合板 t=9mm OSUC

土間
床／モルタル金ごて　ラワン合板 t=9mm OSUC
壁／ラワン合板 t=9mm OSUC
　一部難燃合板　タイル t=9mm
天井／構造材現し
厨房機器
　ガスコンロ／リンナイ RD640STS
　食洗器／パナソニック NP-45KS7W
　換気扇（シェード）／
　サンワカンパニー KT06191
　家具／制作 ラワン合板 ウレタン塗装
　照明／flame 凸LAMP M30

書斎
床・壁／ラワン合板 t=9mm OSUC
天井／既存

和室
床・天井／既存
壁／砂壁　一部補修
床の間／ラワン合板 t=9mm OSUC

子供室　トイレ　洗面室
床／ビニル床タイル t=2mm
壁／PB t=12.5mm ビニルクロス
天井／PB t=9.5mm ビニルクロス
洗面ボール／サンワカンパニー WA27021
洗面用水栓金物／サンワカンパニー TA01729
便器／LIXIL アメージュ Zリトイレ

プレイスペース
床・壁／ラワン合板 t=9mm OSUC
天井／ラワン合板 t=5.5mm OSUC

寝室
床／フローリング t=12mm
壁／既存
天井／PB t=9.5mm ビニルクロス

設備システム

空調　暖房方式／地中蓄熱式床暖房
　　　冷房方式／ルームエアコン
　　　換気方式／24時間換気
給排水　給水方式／直結方式
　　　排水方式／下水道直結
給湯　給湯方式／ガス給湯器

撮影／鈴木淳平
*撮影／アトリエコ

リノベーション工事にかかった費用

解体工事	約1,200,000円
構造補強	約2,000,000円
水回り	約2,000,000円
電気	約600,000円

▽最高高さ
900
▽軒高=GL+6,200
2,650
7,100
▽2FL=GL+3,550
3,135
▽1FL=GL+415
▽土間FL
▽GL
200　215

屋根に断熱材を充填
GW16K t=100mm

外周部に断熱材を充填
GW16K t=100mm

ブレース補強

プレイスペース

ラワン合板 t=9mm OSUC
構造用合板 t=24mm
梁と根太の隙間を埋め木

ブレース補強

ブレース補強

勾配を緩くした
鉄骨階段を設置

フルオープンの建具

土間

家具と一体化した
鉄骨柱を設置

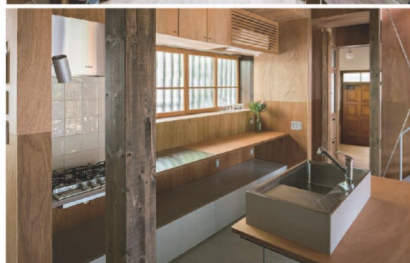
庭と段差を近づけた土間
土間コンクリート t=105mm
防湿フィルム
保護用石膏ボード t=12.5mm
サーマスラブ電熱パネル t=12.5mm
小石のない山砂 t=30mm
スタイロフォーム t=150mm
砕石転圧 t=40mm

断面パース　縮尺1：50

Renovation
庭と繋がる大きな土間

南側の庭から土間を見る。アプローチまで土間が続き、内外が連続する。玄関はもともと交通量の多い道路に面した北東側にあったが、南の庭側に新設。*

2点：改修前。*　左：旧アプローチが面する北東側の前面道路から見る。　右：庭側の外観。

断面図　縮尺1：100

上：2階プレイスペース。土間と同じラワン仕上げ。カーテンは黄と緑の2層のレース。
下：土間からキッチンを見る。右奥に見えるのは旧玄関ドア。

西新井のいえ

House in Nishiarai
東京都足立区

橋本圭央＋白石圭＋康未来
Tamao Hashimoto
＋Kei Shiraishi＋Mile Kang

南側外観。60代夫婦の終の住処として2階を中心に改修。東西にそれぞれの居室をもつ夫婦が適度な距離感とコミュニケーションをとるためのベランダを南側一面に配置。外壁の向きを操作することで、前住居での庭を介した夫婦の関係性を取り込む。

バルコニーを見下ろす。趣味の異なる夫婦の視線や行動パタンを観察・記述しつつ、バルコニーに面した外壁の向きを決定。奥さんの趣味である鉢植えが小さな抜け道や領域をつくりながら並ぶ。

デ／リタッチ：不協和音の庭

60代の夫婦が長年暮らした自宅の近くに所有する鉄骨造2階建ての建物を改修し、ふたりの終の住処とする計画である。1階の親族が営む歯科医院を残したまま、1階玄関と2階全体をほぼスケルトンにして、南側を除いた既存外壁及び鉄骨の骨格を活かした改修を行った。

当初からの注文は、夫婦それぞれの個室を離して設けることや鉢植えをなるべくたくさん置けるバルコニーをつくることなどであり、ひとつの空間を共有することには重きが置かれていなかった。こうした日常的に互いの生活がそれほど重なり合わないような要望の一方で、夫婦へのインタビューや設計者のひとりである娘の目線で得た気づきから、「元の住まいにあった庭」が彼らを緩やかに繋ぐ緩衝帯のような存在であることが分かった。奥さんは草木の手入れが日々の生きがいであり、ご主人も緑に囲まれてくつろぐ時間を好む。ふたりが一緒に庭で過ごすことはないものの、夫婦は庭を介してお互いの気配を察し、時間を超えて関わり合っている。

このような他者に見えにくい個々人の関係性を住宅計画の中で捉えるのは難しい。一見素通りしてしまいそうな日常の活動を生のまま捉え、住宅計画へと定着させる手法として、異なる時間―空間とそこでの人の関わりを横断して記述することができる時間地理学を援用した。具体的には、「元の住まいにあった庭」での活動や日常的なタイムラインを元に、夫婦の行動パタンを既存建物内の時間―空間へ記述し、ふたりの現状の距離感と、時間と共に移ろう関係性を計画へと転写していった。

実際の設計では、それぞれに必要十分の個室を確保することでデタッチ（分離・維持）された個々の領域を形成しながら、南側にあった奥行きの浅いバルコニーを内部深くまでジグザグ状に拡張することで、夫婦の動線や視線の関係性をリタッチ（加筆・修正）し、お互いの領域が緩やかに繋がる時間―空間としての庭を再構成している。

長年連れ添った夫婦の日常には、蓄積された不協和音も潜んでいる。その「不協和音」を取り除くのではなく、また無関係なものとして捨象するのでもなく、そこにあるものとして受け入れる「終の住処」を目指した。

見えにくい日常の微細な活動を観察・記述・設計の同時的な試みによってとらえ直すことで、「不協和音」に限らず諸処の住空間に響く多様なリズムを掴む今後の設計手法のひとつとなった。

（橋本圭央＋白石圭＋康未来）

上：ホールから奥さんの部屋と居間・食堂を見る。下：居間・食堂。バルコニーに向けて幅3,270mm、高さ1,800mmの開口をもつ。

奥さんの部屋。バルコニー開口部から隣家の下屋越しに南側の眺望が得られる。南側外壁の角度を少し西側に振ることでバルコニーを介して居間・食堂とひと繋がりの空間となる。

ご主人の部屋。バルコニー開口部から隣家の屋根越しに南側の眺望が得られる。南側外壁の角度を少し西側に振ることで西側外壁との間に落ち着いた深い軒下空間を形成している。

改修前1階平面図　縮尺1：200

改修前2階平面図

バルコニーから西側を見る。バルコニーへ張り出した外壁は、ご主人の部屋への視線を緩やかに遮る。

奥さんの部屋からバルコニーを見る。折れ曲がった外壁に囲まれるようにしてできた奥さんの部屋と居間・食堂前のバルコニーは、料理や読書を楽しみつつ植栽の世話をし、屋内外を楽しむ空間となる。

時間地理学とは、1970年代にトルストイ・ヘーゲルストランドにより提唱された、都市空間における時間―空間の経路の輪郭を表現する記述方法。上記の図では、1日の時間を示した垂直軸と本計画の物理的距離を示した水平面に、娘目線の気づきや観察を元にした、夫婦の活動と日常のタイムラインが転写されている。そこから、個々の活動パタンを維持（デタッチ）しつつ、特に「元の住まいにあった庭」を中心とした夫婦のパーソナルスペースと、異なる時間での重複を形成するジグザグの庭（リタッチ）を4次元的に検討している。（橋本圭央）

Renovation

夫婦の距離感を転写したバルコニー

1階平面図　縮尺1：100

2階平面図

西新井のいえ
所在地／東京都足立区
主要用途／医院併用住宅
家族構成／夫婦

設計
コスモポリタン／ワークショップ
担当／橋本圭央
S設計室　担当／白石圭
康未来
構造　照井構造事務所　担当／照井清道
施工
ハイカラ　担当／臼井雅志
大工　田中元　臼井淳　ヤマウチボザリカルド
メイキ
空調　本間博
給排水衛生設備　ながすい　担当／永沢一毅
電気　デンキノアオキ　担当／青木威明
建具　瀧建具店
構造・構法
主体構造・構法　鉄骨造
規模
階数　地上2階
延床面積　79.29m²（改修部分）
1階　10.74m²（改修部分）　2階　68.55m²
工程
設計期間　2017年3月～10月
工事期間　2017年7月～2018年1月
外部仕上げ
屋根／既存防水層 遮熱塗料
外壁／既存　南側のみジョリパット（ゆず肌）
開口部／既存アルミサッシ　木製建具
テラス／モルタル ウレタン塗膜防水　ベイスギ
t=35mm w=135mm
内部仕上げ
玄関
土間／モルタル金ごて仕上げ
床／カラマツ 縁甲板 t=15mm
壁／ラワンベニヤ t=5.5mm リボス カルデット
白拭き取り仕上げ
天井／デッキスラブ現し 錆止塗装　一部ラワンベニヤ t=5.5mm リボス カルデット白拭き取り仕上げ
家具／制作
照明／ボール球
建築金物／既存ドアノブ　ベスト
納戸
床・壁・天井／既存
照明／ボール球
階段室
段板・蹴込板／ラワンベニヤ t=12mm
壁／既存
天井／デッキスラブ現し 錆止塗装
照明／ボール球
ホール　居間　食堂　台所
床／カラマツ 縁甲板 t=15mm
壁／ラワンベニヤ t=5.5mm リボス カルデット
白拭き取り仕上げ
天井／デッキスラブ現し 錆止塗装
家具／制作
照明／ボール球　ルイスポールセン
建築金物／ベスト　スガツネ
厨房機器／
システムキッチン／サンワカンパニー SUS天板 ランダムサンダー仕上げ
ガスコンロ／ノーリツ プラス・ドゥ
レンジフード／パナソニック
シンク水栓金物／三栄
ご主人の部屋　奥さんの部屋　洗面室　便所
床／カラマツ 縁甲板 t=15mm
壁／ラワンベニヤ t=5.5mm リボス カルデット
白拭き取り仕上げ
天井／ラワンベニヤ t=5.5mm リボス メルドス
ハードオイル塗り
家具／制作
照明／ボール球
建築金物／ベスト　アトムリビンテック
便器／パナソニック
洗面カウンター・洗面用水栓金物／カクダイ
浴室
ユニットバス／ TOTO サザナ1616
設備システム
空調　冷暖房方式／ヒートポンプエアコン
換気方式／第三種換気
給排水　給排水方式／上下水道直結
給湯　給湯方式／ガス給湯器（都市ガス）

撮影／新建築社写真部

配置図　縮尺1：2,000

ご主人の部屋からのパース

奥さんの部屋からのパース

バルコニースケッチ

上：南東側外観。　下：ご主人の部屋の前からバルコニーを見る。外にいる人の気配は感じられながらも、外壁と植栽、屋上への階段によって緩やかに視線を遮る。

東側外観。右側が移設した玄関ドア。左側は元の玄関ドアを2階への階段踊り場の地窓とし、庇だけがが残る。

虎ノ門の住宅（改装）

Renovated House in Toranomon
東京都港区

小谷研一建築設計事務所
Ken'ichi Otani Architects

エントランスより見る。都心に建つマンションの約68m²の一室改修。
玄関扉を開けると三角形の暗闇が現れ、頂部からわずかに光が漏れる*。

エントランスより見る。三角形の頂部を構成している幅約3.3mの大扉を開くと、奥にリビングエリアが垣間見える*。

存在していたのに消えてしまう空間

エントランスドアを開くと奥に向かってパースペクティブが効いた鋭角な三角形の暗闇が広がり、グラデーション状にその深さが増幅していく。
暗闇の最深部、三角形の頂部を構成する大きな扉、は重さ故ゆっくりと開閉され、徐々に闇から白い光へと移り変わる。扉を開ききると三角形は光で満たされ姿を消し、先窄まりの空間と明るいL型に折れ曲がった空間が一体化する。そこに存在していたはずの暗闇は消え、眼前には日常の空間が広がる。
これはマンション1室の部分改装計画である。改装対象となる専有部は長方形の平面形状で、共有部との繋がりは持たない。4年前にキッチンの改装が済んでいる状況で、建主の要望は部屋数を減らすことによるスペースの拡張であった。それは既存プランの壁を一部撤去するだけで過不足なく満たされることが想像された。設備配管上、水回りの位置を大きく変更することは難しく、キッチンには手を加えない。このような条件下では、設計者が介入すべき箇所はないように思われた。
そこで、ここではアノニマスなマンションの1室に蜃気楼のように現れては消えてしまう空間をつくり出すことを考えた。記憶の中に別世界をつくるという試みである。
これまで、見えない場所やそこにはない世界を頭の中で再構築することで、実面積よりも広がりや奥行きを感じられるような空間を生み出すことに肝胆を砕いてきた。
しかし、このような手法は、特に小規模な建築において、プランニングに負うところが大きく、空間を固定し、活動に制限を与えてしまうというジレンマに陥る。活動の自由を確保しながらも、別世界を発生させることができないだろうか。
そこで、扉を壁のようなスケールまで拡張し、空間の接続の仕方を少し変えることで、日常的な風景に非日常性を出現させることを試みた。確かに「そこ」に存在していた空間。朝日と共に消え、夜と共に広がる闇のように、閉じると現れ、開くと消える。
そんな空間が差し込まれることで、脳内に別の世界が生まれ、目の前の限られた世界だけではない奥行きや広がりができたのではないかと考えている。（小谷研一）

廊下よりダイニングエリア、リビングエリアを見通す。右手前にウォークインクローゼットへの扉が大扉と同面で収まる。床はエントランスから居室まですべて600mm角のタイルで連続的に仕上げている。天井高は2,300mmで、黒く塗装した部分は2,000mmまで下げている。

左：ベッドエリアよりリビングエリアを見る。大扉の斜めのラインがベッドエリアまで延びている。右：キッチン奥の鏡越しにベッドエリアを見る。キッチンは2014年に小谷研一建築設計事務所によって改修されたもの。キッチンとベッドエリアの間には設えられたカウンターが見える。

虎ノ門の住宅（改装）
所在地／東京都港区
主要用途／専用住宅
家族構成／1人

設計
小谷研一建築設計事務所
担当／小谷研一
照明　コモレビデザイン　担当／内藤真理子
施工
スリーエフ　担当／笠原淳
設備　福永設備　担当／福永豊
電気　かすや　担当／粕谷正明
建具・家具　阿部興業　担当／松浦洋佑
構造・構法
主体構造・構法　鉄骨鉄筋コンクリート造
規模
当該改装面積　68.04m²
工程
設計期間　2016年4月〜2017年9月
工事期間　2017年11月〜2018年1月

内部仕上げ
キッチン
床／タイル t=10mm 300mm角（ニッタイ）
壁／ビニルクロス 一部鏡 t=3mm 一部ステンレスパネルNo.4仕上げ
天井／ビニルクロス
◎厨房機器／
食洗器／パナソニック NP-45MS6W
ガスコンロ／ハーマン DW36L3WASST
オーブン／ハーマン DR514CST
換気扇（シェード）／富士工業 S75ABWZ2L
家具（制作）／ニュウファニチャーワークス
担当／佐藤剛　石川徳摩
工事管理　田工房　担当／内田晃晴
照明／ダウンライト
◎建築金物／
シンク水栓金物／オールインワン浄水栓（LIXIL）
浴室
ユニットバス　パナソニック MR-Xベースタイプ
トイレ
床／タイル t=10mm 600mm角（十九田陶業）
壁／PB t=12.5mm＋GEP塗装　一部PB t=12.5mm＋ビニルクロス
天井／PB t=9.5mm＋GEP塗装
照明／DAIKO DDL-4829YW
建築金物／施錠金物／三輪ロック DA-3　隠し丁番　ローラー空錠
ペーパーホルダー／T-form FRF74-1706-001
便器／LIXIL サティスS
洗面カウンター／T-form ADF70-0404
洗面用水栓金物／トーヨーキッチン SNFA-SIMPL Y2680
洗面所
床／タイル t=10mm 600mm角（十九田陶業）
壁／PB t=12.5mm＋ビニルクロス
天井／PB t=9.5mm＋ビニルクロス
家具（制作）／阿部興業
照明／DAIKO DDL-4829YW
建築金物／施錠金物／三輪ロック DA-3　ピアノ丁番　ローラー空錠
エントランス
床／タイル t=10mm（十九田陶業）
壁／PB t=12.5mm＋ポリ合板 t=4mm
天井／PB t=9.5mm＋GEP塗装
照明／ENDO ERD5724B＋RX361N
DAIKO DDL5101YB
リビングエリア　ダイニングエリア　ベッドエリア
床／タイル t=10mm（十九田陶業）
壁／PB t=12.5mm GEP塗装
天井／PB t=9.5mm GEP塗装
家具（制作）／阿部興業
照明／DNライティング SCF-LED
ブルーテクノロジーズ BAD-BC3-2740-W
DAIKO DDL-4829YW
設備システム
空調　冷暖房方式／ヒートポンプ式エアコン
換気方式／第三種換気（24時間）
給排水　給水方式／上水道直結方式
排水方式／下水道直結方式
給湯　給湯方式／ガス給湯器）

撮影／新建築社写真部
*撮影／鳥村鋼一

リビングエリアより見る。左にキッチン、右にダイニングエリア。大扉が開かれた状態で廊下のエンドが見切れている。

断面図　縮尺1：50

Renovation
非日常を出現させる三角形の挿入

平面図　縮尺1：100

断面図　縮尺1：50

設計プロセスのダイアグラム

1.既存状態

2.寝室壁を撤去

3.廊下とリビング側の境界面を新たに設定

4.三角形が挿入される。

5.闇の三角形

6.扉が開くにつれ、闇が消えていく

7.折れ曲がりくびれた ひと繋がりの空間

栗林邸

Kuribayashi House
東京都千代田区

松岡聡田村裕希
Satoshi Matsuoka＋Yuki Tamura

リビングダイニングキッチン。都心に建つ築40年のマンションの一室の改修。LDKと個室間にあった2枚の既存壁とキッチン上部の下がり天井を撤去した際に顕わになった壁面と天井面の断片をきっかけに、家具スケールの居場所をつくっている。垂直材や面材、部材のかませ方に共通のルールを与え、主要構造部と家具を同等に扱っている。

左手の扉は主寝室、右手の既存扉は脱衣・洗面室へと続く。合板片面張りの壁面は面材を個室側に取り付け、90mm角の柱間に30mm厚の棚板を取り付け、全面本棚の壁面で仕切る。吊り棚の吊り束も90mm角、棚板も30mm厚。吊り棚は家全体を十字に縦断し、断片化した既存天井に加えて、その低い天井高によって空間のスケールを落とし、居場所の多様性を生んでいる。*

左：手前はキッチン上部の吊り棚。上部には既存の天井材の小口が見えている。*　右：個室上部の抜けを見通す。柱は既存梁の側面に固定している。*

リノベーション工事にかかった費用

解体　約1,300,000円

キッチン回り

レンジフード+ダクト移設：　約122,000円

食洗機（既存キッチンへの増設）

（パナソニック NP-P60V）：　約216,000円

電気・照明設備の移設、空調設備の移設：

約393,000円

総工費　約6,100,000円

既存梁のPBクロス仕上げのエッジが撤去した既存壁の位置を示す。同ラインでフローリングも張り直している。*

家具化したフラグメントとものがつくる居場所

築40年のマンションの80m²弱の2LDKを、夫婦と子供3人の家族のために4LDKに改修した。個室の数を増やしつつLDKを広くしたため必然的に個室は狭くなるが、新設壁はFL＋100mm以下、FL＋1,900mm以上で上下を透かし、全室の繋がりを自然に意識できるものとした。

改修にあたって、家全体を分断していた2枚の既存壁とキッチン然とした下がり天井を撤去し、それ以外の床、天井、壁をできるだけ残した。予想していなかったことだが、解体後に室内が見通せる状態になると、既存の白いクロス仕上げ面がところどころで分断され、切りっぱなしの壁や天井の断片が家のスケールを家具のスケールまで押し下げ、すでに分断された各断片の周りに場所が生まれているように感じた。そこで異なるテクスチャーの断片を残し、複数の断片を統合してものを置くことで、体が触れて身を寄せるようになる。そうした家具がつくり出すような居場所を点在させた家を目指した。

新設する柱には棚板や机を取り付けて家具と一体にし、既存の天井をさらに細かく分節するように低い新設の吊り棚を加え、家全体を家具スケールで満たした。

通常、テーブルやイス、棚などの家具は、その水平材の上下に生まれる空間を収納や着座、食事や執務のために使用して、材の小口は顕わになる。一方、壁、床、天井といった建物の要素は、面が空間を形成し、厚みや小口は見えてこない。しかしこの改修では、断片化された壁、天井の小口が顕わになり、面材間に空間が生まれることで、家具の様相を帯び始める。

上下を透かした片面仕上げの新設壁（面材ラワンランバー t=30mm）や吊り束、テーブル脚などの垂直材はすべてヒノキの角材（90×90mm）とし、一方、棚板や吊り棚、ダイニングテーブル天板はラワンランバー材（t=30mm）で統一した。ヒノキの垂直材とラワンランバーは、角材を15mm欠いて差し込む共通の納まりとした。さらに既存壁と天井の切りっぱなしのエッジも15mmかませて、主要構造部も家具的な共通のディテールとした。

改修後の天井には古い家のプランの痕跡が残り、10の天井のフラグメントが、10カ所の居場所となって現れている。新旧の面材のマテリアル（躯体コンクリート、クロス、ラワンラバー）を背景に、フラグメント化した壁や天井の断面に生活用品が収納されて、将来に渡って緩く居場所をつくり、更新されていく家である。（松岡聡＋田村裕希）

Renovation

家具化した柱で場をつくる

部屋2・3。ダイニングとの境の壁は高さ1,700mm。足元も100mm透いている。

ダイニング越しに個室を見る。壁面が低く欠き取られているスパンの奥には、つくり付けの勉強机がある。*

天井を見上げた写真のコラージュ。*

AA'断面図

BB'断面図

CC'断面図　縮尺1：100

平面図　縮尺1：100

解体によって分割された既存部分のダイアグラム

改修前平面図　縮尺1：300

栗林邸

所在地／東京都千代田区
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦＋子供3人

設計
一級建築士事務所松岡聡田村裕希
担当／松岡聡　田村裕希　吹野晃平

施工
栄建　担当／酒井宣雅　田口実樹
キッチン　東京ベニヤ　担当／一尾彰
空調換気設備　東京セントラルエアコン
担当／町田優次
電気設備　毛利電設　担当／毛利和倫

構造・構法
主体構造・構法　鉄骨鉄筋コンクリート造

規模
地下1階地上8階建て　延べ面積460.88m²
（うち2階部分の1室）
面積　76.62m²

工程
設計期間　2017年9月〜2017年12月
工事期間　2018年1月〜2018年3月

敷地条件
地域地区　商業地域　防火指定
道路幅員　北8m、西8m

内部仕上げ
キッチン
床／既存
壁／一部解体しコグチ補修
天井／解体し配線とダクトを整理
厨房機器／
食洗器／パナソニック NP-P60V
扉同色面材E3T（リリーフオークホワイト）
ガスコンロ／既存
換気扇（シェード）／既存
ダクト／スパイラルダクトに変更
作業台／造作工事、ヒノキ90×90mm
ラワンランバー t=30mm
ソケットランプ陶器／ LT-PD004-01-G035（ツールボックス）
油はね止板／強化ガラスt=5mm
シンク水栓金物／既存
リビングダイニング
床／既存壁の撤去部のみ補修
壁／一部解体、新設壁／ヒノキ90x90mm
ラワンランバー t=30mm
天井／一部解体
ダイニングテーブル（制作）／ヒノキ90x90mm
ラワンランバー t=30mm
ソケットランプ陶器／ LT-PD004-01-G035（ツールボックス）
ガスヒーター用ソケット追加
主寝室
床／既存
壁／一部解体　新設壁／ヒノキ90x90mm
ラワンランバー t=30mm
天井／解体
家具／既存収納建具を再利用
照明／既存を再利用
部屋1・2・3
床／既存
壁／一部解体、新設壁／ヒノキ90x90、ラワンランバー t=30mm
天井／解体
家具／既存収納建具を再利用
照明／既存を再利用

設備システム
空調　暖房方式／既存AC
冷房方式／既存AC
給排水　給水方式／上水道直結
排水方式／下水道直結
給湯　給湯方式／電気温水器

撮影／新建築社写真部
*提供／松岡聡田村裕希

見下ろしのアイソメトリック

既存換気扇を新設吊り棚に付け直す。吊り棚はその奥で既存梁のクロス面と直交している。*

リビング。左手は玄関ホール。天井高とその隙間に生まれる収納スペースによって、ワンルームの中に小さなスペースが生まれる。既存の天井に隠れて交錯していた配管・配線は整理し、照明器具はすべて再利用している。*

住まいの環境デザイン・アワード2019発表

第12回住まいの環境デザイン・アワードの受賞作品が発表された。「人と環境と住空間デザインの真の融合」をテーマとする本賞は、今回より審査対象とする住宅の立地を首都圏の1都7県に絞り、賞構成を変更。審査委員に東利恵、宿谷昌則、千葉学のほか末光弘和と三浦祐成（新建新聞社）の2氏を新たに迎えた。今回は全83点の作品の中から、13作品が選ばれた。受賞作品は以下の通り。
グランプリ▷「五本木の集合住宅」（『新建築』1802）＝仲俊治・宇野悠里／仲建築設計スタジオ
準グランプリ▷「稲村の森の家」（本誌1708）＝藤原徹平／フジワラテッペイアーキテクツラボ　「観察と試み —標準的な木造一軒家を60代の一人暮らしである施主が開く—」（本誌1710）＝西田司＋神永侑子＋鶴田爽／オンデザインパートナーズ
優秀賞▷「FLUID X」（本誌1703）＝芦澤竜一／芦澤竜一建築設計事務所
「日光の家」＝栃内秋彦＋佐藤季代／一級建築士事務所TAKiBI
ビルダー・工務店賞▷「MEP」＝基本設計：南雄三　実施設計：徐裕晃／杉坂建築事務所
その他受賞は下記ホームページ参照。
http://www.gas-efhome.jp/prizewinner/index.html

撮影：新建築社写真部

左から：「五本木の集合住宅」、「稲村の森の家」、「観察と試み —標準的な木造一軒家を60代の一人暮らしである施主が開く—」、「FLUID X」。

2018年度JIA25年賞発表

昨年12月14日、日本建築家協会は2018年度JIA25年賞を発表した。JIA25年賞は、地域社会に貢献し、現在も良好な状態で維持管理されている築25年以上の建物を表彰するもの。応募があった作品のうち16点を「JIA25年建築選」として登録、その後審査のうえで本賞が決定した。受賞作品の概要は以下の通り（作品名称＝設計者、竣工年）。
▷「工学院大学旧白樺湖学寮 白樺湖夏の家」＝武藤章、1968年　▷「水戸市立西部図書館」（『新建築』9208）＝新居千秋、1992年　▷「IDIC岩手暖房インフォメーションセンター」（『新建築』0905）＝彦根アンドレア／彦根建築設計事務所、1992年　▷「霞が関ビルディング」（『新建築』6806）＝新築時：三井不動産、山下寿郎設計事務所（現・山下設計）、第1、2次リニューアル工事：日本設計、第3次リニューアル工事：日本設計、鹿島建設（実施設計）、1968年　▷「小国町民体育館〈小国ドーム〉」（『新建築』8808）＝葉デザイン事務所、1988年

撮影：新建築社写真部

上：「水戸市立西部図書館」。
下：「小国町民体育館〈小国ドーム〉」。

第28回AACA賞、芦原義信賞発表

昨年11月11日、日本建築美術工芸協会（aaca、岡本賢会長）は、第28回AACA賞、芦原義信賞を選出した。本賞は建築、美術、工芸、ランドスケープなどさまざまな分野が協力し、融合して創造された文化的環境と美しい芸術的景観を対象とする。受賞作品は以下の通り。
【AACA賞】
▷「出島表門橋」（『新建築』1801）＝Laurent Ney＋渡邉竜一＋Eric Bodarwe＋岡田裕司／Ney & Partners Japan　鈴木直之＋愚川知佳／DIAGRAM
【AACA賞 優秀賞】
▷「越後妻有文化ホール・十日町中央公民館（段十郎）」＝永池雅人＋鈴木教久＋加藤洋平／梓設計
【AACA賞 奨励賞】
▷「川崎技術開発センター」（『新建築』1809）＝林総一郎／三菱地所設計
「伊根の舟屋」＝京谷友也
【芦原義信賞（新人賞）】
「梅郷礼拝堂」（『新建築』1611）＝加藤詞史／加藤建築設計事務所
その他受賞は下記ホームページ参照。
http://www.aacajp.com/

「出島表門橋」。

撮影：新建築社写真部

「梅郷礼拝堂」。

実務経験なしで一級建築士試験が受験可能に

昨年12月8日に改正建築士法が成立した。これまで一級建築士試験の受験要件であった「実務経験」が試験の前後を問わず免許登録までに満たしていればよいこととなり、若年層の資格早期取得を促す。提案は日本建築士連合会、日本建築士事務所協会連合会、日本建築家協会の設計3団体から共同で自民党建築設計議員連盟の総会で提案された。

ブルーノ・ムナーリ――役に立たない機械をつくった男

開催中　2018年11月17日～2019年1月27日
世田谷美術館　1階展示室（東京都世田谷区）　https://www.setagayaartmuseum.or.jp

2018年に神奈川県立近代美術館葉山で開幕した巡回展の最終展。絵画からプロダクトデザイン、絵本、彫刻まで幅広活動した、20世紀イタリアの美術家ブルーノ・ムナーリの作品を9つのパートに分けて紹介。プロローグとエピローグのほか、1985年に東京のこどもの城で行われたワークショップで採用された色彩やコラージュ、繰り返しなどの7つのテーマによって構成される。会場は、初期の代表作「役に立たない機械」から始まり、彼が生涯を通じて制作した300点あまりの作品をその原理をキーとして見ていくことができるように展開されている。前半では、絵は地と図の関係にあるという概念に着目し、画の中の線や色彩をすべて等価に扱ったシリーズ「陰と陽」や、色彩や触覚などを利用した文字のない本「読めない本」など、日常のあり方への疑問を共通にもちながら、同時期にまったく異なるジャンルの作品を生み出していることが見て取れる。後半では、折り曲げた1枚続きのアルミ板を落とし込んだ灰皿や誰でも絵が書けるようになるスタンプなどが展示され、シリーズ化することで、多くの人に芸術に触れてもらおうとしたことが表れている。鑑賞するだけではなく、経験的に楽しむ芸術を教えてくれる展覧会である。

左・下撮影：若林勇人　右提供／特定非営利活動法人市民の芸術活動推進委員会

左上：会場風景。右手に吊り下げられているのは、「凹凸」（1985年）。　右上：プロローグに展示された「役に立たない機械」（1934年／1983年）　右下：会場風景。　© Bruno Munari. All rights reserved to Maurizio Corraini srl. Courtesy by Alberto Munari

木下直之全集――近くても遠い場所へ――

開催中　2018年12月7日～2019年2月28日
ギャラリー エー クワッド（東京都江東区）　http://www.a-quad.jp　http://www.a-quad.jp/kinozen（特設サイト）

木下直之氏（東京大学大学院文化資源学研究室教授、静岡県立美術館館長）の研究を包括的に俯瞰する展覧会が開催されている。近代美術館の学芸員としてキャリアをスタートした木下氏は、次第に美術史の外側に追いやられてきたものへとその眼差しを向け、見世物や祭礼、駅前彫刻から近代の城、動物園など、幅広い範囲を研究対象としてきた。本展は12冊の著書を「全集」に見立て、その思索を追うもの。1章「つくりものの世界」では、一式飾りや貝細工といった日本各地でつくられてきた豊かなつくりものの数々を紹介。祭りと共にまちの風景の中に現れ、終われば消えるその場限りの造形表現は、美術館に収められ劣化が許されない現代の美術作品とは逆のあり方だ。何を「作品」とするのか、その境界線への問いが2章「作品の登場」へと繋がる。都市の祝祭的・記念的モニュメントをつくり上げる契機としての戦争に踏み込む「戦争の記憶」、芸術作品と猥褻物の境界線はどこにあるのかを問う「ヌードとはだか」など、日頃何気なく見過ごしているものに対し、改めて問いかけるような視点がさまざまに折り込まれ、観客を「近くても遠い場所」へといざなう。1月23日には藤森照信氏との対談も開催。

提供：ギャラリー エー クワッド（撮影：光齋昇馬）

2点撮影：本誌編集部

上：会場風景。右手に金物屋で売られている品々でつくられた麦殿大明神（麻疹を退治する効験のある神）。同種類の日用品を組み合わせ何かに見立てる「つくりもの」として今回制作された。　左下：展覧会期間中も本人によって解説（青字）が加筆されていく。右：全国から集められた「股間若衆」（参照：『股間若衆――男の裸は芸術か』、新潮社、2012年）。

石元泰博写真展
建築家・磯崎新、内藤廣の仕事

開催中　2018年12月23日～2019年2月23日
高知県立美術館　第4展示室（高知県高知市）　https://moak.jp

高知にゆかりのある世界的写真家・石元泰博の写真展である。磯崎新、内藤廣という石元と特に交流の深かったふたりの建築家の建築写真を中心に据えた展示会だ。磯崎の作品は「大分県立中央図書館」（1966年）から、「なら100年会館」（『新建築』9902）まで。一方の内藤の作品は現在の氏の建築手法に直結する「海の博物館」（『新建築』9211）の2枚以外、そのほとんどが「牧野富太郎記念館」（『新建築』0001）で時代的に重ならない。さらに、磯崎建築以前には丹下健三の日本近代建築群が並び、次いで「大阪万博パビリオン」（『新建築』7005）が続く。建築を支える時代背景やイデオロギーは、石元の目によってすべて捨象され、純粋なオブジェクトとして構図化され切り取られる。しかし、建築が純粋なオブジェクトになり、モノクロ写真として色まで取り除かれた時、ふたりの建築家それぞれの思想、そして戦後建築から21世紀初頭に至るまでの時間の流れが、クッキリ示される。ふたりの建築家の仕事の違いが露わになる写真展であると共に、戦後日本の建築の歩みを知ることができる展覧会でもある。いちばん最初に据えられたモンドリアンの画面構成を思わせる「桂離宮」の写真が、時代や主義主張を超越した起点として睨みを効かせているのも興味深い。

（渡辺菊眞／D環境造形システム研究所/高知工科大学）

上提供：渡辺菊眞　下2点©高知県、石元泰博フォトセンター

上：会場風景。　左下：磯崎新設計「群馬県立近代美術館」。　右下：内藤廣設計「牧野富太郎記念館」。

「地区の家」と「屋根のある広場」
イタリア発・公共建築のつくりかた

小篠隆生　小松尚 著

（A5判／230頁／2,700円／鹿島出版会）

近年、災害や超高齢社会の深刻化などによってコミュニティのあり方が問い直されている日本。本書は、日本と同様の問題を抱えながらも、市民組織が多く立ち上がり、さまざまな社会問題に取り組んでいるイタリアの6つの公共建築について、ふたつのテーマに焦点を当てて紹介。第1部「地区の家」では、地区の古い建物を改修して公民協働で運営する「みんなの場」が、第2部「屋根のある広場」では、読書のためだけではなく文化の拠点として、人と知識の新しい関係性を築く図書館が取り上げられる。物理的なものだけでなく、それぞれの運営体制やサービスといった非物理的な面まで市民に開くことに、誰もが所属意識をもつことができる公共建築をつくる手がかりがあることが語られ、そこには日本の新しいコミュニティのつくり方のヒントが詰まっている。（soy）

自然なきエコロジー
来たるべき環境哲学に向けて

ティモシー・モートン 著
篠原雅武 訳

（四六判／464頁／4,968円／以文社）

イギリス文学研究を専門にしながら、エコロジーや哲学、文学、建築まで多岐にわたり造詣が深いティモシー・モートンの主著の邦訳。2007年に刊行されて以後、哲学的で思想的な環境人文学の先駆として参照されている。
本書は「自然」の概念をエコロジーから取り除こうと試みるもので、エコロジーを「アンビエンス（とりまくもの）」としてとらえることを提唱する。全体は3章から成り、ロマン主義の詩やネイチャーライティング、さらにノイズ・ミュージックなどの音楽まで含んだ多様な領域の分析を通じて、自然という概念の問題性を指摘し、その歴史を議論する。そして来たるべきエコロジーがどのようなものかを展望しようとする。
自然災害が度々問題となり、エコロジーへの意識が高まりつつある昨今、既存の概念を刷新し、新たなエコロジーの思考を提示する思想書。（hry）

不動産リノベーションの企画術

中谷ノボル　アートアンドクラフト 著

（A5判／232頁／2,808円／学芸出版社）

大阪を拠点に建築の設計施工・不動産仲介、コンサルティングを手がけ、ユニークなリノベーション建築を数多く生み出してきたアートアンドクラフトが、余すところなく彼らのノウハウを明かす本書。リノベーションが一般的になった今だからこそ、差別化のためのシビアな見極めが必要になると著者は語る。時間が培ってきた土地や建物の魅力をどのようにとらえ、どんな人びとをターゲットとし、その個性同士をいかにマッチングさせて、新築ではつくり出せない価値を生み出すか。そのためのポイントと、参考となる実例が豊富に掲載されている。新築に比べ初期投資のリスクが低い分、思い切った挑戦も可能だ。そうした戦略的見極めによって収益を得るのはもちろん、リノベーションをきっかけに新しい暮らしや働き方が生まれ、いきいきとした都市の風景をつくり出したいという著者の熱い思いが伝わる。（kn）

吉田謙吉と12坪の家
劇的空間の秘密

塩澤珠江　平田オリザ
布野修司 著

（A4判変型／80頁／1,944円／LIXIL出版）

舞台美術をはじめ、デザインや文筆業など多分野で活躍した吉田謙吉の活動を、自身で設計した自邸「12坪の家」を中心に紐解いていく。戦後の厳しい時代に生まれた「12坪の家」の最大の特徴は「ステージ」を備えていたこと。人びとを招いて落語会を開いたり、舞台美術の制作など作業場としても使われた。また喫茶店を思わせるカウンターや中国式のかまど（文化天火）を設え、限られた面積の中にも生活を楽しむ工夫が凝らされている。ほかにも小空間を楽しむアイデアは新聞や雑誌にも掲載されており、一例が紹介される。また関東大震災が起きた年には今和次郎らと共に「バラック装飾社」を設立。バラックをペンキで装飾する一方で、復興に向けて激変する風俗を具に観察し、「考現学」誕生へと導いた流れが紹介される。謙吉の溢れる好奇心と生活を楽しむさまざまな取り組みが紹介されている。（yt）

新建築

住宅特集 バックナンバー

バックナンバーのお取り寄せは最寄りの書店へお申し込みください。
また，下記ウェブサイトからもご注文いただけます。
http://www.japan-architect.co.jp

株式会社 新建築社　〒100-6017　東京都千代田区霞が関3-2-5 霞が関ビル17階
tel. 03-6205-4380（大代表）　fax. 03-6205-4386

2018 8月号

定価＝本体1,905円＋税

大八木邸／**西沢立衛**　水庭の家／**齋藤裕**　門脇邸／**門脇耕三**　論考：**門脇耕三**　二階堂の家／**藤原徹平**　対談：**藤原徹平**×**池田昌弘**　花小金井の住宅／**時森康一郎**　郊外の3階建て／**倉林貴彦**　芦屋の家／**谷尻誠**＋**吉田愛**　藤巻町の家／**手嶋保**　縦路地／**土田拓也**　K夫妻の家／**中村好文**　草加の建物／**齋藤由和**　谷陰の光／**加藤大作**＋**清水純一**　森の段床／**菅原大輔**　港北O／**都留理子**　ノンブローハウス／**海野健三**　辻井の家／**大西憲司**
[MONTHLY REVIEW] 座談月評　**西沢大良**×**吉村靖孝**×**西澤徹夫**
[特別記事] 穴が開くほど見る　建築写真から読み解く暮らしとその先　第3回　**内藤廣**×**藤村龍至**
[EXHIBITION] AUDIO ARCHITECTURE：音のアーキテクチャ展／クリエイションの未来展 第16回 隈研吾監修 KUMA LAB: Weaving 東京大学建築学専攻隈研吾研究室の活動／具体的な建築

2018 9月号

定価＝本体1,905円＋税

[特集] **テラスの価値 ── 多様な建築的外部空間**
Overlap House／**平田晃久**　特集対談：**藤本壮介**×**平田晃久**　L型キャンチレバーの家／**早草睦惠**　大地の家／**畑友洋**　K2 House／**下吹越武人**　小屋の間／**松山将勝**　メープルシロップ／**椎名英三**＋**椎名祐子**　Earth & Horizon／**岸本和彦**　コヤナカハウス／**寺下浩**　I HOUSE／**鈴野浩一**＋**禿真哉**　壺川の住宅／**末廣香織**＋**末廣宣子**　山のセカンドハウス／**井上玄**＋**宇谷淳**　森の山荘／**桑原茂**　小机の家／**保坂猛**　頂の家／**甲村健一**　篠木の家／**岩田知洋**＋**山上弘**　KARUIZAWA CAMP／**前田茂樹**　井の頭の家／**佐久間徹**
[MONTHLY REVIEW] 座談月評　**西沢大良**×**吉村靖孝**×**西澤徹夫**
[特別記事] 住宅をエレメントから考える　〈塀〉再考　現代において塀は必要か　**増田信吾**×**齋藤直紀**
[EXHIBITION] 藤村龍至展　ちのかたち──建築的思考のプロトタイプとその応用／イサム・ノグチ ──彫刻から身体・庭へ

2018 10月号

定価＝本体1,905円＋税

[特集] **若手建築家の実践 ──30代建築家が考える暮らしと建築**
Eagle Woods House／**稲垣淳哉**＋**佐野哲史**＋**永井拓生**＋**堀英祐**　東貝塚の納屋／**彌田徹**＋**辻琢磨**＋**橋本健史**　特集論考1：**橋本健史**　西大井のあな 都市のワイルド・エコロジー／**能作文徳**＋**常山未央**　特集論考2：**能作文徳**　**常山未央**　つなぎの小屋＋街の家／**増田信吾**＋**大坪克亘**　酒井邸／**渡邊大志**　恵比寿の家／**山路哲生**＋**釜萢誠司**　上池台の住宅／**山道拓人**＋**千葉元生**＋**西川日満里**＋**岡佑亮**　尾道の家／**大石雅之**　野原の家／**米田雅樹**　平和の家／**下川徹**　二連旗竿地の家／**金野千恵**＋**アリソン理恵**　加納馬場の家／**小林アツシ**　ハウス・カメオ／**千田友己**＋**千田藍**　那須の長屋／**針谷將史**　蝶番の家／**立花美緒**　海の家、庭の家、太陽の塔／**米澤隆**
[MONTHLY REVIEW] 座談月評　**西沢大良**×**吉村靖孝**×**西澤徹夫**
第32・33・34回吉岡賞　結果発表　審査員：**西沢立衛**　**中山英之**

2018 11月号

定価＝本体1,905円＋税

[特集] **「家びらき」のすすめ── 住宅を街に開放する**
真鶴出版2号店／**冨永美保**＋**伊藤孝仁**　特集論考1：**冨永美保**＋**伊藤孝仁**　SPACESPACE HOUSE／**香川貴範**＋**岸上純子**　特集論考2：**香川貴範**　道場ハウス／**若松均**　とのまビル／**河田剛**　いづみ tea & bar＋GAZEBO／**山本至**＋**稲垣拓**　北条SANCI／**長坂常**　KUGENUMA-Y／**可児公一**＋**植美雪**　HKR／**彦根明**＋**狩野翔太**　Fの貸家／**溝部礼士**　西寺林の微地形／**吉村理**　stir／**御手洗龍**　八ヶ岳の住宅・レストラン／**福田世志弥**　House in JYOUSUI-SHINMACHI／**布施茂**　望月商店／**石川素樹**　箱の家159／**難波和彦**　gré・正方形の家／**山村尚子**＋**鈴木宏亮**　緑と光を感じる家／**彦根アンドレア**
[MONTHLY REVIEW] 座談月評　**西沢大良**×**吉村靖孝**×**西澤徹夫**
[特別記事] 「家のようなもの」の展望　「さんごさん」から見るこれからの家のかたち　**能作淳平**　**鳥巣智行**　**大来優**

2018 12月号

定価＝本体1,905円＋税

[特集] **屋根と窓── 内と外を連続させる多彩な境界**
コート・ハウス／**松岡聡**＋**田村裕希**　特集論考：**松岡聡**＋**田村裕希**　モクマクハウス／**隈研吾**　Half Cave House／**中村拓志**　豊後高田の家／**矢橋徹**　長浜の家／**山口博之**＋**山城正士**　サンカクヤネノイエ／**桑田豪**　大きな地形を背負う環境住宅／**手島浩之**＋**花沢淳**　大上の家／**花本大作**　dual court house／**大井鉄也**　積葉の家／**石田建太朗**　HIYOSHI-K／**可児公一**＋**植美雪**　ヴィラ・ポタジェ／**關本丹青**＋**平井政俊**　茂原の住まい／**野崎亮一**　窓と風の家／**山村尚子**＋**鈴木宏亮**　志立邸／**髙山正樹**＋**岡田実子**＋**岩澤浩一**　内外内／**畠中啓祐**　堀池町の屋根／**梶村健**＋**後藤裕晃**＋**笹原晋平**　めしべの家／**早川友和**
[MONTHLY REVIEW] 座談月評　**西沢大良**×**吉村靖孝**×**西澤徹夫**
[特別記事] 技術と住まい　IoTと考える生活と住まい　**大和田茂**×**遠田敦**×**吉村靖孝**

2019 1月号

定価＝本体1,905円＋税

[特集] **2019年冒険する住宅──家をめぐる建築家の挑戦**
[巻頭インタビュー：基点となる家] 石山修武　インタビュアー：**家成俊勝**　妹島和世　インタビュアー：**西澤徹夫**
[特集企画　最新住宅プロジェクト] 妹島和世　青木淳　西沢立衛　秋吉浩気　西澤俊理　増田信吾＋大坪克亘　長谷川豪　中川純＋池原靖史　高橋一平　藤野高志
[特集作品] house M／**木村吉成**＋**松本尚子**　半島の家／**原田真宏**＋**原田麻魚**　三角の家／**坂茂**　森の生活／**光嶋裕介**　グレープ・ゲイブルズ／**塚本由晴**＋**貝島桃代**＋**玉井洋一**　特集論考：**塚本由晴**　海風の家／**手塚貴晴**＋**手塚由比**　高槻の住居／**島田陽**　PATH／**井手孝太郎**　褶曲の回廊／**五十嵐淳**　北越谷の住宅／**伊藤維**＋**沼野井諭**
[MONTHLY REVIEW] 座談月評　**西沢大良**×**吉村靖孝**×**西澤徹夫**
[展覧会] 民藝 MINGEI−Another Kind of Art 展／建築×写真　ここのみに在る光／7人の若手建築家によるサーファーの家展

住居No.1　共生住居
掲載：16-27頁

泰進建設
代表・今回の現場監督　池部泰広
所在地　**東京都町田市成瀬が丘2-1-1**
電話番号　042-788-0136
https://taishin-kensetsu.jp

No.07
掲載：28-35頁

和建築
代表・今回の現場監督　川口和美
規模　7名
所在地　**兵庫県西宮市今津曙町11-22**
電話番号　0798-33-1030
http://www.kazu-c.jp/index.html
最近施工した掲載作品
「千鳥文化」家成俊勝＋赤代武志（『新建築』1804）
COMMENT
施工　よかったです。
工期　問題ありませんでした。
コスト　適正でした。
その他　いつもお願いしているので、安心してお任せできました。　（家成俊勝）

6つの小さな離れの家
掲載：36-45頁

宮沢工務店
代表　宮澤義仁
今回の現場監督　田口英彦
規模　20名
所在地　**長野県茅野市宮川5592-3**
電話番号　0266-72-0733
http://www.ki-ie.co.jp
最近施工した掲載作品
「KOV 0904」鈴木悔＋内木博喜（本誌1709）
COMMENT
施工　かなり古い建物の改修で、解体してみないと状況が掴めない箇所も多かったが、想定していた計画と見積もりとのズレが生じるたび、親身に的確なアドバイスをくださいました。また、丁寧で気持ちのよい職人さんを集めてくださり、真剣で明るい現場となりました。
コスト　工事中の変更に対しても、適正に増減を調整してくださいました。　（武田清明）

天井の楕円
掲載：46-53頁

エスエス
代表　大内功
今回の現場監督　大内望
規模　3名
所在地　**神奈川県藤沢市西俣野1912-3**
電話番号　0466-80-5301
http://ss-bd.jp
最近施工した作品
「茅ヶ崎の家」千葉学（本誌1006）
COMMENT
施工　限られた予算の中、前向きに見積調整をしていただきました。既存建物に歪みがあり、その対処に少々時間がかかりましたが、住まいながらの改修工事や現場での納まりの変更など、こちらの提案にも柔軟に対応していただき、完成まで粘り強く取り組んでくださいました。
（寺田慎平／ムトカ建築事務所）

コヤトキトツキ
掲載：54-61頁

ワイズ・ホーム
代表　本田義一
今回の現場監督　出口孝行
所在地　**神奈川県横浜市金沢区六浦4-10-34**
電話番号　045-790-4033
http://y-s-home.com
COMMENT
限られた予算と工期の中で、手際よく柔軟に対応していただきました。近隣で多くの物件を施工していらっしゃることもあって、現地の事情に詳しく材料や職人さんの手配もスムーズでした。特にたくさんのアイデアと丁寧な施工で根気強く対応してくださった現場監督には感謝が尽きません。　（安部良）

東松山の家
掲載：62-69頁

住建トレーディング＋東急ホームズ*
代表　工藤源聖
今回の現場監督　佐藤輝（増築）*＋北村利光（改修）
規模　33名
所在地　**秋田県秋田市楢山川口堺17-19（本社）**
東京都台東区浅草橋2-27-10日の出ビル2F（支店）
電話番号　018-836-6808（**本社**）
03-5809-2818（**支店**）
http://www.sumiken-t.co.jp
COMMENT
施工　なんでもテラスの施工方法が特殊だったが、挑戦しながら一緒に考えていただけた。
工期　改修と増築をラップさせながら進めることができ、コストも工期も抑えられた。
その他　設計の意図を組んでいただけた。
（工藤浩平）

ハウス・アトリウム
掲載：70-77頁

河合建築
代表　河合孝
今回の現場監督　藤田浩次
規模　12名
所在地　**東京都板橋区本町28-6**
電話番号　03-3961-0004
https://kawaikennchiku.work
最近施工した作品
「健・元・安」川口通正（本誌1704）
「ハウス・ガーデン」塚本由晴＋貝島桃代＋玉井洋一（本誌1508）
「こだまの家」川口通正（本誌1506）
COMMENT
施工　設計の意図を読み取り誠実に対応していただき、また豊富な経験、幅広い知識をおもちなのでさまざまな相談に乗っていただきました。
工期　堅実な工事管理でした。
コスト　工事期間中の変更についても、その都度適正に増減の調整をしてもらいました。
（宮田真／アトリエ・ワン）

頭町の長屋群
掲載：78-85頁

アーキスタイル
代表・今回の現場監督　加藤圭介
規模　4名
所在地　**京都府京都市山科区川田中畑町26-6**
電話番号　075-594-8544
最近施工した掲載作品
「梅ケ畑の民家」森田一弥（本誌1602）
「晒屋町の長屋群」魚谷繁礼（『新建築』1702）
COMMENT
施工　養生など含めて丁寧に仕事していただけました。
工期　適正でした。
コスト　コストパフォーマンスが高いと感じました。　（魚谷繁礼）

天窓の町家
掲載：86-91頁

野田建設
代表　野田昌弘
今回の現場監督　赤羽弘行
規模　4名
所在地　**長野県塩尻市丘原新田186-9**
電話番号　0263-54-2521
http://www.e-office.gr.jp/noda
COMMENT
施工　地域性をよく理解されていて難しい施工箇所も丁寧に仕上げていただきました。
工期　こちらの要望に対し迅速に対応していただきました。
コスト　適正価格だと思います。
（山道拓人＋千葉元生＋西川日満里＋川田実可子）

王子学生寮
掲載：92-97頁

住友林業ホームテック
代表　徳永完平
今回の現場監督　阿部友輝　大槻賢二郎
規模　2013名
所在地　**東京都千代田区神田錦町3-26一ツ橋SIビル8階（本社）**
電話番号　0120-70-0742（**営業推進部**）
https://www.sumirin-ht.co.jp

京の温所　釜座二条
掲載：98-103頁

ツキデ工務店
代表　築出恭伸
今回の現場監督　山﨑龍人
規模　29名
所在地　**京都府宇治市宇治野神94-10**
電話番号　0774-21-2611
http://www.tukide.jp
最近施工した作品
「上賀茂の家」吉村篤一（本誌0601）
「桂坂の家」小笠原絵理（本誌0712）
COMMENT
施工　伝統工法に造詣が深い社長の陣頭指揮のもと、現場監督と共に、築後約150年を経た京町家の改修工事に臨みました。
先人の知恵や工夫を発見するたびに当時の工事に思いを馳せ、平成の職人衆と、町家の魅力を生かしつつ今後も住み継いでいける町家への改修を実現することができました。
工期　改修であるがための予想外の補修工事や設計変更などへ臨機応変に対応してくださり、別途工事の造り付け家具や、手間のかかる制作品にも気配りが行き届いた工事の進行でした。
コスト　クライアントの「予算」、建物の「質」、そして設計者の「こだわり」、この三つ巴を解決すべく、調整にご尽力いただきました。
（強谷陽／レミングハウス）

川　Sen
掲載：104-111頁

上原工務店
代表　上原健
今回の現場監督　上原久典
規模　10名
所在地　**京都府京都市右京区西京極午塚町122**
電話番号　075-311-7169
http://www.myhome-uehara.com
最近施工した作品
「新建築社　北大路ハウス」平田晃久（『新建築』1802）
「上京のサービス付き高齢者住宅」河井敏明（『新建築』1802）
COMMENT
施工　工事期間が短かったことと、難しく繊細な納まりを要求したのにもかかわらず、速やかに丁寧にかつ美しく施工してくださいました。大工さんを始め、腕が立つ職方さんとお付き合いがあり、技術に信頼がおける工務店です。
（横内敏人）

富良野の異形屋根
掲載：112-117頁

京田組
代表　京田世紀
今回の現場監督　冨田正信
規模　10名
所在地　**旭川市豊岡4条6-9-9**
電話番号　0166-31-4153
http://potato6.hokkai.net/~yamasemi
最近施工した作品
「repository」五十嵐淳（本誌1303）
COMMENT
施工　春竣工が決まっていた中で、見積もりから完成まで短い期間の中でコスト調整して完成までたどり着けた。また吹雪の時には現場に行くことさえ難しい厳しい環境下で、丁寧に施工して頂いた。それらはひとえに熱心な現場監督さんのおかげであり大変感謝している。設計の意図を汲み取りながら技術面での提案もあり、素晴らしい現場でした。　（髙木貴間）

静岡のリノベーション
掲載：118-123頁

鈴木建設
代表　鈴木将介
今回の現場監督　河原崎益寛　寺田翼
規模　25名
所在地　**静岡県掛川市大池2547-3**
電話番号　0537-21-2131
http://www.cs-suzuki.jp
COMMENT
施工　設計者の意図を理解したうえで共に考えたり、提案をしてくださり、とても信頼のおける施工者です。リノベーションゆえの難しい納まりや現場での変更もありましたが、最後まで丁寧に施工して頂きました。
工期　問題なく施工して頂きました。
コスト　適正価格です。見積調整にも真摯に対応して頂きました。　（後藤周平）

網代の列柱
掲載：124-127頁

蒔田工務店
代表・今回の現場監督　蒔田嘉一朗
規模　10名
所在地　**静岡県熱海市下多賀468-1**
電話番号　**0557-68-0363**
COMMENT
施工　丁寧で精度の高いお仕事をしていただき、現場での検討にも臨機応変に対応いただけました。
工期　期限の厳しい中で迅速な施工を進めていただけました。
コスト　構造や断熱、外構に関わる大規模な変更を、適切なコストでお引き受けいただけました。
その他　地域密着の工務店で普段はあまり建築家と仕事はしないそうですが、十分に議論を重ねながらプロジェクトを進めることができました。
（彌田徹＋辻琢磨＋橋本健史）

須越の架構
掲載：128-131頁

木々のや
代表・今回の現場監督　奥村英史
規模　3名
所在地　**京都府京都市山科区音羽中芝町31-23**
電話番号　**075-634-7399**
COMMENT
施工　大変丁寧な施工で、われわれの意図をよく理解していただきながら着実にプロジェクトを進めることができました。施工者側からのディテールの提案もあり、対話が楽しかったです。
工期　時間をかけて対話していく中でじっくり進めていただきました。
コスト　手の掛かるリノベーションでも丁寧に見積もりの項目を用意していただき、現場での設計変更にも柔軟に対応していただきました。
その他　代表の奥村さんは滋賀県立大学で建築を学んだという経験もあり、意匠の考えを柔軟に聞き入れてくださいました。
（彌田徹＋辻琢磨＋橋本健史）

上大岡台・百年土間
掲載：132-137頁

システムアート湘南
代表　堀口晃弘
今回の現場監督　井桁広介
規模　13名
所在地　**神奈川県藤沢市鵠沼橘1-15-2**
電話番号　**0466-55-1801**
http://www.sa-shonan.com
COMMENT
施工　優秀な大工さんが専任となり、丁寧に仕上げていただきました。
工期　改修工事は解体後に再調整が必要なところを迅速に対応してくれました。
コスト　適正価格。詳細な見積りを提示していただけました。
その他　アットホームな会社でこちらの細かい要望にも応えてくれました。
（小林佐絵子＋塩崎太伸）

西新井のいえ
掲載：138-143頁

ハイカラ
代表・今回の現場監督　臼井雅志
規模　5名
所在地　**東京都目黒区自由が丘2-18-15**
電話番号　**042-860-2100**
http://www.highcollar.net
COMMENT
施工　ただ綺麗に仕上げるだけではなく、リノベーションで求められる新旧が調和した味のある仕上げも得意。職人さんが気さくなので、いつも現場の雰囲気がよいです。
工期・コスト　社長が設備屋の出身でいろいろと施工できるうえに、ほとんどが社員大工なので無駄が少ない。減額調整のための自主施工にも快く対応して頂き、非常に融通が利きます。外壁を一緒に塗ったのがよい思い出になりました。
（白石圭／S設計室）

虎ノ門の住宅（改装）
掲載：144-149頁

スリーエフ
代表　相川一巨
今回の現場監督　笠原淳
規模　10名
所在地　**東京都豊島区上池袋3-33-17**
電話番号　**03-3916-0176**
http://www.threef.co.jp
最近施工した作品
「道場ハウス」若松均（本誌1811）
「横浜ホンズミ邸」田中昭成（本誌1401）
「弘明寺の住宅」山口誠（本誌1208）
COMMENT
施工　現場合せが必要となった巨大な扉の設置およびほかとの取り合いの難しい施工では、現場監督の笠原さんが臨機応変に各工程を調整してくださり、精度の高い施工が実現されました。図面意図をしっかりと汲み取り、施工図を作成いただけたことが現場をスムーズに進めることに繋がりました。
工期　現場での各職方の調整だけでなく、集合住宅管理組合に対する細やかな対応をしていただきました。
コスト　解体してみないと読み切れない改修工事で、変更せざる得ない部分についても監理者と協議しながら、適切に対応いただき感謝しております。
その他　竣工間際に、タイルに原因不明の汚れが発生してしまいました。現場監督の笠原さんが懸命にクリーニングいただき、汚れはきれいになくなりました。何か起きた際に人任せにせず、自ら動き迅速に対処する姿勢が素晴らしいです。
（小谷研一）

栗林邸
掲載：150-155頁

栄建
代表　酒井宣雅
今回の現場監督　酒井宣雅　田口実樹
規模　10名
所在地　**東京都墨田区文花3-24-21**
電話番号　**03-5980-3520**
http://www.ei-ken.co.jp/
最近施工した作品
「House in KANNOU」布施茂（本誌1712）
COMMENT
施工　既存部分の解体に合わせて、設計内容を随時変更しながらの施工となりました。なかなか先の読めない状況で、また年度末の厳しい工期にも関わらず、丁寧に根気よく施工していただきとても満足しています。
（松岡聡＋田村裕希）

ARCHITECTS 建築家プロフィール

建築家情報
1. 今後予定しているプロジェクトや展覧会、講演会などの情報／ 2. Facebook、TwitterのURL
※1の作品名、竣工時期、展覧会、講演会情報は本誌発売時点での予定となります。

内藤廣（ないとう・ひろし）
1950年神奈川県生まれ／ 1974年早稲田大学理工学部建築学科卒業／ 1976年同大学大学院（吉阪隆正研究室）修士課程修了／ 1976〜78年フェルナンド・イゲーラス建築設計事務所／ 1979〜81年菊竹清訓建築設計事務所／ 1981年内藤廣建築設計事務所設立／ 2001〜02年東京大学大学院工学系研究科社会基盤学助教授／ 2003〜11年同大学大学院教授／ 2011年〜同大学名誉教授

建築家情報
1.「日向市庁舎」（宮崎県日向市／ 2019年3月末）
2. Twitter：https://twitter.com/naitohiroshi

内藤廣建築設計事務所　〒102-0074 東京都千代田区九段南2-2-8松岡九段ビル301　tel. 03-3262-9636　fax. 03-3262-9804
naa@naitoaa.co.jp　http://www.naitoaa.co.jp

家成俊勝（いえなり・としかつ）　**赤代武志**（しゃくしろ・たけし）
（家成俊勝・右から1番目）1974年兵庫県生まれ／ 1998年関西大学法学部法律学科卒業／ 2000年大阪工業技術専門学校卒業／ 2004年〜ドットアーキテクツ共同主宰／現在、京都造形芸術大学准教授、大阪工業技術専門学校非常勤講師
（赤代武志・右から2番目）1974年兵庫県生まれ／ 1997年神戸芸術工科大学芸術工学部環境デザイン学科卒業／ 1997 〜 02年北村陸夫＋ズーム計画工房／ 2002 〜 03年宮本佳明建築設計事務所／ 2004年〜ドットアーキテクツ共同主宰／現在、大阪工業技術専門学校特任教員、京都造形芸術大学非常勤講師、大阪市立大学非常勤講師

第15回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展審査員特別表彰

▼建築家情報
1.「YARD ／なかたに亭」（大阪府大阪市／ 2019年）「ARTISTS' FAIR KYOTO 2019」会場構成（京都府京都市／ 2019年3月2、3日）

ドットアーキテクツ　〒559-0011 大阪府大阪市住之江区北加賀屋5-4-12 コーポ北加賀屋202　tel. 06-6686-1446　fax. 06-6686-1447
contact@dotarchitects.jp　http://dotarchitects.jp

武田清明（たけだ・きよあき）
1982年神奈川県生まれ／ 2007年イーストロンドン大学大学院修士課程修了／ 2009 〜 18年隈研吾建築都市設計事務所／ 2018年武田清明建築設計事務所設立／ 2018年「6つの小さな離れの家」（本誌36頁）SDレビュー 2018で鹿島賞受賞

武田清明建築設計事務所　〒103-0003 東京都中央区日本橋横山町10-5　tel. 080-6607-0142
http://www.kiyoakitakeda.com　takeda@kiyoakitakeda.com

村山徹（むらやま・とおる）　**加藤亜矢子**（かとう・あやこ）

（村山徹・上）1978年大阪府生まれ／2004年神戸芸術工科大学大学院修士課程修了／2004～12年青木淳建築計画事務所／現在、関東学院大学研究助手

（加藤亜矢子・下）1977年神奈川県生まれ／2004年大阪市立大学大学院前期博士課程修了／2004～08年山本理顕設計工場／2014～15年東京大学特任研究員／現在、大阪市立大学非常勤講師、明治大学兼任講師

2010年ムトカ建築事務所共同設立／「ペインターハウス」（本誌1506）で2015年第59回神奈川建築コンクール優秀賞、2016年東京建築士会住宅建築賞2016住宅建築賞、第33回ニチハサイディングアワード2016入賞／2018年「小山登美夫ギャラリー」（『新建築』1706）で3M施工事例コンテスト2017入賞

▼ 建築家情報

1.「長谷の住宅」（神奈川県鎌倉市／2019年）「玉川台の集合住宅」（東京都世田谷区／2020年）

ムトカ建築事務所　〒222-0011 神奈川県横浜市港北区菊名2-18-24-302　tel. & fax. 045-642-3377
info@mtka.jp　http://www.mtka.jp

安部良（あべ・りょう）

1966年広島県生まれ／1990年早稲田大学理工学部建築学科卒業／1992年早稲田大学大学院理工学研究所修士修了／1994年一級建築士資格取得／1995年ARCHITECTS ATELIER RYO ABE／一級建築士事務所安部良アトリエ設立／「島キッチン」（『新建築』1011）でAR Award for Emerging Architecture 2010大賞、World Architecture Festival 2011 World Culture Building of the Year大賞、Barbara Cappochin Biennial Internationa Prize 2011, Special Detail Prize大賞、International Architecture Awards 2016 –The Chicago Athenaeum受賞／2011年WAN Awards 21 for 21 2011大賞／主な著書に『建築依存症／ARCHIHOLIC』（2006年、ラトルズ刊）

▼ 建築家情報

1.「カランク国立公園プロジェクト」（フランス／2018年～）

ARCHITECTS ATELIER RYO ABE　〒150-0002　東京都渋谷区渋谷4-2-22 ヴィラージュ青山201　tel. 03-3407-4676　fax. 03-3407-4675
aara@aberyo.com　http://www.aberyo.com

工藤浩平（くどう・こうへい）

1984年秋田県生まれ／2005年国立秋田高専環境都市工学科卒業／2008年東京電機大学工学部建築学科卒業／2011年東京藝術大学大学院美術研究科修了／2012～2017年SANAA／2017年工藤浩平建築設計事務所設立／2018年国立秋田高専非常勤講師／2009年シェルター学生設計競技奨励賞／2010年第17回空間デザイン・コンペティション入選／2010年社団法人愛知建築士会名古屋北支部建築コンクール「小さな建築」入賞／2012年ユニバーサルホームデザインコンペ最優秀賞

▼ 建築家情報

1.「楢山のセカンドハウス」（秋田県／2019年）「みんなのたまり場プロジェクト」（群馬県／2019年）「柏の家」（千葉県／2020年）

工藤浩平建築設計事務所　〒111-0053 東京都台東区浅草橋2-27-10日の出ビル2F　tel. 03-5809-2628　fax. 03-5809-2838
info@koheykudo.com　http://koheykudo.com

塚本由晴（つかもと・よしはる）　**貝島桃代**（かいじま・ももよ）　**玉井洋一**（たまい・よういち）

（塚本由晴・右）1965年神奈川県生まれ／1987年東京工業大学工学部建築学科卒業／1987～88年パリ・ベルビル建築大学／1992年貝島桃代とアトリエ・ワン共同設立／1994年東京工業大学大学院博士課程修了／2003、2007、2015年ハーバード大学大学院客員教授／2007、2008年UCLA客員准教授／2011年The Royal Danish Academy of Fine Arts客員教授、Barcelona Institute of Architecture 客員教授／2013年コーネル大学visiting critic／2015年デルフト工科大学客員教授／2017年コロンビア大学客員教授／現在、東京工業大学大学院教授

（貝島桃代・中）1969年東京都生まれ／1991年日本女子大学家政学部住居学科卒業／1992年塚本由晴とアトリエ・ワン共同設立／1994年東京工業大学大学院修士課程修了／1996～97年スイス連邦工科大学チューリッヒ校奨学生／2000年東京工業大学大学院博士課程満期退学／2003、2015年ハーバード大学大学院客員教授／2005～07年スイス連邦工科大学チューリッヒ校（ETHZ）客員教授／2015年デルフト工科大学客員教授／2017年コロンビア大学客員教授／現在、筑波大学准教授、ETHZ Professor of Architectural Behaviology

（玉井洋一・左）1977年愛知県生まれ／2002年東京工業大学工学部建築学科卒業／2004年同大学大学院修士課程修了／2004年～アトリエ・ワン／2015年～アトリエ・ワンパートナー

「ミニ・ハウス」（本誌9901）で1999年東京建築士会住宅建築賞金賞、2000年第16回吉岡賞受賞／2002年「ハウス・サイコ」（『新建築』0103）でAmerican Wood Design Awards 2002受賞／2007年「ハウス&アトリエ・ワン」（『新建築』0605）で2007年度グッドデザイン賞受賞／2012年RIBAのInternational Fellowship／2013年「タマまちや」（本誌1405）「タマロッジア」（本誌1405）で2013年度グッドデザイン賞受賞／主な著書に『ペット・アーキテクチャー・ガイドブック』（2001年、ワールド・フォト・プレス）『メイド・イン・トーキョー』（2001年、鹿島出版会）『アトリエ・ワン・フロム・ポスト・バブル・シティ』（2006年、INAX出版）『図解アトリエ・ワン』（2007年、TOTO出版）『空間の響き／響きの空間』（2009年、INAX出版）『Behaviorology』（2010年、Rizzoli New York）『図解アトリエ・ワン2』（2014年、TOTO出版）『WindowScape2 窓と街並の系譜学』（2014年、フィルムアート社）『コモナリティーズ　ふるまいの生産』（2014年、LIXIL出版）

アトリエ・ワン　〒160-0018 東京都新宿区須賀町8-79　tel. 03-3226-5336　fax. 03-3226-5366
http://www.bow-wow.jp

魚谷繁礼（うおや・しげのり）　**魚谷みわ子**（うおや・みわこ）

（魚谷繁礼・上）1977年兵庫県生まれ／2001年京都大学工学部卒業／2003年同大学大学院工学研究科修了／現在、魚谷繁礼建築研究所代表／京都大学、京都建築専門学校、近畿大学で非常勤講師

（魚谷みわ子・下）1976年三重県生まれ／1999年京都大学工学部卒業／1999～2005年結設計勤務／現在、魚谷繁礼建築研究所

2007年「京都型住宅モデル」（本誌0804）で都市住宅学会賞業績賞など受賞／2009年「都島の住宅；A House and 3-Boxes」でSDレビュー入選／2012年「西都教会」（『新建築』1212）で関西建築家新人賞など受賞／2013年「紫竹西南町の住宅」で京環境配慮建築顕彰制度優秀賞受賞／2016年「御所西の宿群」で京都デザイン賞京都市長賞受賞／2017年「晒屋町の長屋群」（『新建築』1702）で京環境配慮建築顕彰制度優秀賞受賞／2017年「太秦安井の住宅」（本誌1305）で京都建築賞藤井厚二賞受賞／主な著書に『近代世界システムと殖民都市』（共著、2005年、京都大学学術出版会）、『世界住居誌』（共著、2005年、昭和堂）、『いま、都市をつくる仕事』（共著、2011年、学芸出版社）、『地方で建築を仕事にする』（共著、2016年、学芸出版社）、『住宅リノベーション図集』（単著、2016年、オーム社）など

▼建築家情報

1.「SOWAKA 新館」（京都府京都市／2019年1月）「山ノ内中畑町のシェアハウス」（京都府京都市／2019年3月）「ガムハウス」（京都府京都市／2019年4月）

魚谷繁礼建築研究所　〒600-8029 京都市下京区寺町通五条上ル西橋詰町762京栄中央ビル4階　tel. 075-361-5660　fax. 075-585-4181
office@uoya.info　http://www.uoya.info

山道拓人（さんどう・たくと）　**千葉元生**（ちば・もとお）　**西川日満里**（さいかわ・ひまり）　**川田実可子**（かわだ・みかこ）

（山道拓人・上）1986年東京都生まれ／2009年東京工業大学工学部建築学科卒業／2011年同大学大学院理工学研究科建築学専攻塚本由晴研究室修士課程修了／2011〜18年同大学院博士課程単位取得満期退学／2012年ELEMENTAL／2012〜13年Tsukuruba／2013年ツバメアーキテクツ設立／2013〜14年横浜国立大学大学院建築都市スクールY-GSA非常勤教員、2015〜17年東京理科大学非常勤講師、2017年関東学院大学非常勤講師／現在、江戸東京研究センター客員研究員、住総研研究員、法政大学非常勤講師

（千葉元生・中上）1986年千葉県生まれ／2009年東京工業大学工学部建築学科卒業／2010〜11年スイス連邦工科大学／2012年東京工業大学大学大学院理工学研究科建築学専攻塚本由晴研究室修士課程修了／2012〜13年慶應義塾大学理工学部助手／2013年ツバメアーキテクツ設立／2015〜17年東京理科大学非常勤講師

（西川日満里・中下）1986年新潟県生まれ／2010年早稲田芸術学校建築設計科修了／2012年横浜国立大学院建築都市スクールY-GSA卒業／2012〜13年小嶋一浩＋赤松佳珠子 CAt／2013年ツバメアーキテクツ設立／現在、早稲田大学芸術学校非常勤講師

（川田実可子・下）1993年高知県生まれ／2015年日本大学理工学部建築学科卒業／2017年同大学大学院古澤大輔研究室修士課程修了／2017年〜ツバメアーキテクツ参画

「荻窪家族プロジェクト」（『新建築』1508）で2016年度グッドデザイン賞受賞／2017年「牛久おやこ屋根」（本誌1710）で2017年度茨城デザインセレクション受賞／2018年「Hibarido」で2018年度グッドデザイン賞受賞／2017年奈良市東向商店街協組アーケードデザインコンペ入選／主な著書に『PUBLIC PRODUCE「公共的空間」をつくる7つの事例』（共著、2018年、ユウブックス）『CREATIVE LOCAL エリアリノベーション海外編』（共著、2017年、学芸出版）『シェア空間の設計手法』（共著、2016年、学芸出版）『これからの建築士 職能を拡げる17の取り組み』（共著、2016年、学芸出版）『荻窪家族プロジェクト物語』（共著、2016年、萬書房）『ここに棲む――地域社会へのまなざし』（共著、2015年、彰国社）

▼ 建築家情報

2. Facebook：https://www.facebook.com/tsubamearchitects

ツバメアーキテクツ　〒162-0851 東京都新宿区弁天町178-4大山ビル5F　tel. 03-6274-8551　fax. 03-6274-8552
info@tbma.jp　http://tbma.jp

Photo (c) J.C. Carbonne

隈研吾（くま・けんご）

1954年神奈川県生まれ／1979年東京大学建築学科大学院修了／1990年コロンビア大学客員研究員を経て、隈研吾建築都市設計事務所設立／現在、東京大学教授／1997年「森舞台/登米市伝統継承館」で日本建築学会賞受賞／2010年「根津美術館」（『新建築』0911）で毎日芸術賞／2012年「長岡市役所アオーレ」（『新建築』1207）で公共建築賞など多数受賞／主な著書に、『自然な建築』（岩波新書、2008年）『小さな建築』（岩波書店、2013年）『日本人はどう住まうべきか?』（共著、日経BP社、2012年）『建築家、走る』（新潮社、2013年）『僕の場所』（大和書房、2014年）

隈研吾建築都市設計事務所　〒107-0062 東京都港区南青山2-24-8　tel. 03-3401-7721　fax. 03-3401-7778
kuma@ba2.so-net.ne.jp　http://kkaa.co.jp

中村好文（なかむら・よしふみ）

1948年千葉県生まれ／1972年武蔵野美術大学建築学科卒業／設計事務所勤務の後、都立品川職業訓練所木工科で家具製作を学ぶ／1981年レミングハウス設立／現在、多摩美術大学美術学部環境デザイン学科客員教授、日本大学生産工学部建築工学科研究所非常勤講師／1987年「三谷さんの家」（本誌8609）で第1回吉岡賞受賞／1993年「一連の住宅作品」で第18回吉田五十八賞「特別賞」受賞／主な著書に『住宅巡礼』（2000年、新潮社）『住宅読本』（2004年、新潮社）『意中の建築 上・下巻』（2005年、新潮社）『住宅巡礼・ふたたび』（2010年、筑摩書房）『中村好文 普通の住宅、普通の別荘』（2010年、TOTO出版）『中村好文 小屋から家へ』（2013年、TOTO出版）『暮らしを旅する』（2013年、KKベストセラーズ）『中村好文 集いの建築、円いの空間』（2017年、TOTO出版）ほか

▼ 建築家情報

1.「高畑のすまい」（奈良県奈良市／2019年）「京の温所 西陣 別邸」（京都府京都市／2019年7月）
2019年4月「ギャラリーやなせ」（京都市北区紫野南舟岡町61-28）にて「好文堂」開催

レミングハウス　〒158-0083 東京都世田谷区奥沢3-45-4-3F　tel. 03-5754-3222　fax. 03-5754-3223
chuchu@lemminghouse.com

横内敏人（よこうち・としひと）

1954年山梨県生まれ／1978年東京藝術大学美術学部建築科卒業／1980年マサチューセッツ工科大学建築学科大学院修了／1981〜82年アーキテクチュアル・リソーシズ・ケンブリッジ／1983〜87年前川國男建築設計事務所勤務／1991年横内敏人建築設計事務所設立／現在、京都造形芸術大学通信教育部大学院特員教授／2002年「三方町縄文博物館」（『新建築』0006）で日本建築学会北陸建築文化賞受賞／2004年「若王子のゲストハウス」（『新建築』0401）で木の建築賞受賞／2008年京都府文化功労賞受賞／2014年「屋形の家」で山梨県建築文化賞受賞／2015年「五十鈴川の家」（本誌1612）で三重県建築賞知事賞受賞／主な著書に『WA-HOUSE 横内敏人の住宅』（2015年、風土社）『NOTES 横内敏人の住宅設計ノート』（2015年、風土社）『BLUEPRINTS　横内敏人の住宅設計図面集』（2016年、風土社）

▼建築家情報

2. 横内事務所ブログ「横内事務所のメモランダム」：http://yokouchit.exblog.jp

横内敏人建築設計事務所　〒606-8444 京都府京都市左京区若王子町68　tel. 075-761-1976　fax. 075-752-3530
http://www.yokouchi-t.com

髙木貴間（たかぎ・よしちか）

1975年北海道生まれ／1998年北海学園大学工学部建築学科卒業／2000〜01年AAスクール留学／2012年髙木貴間建築設計事務所設立／現在、北海学園大学非常勤講師／2010年「House K」（本誌1107）でAR Awards 2010準大賞受賞／2016年「House in Shinkawa」（本誌1605）で北海道建築大賞奨励賞

▼ 建築家情報

1.「Sの改修」（北海道札幌市／2018年）「Kの増築」（北海道札幌市／2019年）
2. Twitter：http://twitter.com/yoshitika　Facebook：http://www.facebook.com/sekkeisha/

髙木貴間建築設計事務所　〒001-0909 札幌市北区新琴似9条11-5-9　tel. 011-769-9071　fax. 011-769-9072
takagi@yoshichikatakagi.com　http://yoshichikatakagi.com

後藤周平（ごとう・しゅうへい）
1982年静岡県生まれ／2006年京都工芸繊維大学工芸学部造形工学科卒業／2008年同大学大学院博士前期課程修了／中山英之建築設計事務所を経て2012年後藤周平建築設計事務所を設立

▼ 建築家情報
1.「K公会堂」（静岡県／2019年）「浜松の家」（静岡県／2019年）「鈴与本社講堂改装および別館内装計画」（静岡県／2019年）（ロフトワークと協働）

後藤周平建築設計事務所　〒438-0077 静岡県磐田市国府台2-3 2A　tel. 0538-84-7708
info@shuheigoto.com　http://www.shuheigoto.com

彌田徹（やだ・とおる）　**辻琢磨**（つじ・たくま）　**橋本健史**（はしもと・たけし）
（彌田徹・左）1985年大分県生まれ／2008年横浜国立大学建設学科建築学コース卒業／2011年筑波大学大学院芸術専攻貝島研究室修了／2011年403architecture [dajiba] 設立／現在、静岡理工科大学非常勤講師
（辻琢磨・中）1986年静岡県生まれ／2008年横浜国立大学建設学科建築学コース卒業／2010年横浜国立大学大学院建築都市スクールY-GSA修了／2010年Urban Nouveau* 勤務／2011年メディアプロジェクト・アンテナ企画運営／2011年403architecture [dajiba] 設立／現在、滋賀県立大学、大阪市立大学、武蔵野美術大学非常勤講師
（橋本健史・右）1984年兵庫県生まれ／2005年国立明石工業高等専門学校建築学科卒業／2008年横浜国立大学建設学科建築学コース卒業／2010年横浜国立大学大学院建築都市スクールY-GSA修了／2011年403architecture [dajiba] 設立／現在、名城大学非常勤講師

2014年「富塚の天井」（本誌1305）で吉岡賞受賞／2016年ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展審査員特別表彰／主な著書に『建築で思考し、都市でつくる | FEEDBACK』（2017年、LIXIL出版）

▼ 建築家情報
1.「原保の東屋」（静岡県伊豆市／2019年1月）

403architecture [dajiba]　〒430-0945 静岡県浜松市中区池町222-21 4-E　tel＆fax. 053-482-7203
dajiba@403architecture.com　http://www.403architecture.com

川井操（かわい・みさお）
1980年島根県生まれ／2009年滋賀県立大学大学院環境科学研究科博士後期課程修了（環境科学）／2010〜12年北京新領域創成城市建築設計咨詢有限責任公司（UAA）／2013〜14年東京理科大学工学部一部建築学科助教／2014 〜 18年滋賀県立大学環境科学部環境建築デザイン学科助教／2018年〜滋賀県立大学環境科学部環境建築デザイン学科准教授／2013年阿房宮国家遺跡公園＋周辺計画国際設計競技3位（UAA所属時代）／主な論文に「西安旧城・回族居住地区の社区構成と街路体系に関する考察」『日本建築学会計画系論文集』pp1213-1219, No.628, 2008.6（共著：川井操、布野修司、山根周）ほか

▼ 建築家情報
1.「日野町安倍居の納屋」（滋賀県蒲生郡／2019年3月）「ベトナムチャウドックの住宅プロジェクト」（ベトナム、チャウドック／2019年9月）「インドブッダガヤ・カディ工場」（インド、ブッダガヤ／2019年10月）

滋賀県立大学　〒522-0057 滋賀県彦根市八坂町2500　tel. 0749-28-8273
kawai.m@ses.usp.ac.jp　http://dda-usp.com/professor/kawai_misao

小林佐絵子（こばやし・さえこ）　**塩崎太伸**（しおざき・たいしん）
（小林佐絵子・上）1977年岡山県生まれ／1998年東洋英和女学院大学短期大学部英文科卒業／2003〜07年遠藤克彦建築研究所／2011年東京理科大学工学部第二部建築学科卒業／2012〜14年ゼロワンオフィス／2015年〜アトリエコ共同主宰／2018年〜日本工業大学非常勤講師、スペースデザインカレッジ講師
（塩崎太伸・下）1976年千葉県生まれ／2000年東京工業大学卒業／2001〜02年オランダ・デルフト工科大学／2003年東京工業大学大学院修士課程修了／2009年博士（工学）／2015年〜アトリエコ共同主宰／2016年〜東京工業大学准教授／2010年「東京工業大学百年記念館新展示室」でグッドデザイン賞受賞／著書に『建築論辞典』（共著、2008年、日本建築学会）『JA93 Kazuo Shinohara』（共編著、2014年、新建築社）『応答「漂うモダニズム」』（共著、2015年、左右社）

2018年「菊名貝塚の住宅」でSDレビュー 2018入賞

▼建築家情報
1.「世田谷の住宅」（東京都／2019年12月）「菊名貝塚の住宅」（神奈川県／2019年）「豊島区三世帯住宅」（東京都／2019年）

アトリエコ　tel. 03-6421-1093　info@atorieco.com　https://www.atorieco.info

橋本圭央（はしもと・たまお）
2001年東京藝術大学美術学部建築科卒業／2008年AAスクールDiploma（RIBA / ARB Part2）修了／2013年Cosmopolitan / Workshop設立／現在、日本福祉大学助教、東京藝術大学、湘南工科大学、法政大学、明治大学、千葉大学非常勤講師／2013年「Seedling Garden」でSDレビュー入選など／主な論文に『Eccentric Workspace』（MIT Architecture、2016年）など

▼建築家情報
1.「超転用の家」（高知県高知市／2022年）　2. Twitter：https://twitter.com/tamao_h

日本福祉大学建築バリアフリー専修研究室　〒475-0012 愛知県半田市東生見町26-2 日本福祉大学半田キャンパス研究棟303号室　tel. 0569-20-0118
thashimo@n-fukushi.ac.jp

白石圭（しらいし・けい）
1977年千葉県生まれ／2002年東京藝術大学美術学部建築科卒業／2008年Cranbrook Academy of Art Dept. of Architecture（M.Arch）修了／2009 〜 11年N設計室勤務／2011年S設計室設立

▼建築家情報
1.「北小金のいえ」（千葉県松戸市／2019年）「阿佐ヶ谷のいえ」（東京都杉並区／2019年）「市が尾のいえ」（神奈川県横浜市／2019年）
「西明石のいえ」（兵庫県／2019年）「広島のオフィスビル」（広島県広島市／2021年）
2. Instagram：https://www.instagram.com/ssekkeishitsu

S設計室　〒113-0033 東京都文京区本郷2-39-7-3F　tel. 03-6670-7133　fax. 03-3868-2979
iaiiei@ssekkeishitsu.com　http://ssekkeishitsu.com

康未来（かん・みれ）
1991年東京都生まれ／2015年東京藝術大学美術学部建築科卒業／2015年〜日建設計勤務／2018年「荒川ビル」でグッドデザイン賞ベスト100（日建設計として）

▼建築家情報
1.福岡の住宅兼店舗」（福岡県みよし市／2020年）
2. Facebook：https://www.facebook.com/profile.php?id=100022290798851
Instagram：https://www.instagram.com/canmire.e

小谷研一（おたに・けんいち）
1975年アメリカ合衆国イリノイ州生まれ／2000年東京理科大学大学院修士課程（小嶋研究室）修了／2001〜03年乾久美子建築設計事務所／2003年〜小谷研一建築設計事務所設立／2010〜17年昭和女子大学非常勤講師／2017年〜東洋大学非常勤講師／「東松原の住宅（増築改装）」で2010年TDYリモデルスマイル作品コンテスト最優秀賞、2011年住宅セレクションVol.3「更新する家」東京建築士会主催入賞、2012年第28回住まいのリフォームコンクール優秀賞受賞／2019年「虎ノ門の住宅（改装）」（本誌144頁）でJERCOリフォームコンテスト2018入賞
▼建築家情報
1.「永福の住宅」（杉並区永福／2020年9月）「S集合住宅」（渋谷区／2020年11月）「Eの住宅（改装）」（杉並区／2020年2月）
2. Instagram：kenichiotani

小谷研一建築設計事務所　〒168-0064 東京都杉並区永福3-50-2-203　tel. 03-6379-2196　fax: 03-6379-2198
info@k-otani.com　http://www.k-otani.com

松岡聡（まつおか・さとし）　**田村裕希**（たむら・ゆうき）
（松岡聡・左）1973年愛知県生まれ／2000年東京大学大学院修士課程修了／2001年米国コロンビア大学大学院修了後、UN Studio、MVRDV、SANAA勤務／2005年松岡聡田村裕希を共同設立／現在、近畿大学教授
（田村裕希・右）1977年東京都生まれ／2004年東京藝術大学大学院修士修了後、SANAA勤務／2005年松岡聡田村裕希を共同設立

2006年「バルーン・コート」でAR＋D Awards for Emerging Architecture 2005／2014年『サイト——建築の配置図集』（2013年、学芸出版社）で日本建築学会教育賞／「裏庭の家」（本誌1509）で2015年日本建築設計学会学会賞、2016年JIA新人賞受賞、2018年日本建築学会作品選奨／2018年「エネマネRハウス」（本誌1804）でグッドデザイン賞受賞（近畿大学と共同）／主な著書に『Sight and Architecture』（2009年、グラフィック社）『サイト——建築の配置図集』（2013年、学芸出版社）『都市を予約する』（2018年、建築資料研究社）
▼建築家情報
1.「ハウス・オン・サイツ」（鳥取県鳥取市／2019年）「河原町通のピロティ」（京都府京都市／2019年）「考古学者の家」（高知県高知市／2019年）
「小屋と垣に囲まれた家」（愛媛県西条市／2019年）

松岡聡田村裕希　〒103-0024 東京都中央区日本橋小舟町8-7 東京糖商ビル3F　tel. 03-6661-9622　fax. 03-6661-9632
office@matsuokasatoshitamurayuki.com　http://www.matsuokasatoshitamurayuki.com

執筆者

馬場正尊（ばば・まさたか）
1968年佐賀県生まれ／1994年早稲田大学大学院建築学科修了、博報堂入社／1998年早稲田大学博士課程、雑誌『A』編集長／2003年〜設計事務所OpenA設立、「東京R不動産」運営／2008年〜東北芸術工科大学准教授／現在、東北芸術工科大学教授

髙橋一平（たかはし・いっぺい）
1977年東京都出身／2000年東北大学卒業／2002年横浜国立大学大学院修了／2002〜09年西沢立衛建築設計事務所勤務／2010年髙橋一平建築事務所設立／現在、横浜国立大学助教、法政大学非常勤講師／2012年SDレビュー入選、2014年ARaward、2015年東京建築士会住宅建築賞、2016年日本建築学会作品選集新人賞

乾久美子（いぬい・くみこ）
1969年大阪府生まれ／1992年東京藝術大学美術学部建築科卒業／1996年イエール大学大学院建築学部修了／1996〜2000年青木淳建築計画事務所勤務／2000年乾久美子建築設計事務所設立／2011〜16年東京藝術大学美術学部建築科准教授／2016年〜横浜国立大学大学院Y-GSA教授

島田陽（しまだ・よう）
1972年兵庫県生まれ／1995年京都市立芸術大学美術学部環境デザイン学科卒業／1997年同大学大学院修士課程修了／1997年タトアーキテクツ／島田陽建築設計事務所設立

渡辺菊眞（わたなべ・きくま）

1971年奈良県生まれ／1994年京都大学工学部建築学第二学科卒業／1997年同大学大学院工学研究科生活空間学専攻修士課程修了／2001年同博士課程単位認定退学（布野修司研究室）／2001〜06年渡辺豊和建築工房勤務／2003年太陽建築研究所（井山武司主催）にて共同研究／2007年D環境造形システム研究所設立／現在、高知工科大学准教授／2014年『タイの虹の学校学舎：天翔る方舟』（『新建築』1311）でAZ AWARD（Best Architecture Under1000m^2）、AR AWARDS for Emerging Architecture（Highly commended）、2015年A+Awards（Kindergarten category July Winner）受賞／2017年『金峯神社：森の本殿と里の拝殿』でWorld Architecture Community AWARD 23Cycle +26Cycle（Winner）

能作文徳（のうさく・ふみのり）

1982年富山県生まれ／2005年東京工業大学建築学科卒業／2007年同大学大学院建築学専攻修士課程修了／2010年能作文徳建築設計事務所設立／2012年東京工業大学大学院建築学専攻博士課程修了、博士（工学）取得／2012〜18年同大学大学院建築学系助教／現在、東京電機大学建築学科准教授／2010年「ホールのある住宅」（本誌1010）で東京建築士会住宅建築賞受賞／2013年「高岡のゲストハウス」（本誌1611）SDレビュー2013鹿島賞受賞／2016年第15回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展日本館展示特別表彰／2017年「西大井のあな」（本誌40頁）にてSDレビュー入選／著書に『WindowScape 窓のふるまい学』（共著、2010年、フィルムアート社）『WindowScape2 窓と街並の系譜学』（共著、2013年、フィルムアート社）『WindowScape3』（共著、2017年、フィルムアート社）

◎訂正
本誌2019年1月号において、誤りがありました。下記に訂正すると共にお詫び申し上げます。

表紙および背表紙の表記
正：井手孝太郎
誤：井出孝太郎

編集後記

2019年の座談月評が新たな評者として内藤廣さん、馬場正尊さん、髙橋一平さんを迎えスタートしました。昨年、一昨年とはまたガラッと変わった布陣で、今住宅について何を考えるべきか、12回を通して広く深く議論してまいります。本号に掲載した1月号の座談月評で、内藤さんが印象深かったものとして挙げたものに、2018年の総評で西沢大良さんが指摘した「建築家の文章の視野の狭さ、思考の浅さの傾向」がありました。西沢さんの評は、相手と目的と場所が特定される会話と違い、文章は想定外の読み手に読まれるもの、それは建築の本質と同じであると論じたものでした。それ故に建築家が自らの建築のコンセプトを示す文章で、「○○が好きだ」「○○に興味がある」という言葉は意味を成さず、その興味の強さを書き手が証明し、常に客観的に自らの建築と思考を見つめないといけないという指摘は、昨年の座談月評において度々議論したもので、それを代表して西沢さんに言及いただきました。本号の座談月評でもそれに端を発し、定型化に陥らず冒険を恐れない文章の書き方と誌面構成をしてくべきではないか、と議論は広がりました。批評の場となることを重要にしている本誌において、建築家の文章は大変重要なマテリアルです。さらにそれぞれの建築家、読者の皆さまとの議論を重ねて、伝える言葉を大切にしていきたいと思います。ぜひご意見をお寄せください。　（A）

細いスチールワイヤーを巧みに重ねた座椅子
アスプルンド

サイズ：w570×d560×h360×sh150mm。 価格：49,000円（税別）。

（株）アスプルンドは、細いスチールワイヤーを巧みに重ねたSCHEMA（スキーマ）の「BASKET ZAISU（バスケット ザイス）」を発売した。モダンな座椅子と京座布団の組み合わせで、シャープな印象を追求しながら快適な座り心地を実現した。光を照らすことで、繊細な曲線美の陰影が空間に広がり、和室をワンランク上の和モダンな空間に演出する。

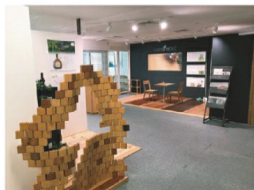
（株）アスプルンド
tel.03-3769-0637
https://www.asplund.co.jp

日常生活の中でさりげなく身体情報を測定
凸版印刷

価格：約60,000円～（460×460mmサイズ、設置費用・システム構築費別、税別）。

凸版印刷（株）は、「トッパンIoT建材」シリーズの新製品として、建材製造技術を用いて体組成計を組み込んだ、健康管理ができる床材「ステルスヘルスメーター™」を発売した。日常生活の中で自然に体重・体脂肪率などの身体情報を取得できる。情報は端末で閲覧可能、高意匠な色柄の床材で空間デザインを損なわないデザインとした。

凸版印刷（株）
tel.03-3835-6820
https://www.toppan.co.jp/

九州（福岡）ショールームをリニューアルオープン
オスモ＆エーデル

所在地：福岡県福岡市博多区博多駅前3-28-3 三州博多駅前ビル2F、営業時間：10:00 ～ 17:00、定休日・休館日：土曜、日曜、祝日、年末年始、夏季休暇。

ドイツの大手木製品メーカー「OSMO」ブランド製品及びドイツ製の外付けブラインド「ヴァレーマ」、樹脂サッシ「エーデルフェンスター」を輸入販売するオスモ&エーデル（株）は、九州（福岡）ショールームをリニューアルオープンした。従来より展示製品の種類をさらに充実しており、実際に商品に触れて、その特長を体験・体感できるショールームとなっている。

オスモ&エーデル（株）
tel.092-409-0131
https://osmo-edel.jp/

「NF-シャドーライン」を発売
アイジー工業

表面仕様として遮熱性フッ素樹脂塗装鋼板を採用し、高い塗膜耐久性で外壁メンテナンスの負担を低減する。価格：4,800円/m^2（税別）。

アイジー工業（株）は、金属製外装材「アイジーサイディング」の新商品「NF-シャドーライン」を発売する。繊細なパターンによる陰影が多彩な表情をつくり出し、やさしい色合いで温かみのある外観を演出する。新たな3色（Fシトロンクリーム、Fブロッサムピンク、Fメルティショコラ）を発売し、建物を美しく彩る選択肢を増やした。

アイジー工業（株）
tel.0237-43-1810
https://www.igkogyo.co.jp/

「無垢板型枠RC ウォール16 プレミアム」発売
ニチハ

価格：7,700円/枚、5,585円/m²（税別）。

ニチハ（株）は、塗膜の変色・褪色30年保証に対応する新商品「無垢板型枠RC ウォール16 プレミアム」を1月に発売する。コンクリート打ち放しに木目の質感を転写させた独特な意匠が特徴のサイディング。高級感と素朴さが融合した人工的なモチーフが生み出すやわらかな温もりが魅力。

ニチハ（株）
tel.052-220-5125
https://www.nichiha.co.jp/

重力を忘れるような座り心地のワークチェア
ハーマンミラージャパン

価格：128,000円～（ローバック）、133,000円～（ミドルバック）、142,000円～（ハイバック、すべて税別）。

ハーマンミラージャパン（株）は、新しいワークチェア「コズムチェア」を発売した。「重力を忘れる座り心地」を目指して設計された。ハーマンミラーが歳月をかけてデザインリサーチと技術開発を重ねて誕生した自動チルト機構を搭載。座る人の身体、姿勢、座るポジションに合わせて瞬時かつ自動的にサポートを提供する。

ハーマンミラージャパン（株）
tel.03-3201-1836
https://www.hermanmiller.co.jp/

宅配ボックスプラザ金沢がオープン
日本宅配システム

所在地：石川県金沢市広岡3-1-1 金沢パークビル11F。営業時間：9:30～17:00。定休日：土曜、日曜、祝日、年末年始、夏季休暇。電話もしくは、HPにて要予約。

日本宅配システム（株）は、宅配ボックスのショールーム「宅配ボックスプラザ」を全国で展開している。東京、大阪、横浜、仙台、広島、高松エリアに続き2018年11月に宅配ボックスプラザ金沢がオープンした。豊富なラインナップを揃え、他にはない宅配ボックスの機能や品質、安全性を体験することができる。

日本宅配システム（株）
0120-24-2901
https://www.j-d-sys.com

ユーザビリティーを考慮したスタイリッシュなデザイン
セラトレーディング

HG45010。価格：83,000円（税別）。

セラトレーディング（株）は、ハンスグローエの「AXOR UNO SELECT（アクサーウノセレクト）」シリーズの取り扱いを開始した。同シリーズは、シリンダー状のパーツを組み合わせたようなミニマルなデザインが特徴。高いデザイン性を持ちつつ、クリックで吐水・止水を行うことができ操作性に優れている。

セラトレーディング（株）
tel.03-3796-6151
https://www.cera.co.jp

「ウェイティングHL 1人掛けタイプ」を発売
イトーキ

エクストラハイバックタイプは、背中から頭まで全身をサポートした心地よい座り心地を提供する。価格：160,000円～（税別）。

（株）イトーキは、「ウェイティングHL 1人掛けタイプ」を発売した。心地よいクッションが好評の医療向けロビーチェア（ウェイティングHLシリーズ）で、病院の待合エリアだけでなく、デイルームエリアなどの空間に対応した1人掛けタイプ。安心してくつろげるよう3つの高さを選ぶことができる。

（株）イトーキ
0120-164177
https://www.itoki.jp/

「MAGIS東京ショールーム」リニューアルオープン
Magis Japan

所在地：東京都港区北青山1-2-3青山ビル1F。営業時間：10:30～19:00。定休日：日曜、祝日。

イタリアに本社を置く家具・家庭用品ブランドMagisの日本法人Magis Japan（株）は、MAGIS東京ショールームをリニューアルオープンした。イタリアらしさを意識した空間設計はDesign Frescoによるもの。以前よりも充実した展示空間に、日本初展示となる最新のインテリア商品などを多数展示した。

Magis Japan（株）
tel.03-3405-6050
http://www.magisjapan.com

新たな質感・素材感のガラス質不燃化粧パネルが誕生
アイカ工業

施工イメージ。サイズ：w900×l 900×t4mm。価格：55,600円/枚～（税別）。

アイカ工業（株）は、従来の不燃化粧板とは異なる新たな質感・素材感を持つガラス質不燃化粧パネル「グラールG」を発売した。ガラスの透明感や奥行感と、一瞬の美を閉じ込めたようなオリジナル意匠が特徴のガラス質不燃化粧パネル。ガラスの存在感と遊び心のあるデザインが印象的なアクセントパネルとした。

アイカ工業（株）
0120-525-100
http://www.aica.co.jp/

木階段用ノンスリップ「Previo M1」
アシスト

天然木と調和する落ち着きのあるブラウン系5色と、パステルカラー5色のカラーラインナップ。

（株）アシストは、意匠設計者向けブランドAFOLAより、木階段用ノンスリップ「Previo M1（プレビオ エムワン）」を発売した。木階段にフラットに納まるミニマルデザインが特徴。踏板を加工し、滑り止めを落とし込むディテールにより美しい納まりを実現した。洗練された納まりにより快適な使い心地を可能にする。

（株）アシスト
tel.03-3859-5670
https://www.afoladesign.com

広告掲載企業

エーアンドエー …… 表4
ケイミュー …… 表2
LIXIL …… 4～9
ユニオンシステム …… 10
デザインファーム建築設計スタジオ …… 12

トピックス掲載企業

(50音順)
P.166-167

アイカ工業
アイジー工業
アシスト
アスプルンド
イトーキ
オスモ&エーデル
セラトレーディング
凸版印刷
ニチハ
日本宅配システム
ハーマンミラージャパン
Magis Japan

『新建築住宅特集』資料請求方法について

個人情報保護法に基づき、読者の皆様の個人情報保護を図るため、新建築社ではホームページ上に広告掲載企業を閲覧できるようにし、各企業のホームページをリンクいたしました。
資料請求をされる際は、各広告掲載企業へ直接資料請求を行ってください。

新建築社ホームページ　http://www.japan-architect.co.jp

「青山ハウス」
来春リニューアルオープン

新建築社の「青山ハウス」では,
2016年のオープンより，建築や都市に関わる人びとのための情報収集・情報発信の拠点として,
レクチャーや展示などを行うコミュニティスペースを運営してきました.
このたび「青山ハウス」の次なる展開として,
2~3階部分を新たにリノベーションし，来春にリニューアルオープンします.
リノベーションは1階に引き続き,
建築家の乾久美子さんに担当していただきます.

詳細については，順次情報を公開していきます.

一般財団法人 吉岡文庫育英会
〒107-0062 東京都港区南青山2-19-14
URL：http://www.yoshiokabunko.or.jp/

新建築 住宅特集 2019年2月号〈第394号〉 昭和61年7月8日第三種郵便物認可 平成31年1月19日発行 毎月1回19日発行

定価二、〇五七円 本体一、九〇五円

ISSN 1342-6516
雑誌 14905-2

4910149050292
01905

発行所|株式会社新建築社|東京都千代田区霞が関三丁目2番5号 霞が関ビルディング17階|〒100-6017
電話|03-6205-4380 大代表 振替|00150-6-30658